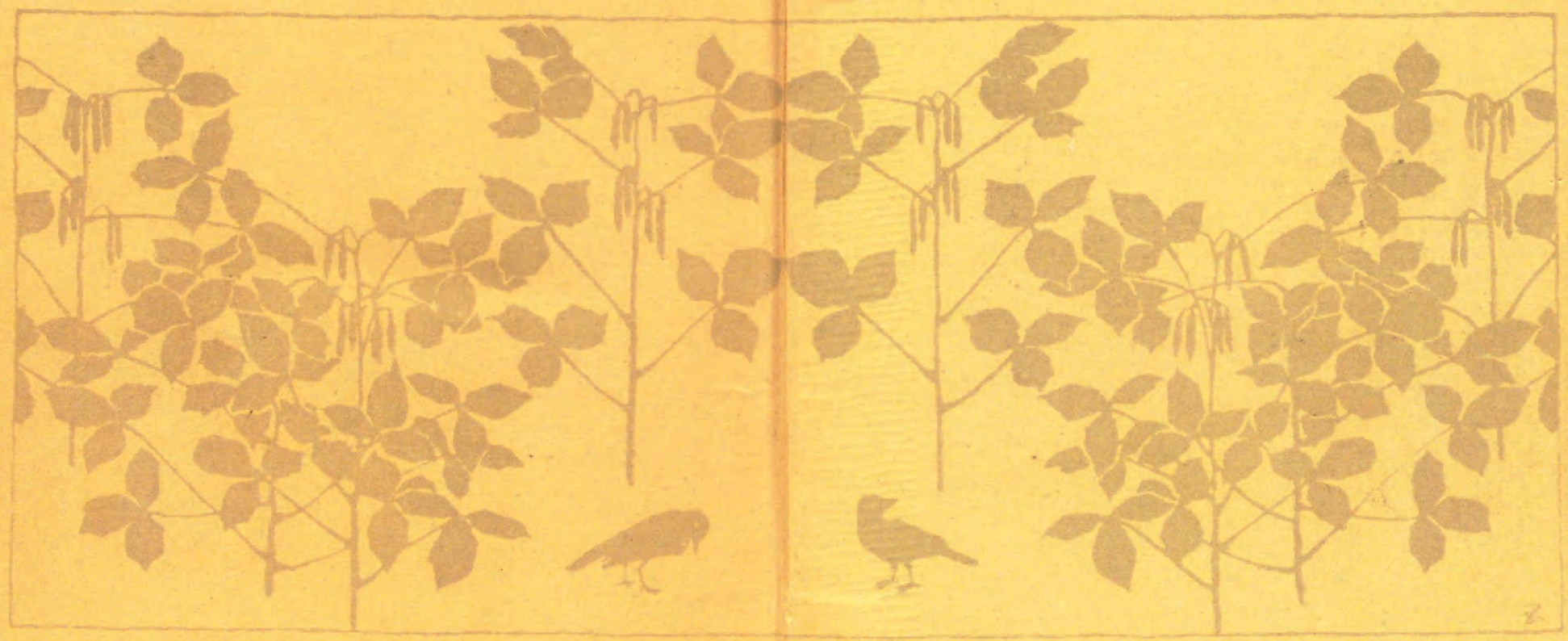
081
Y978
T
00974943



御伽草紙

全

081
1978
T III
(73)

消

國立國會
49.4.15
圖書館藏書

數量更正
5933

974943

緒言

室町時代より江戸時代の初期にかけて、婦幼の讀物として述作せられし小説を概稱して御伽草子といふ、此名稱はいつ頃に始まりしか定かならねど、德川氏の初期に御伽物語、御伽婢子、新おとぎ等の書名多く行はれしより察するに、此類の小説をおしなべて御伽草子といひ習はしょこと、猶德川氏の中葉以後兒童の玩弄に供せし繪解本を、一般に赤本、草雙紙など稱へしと同樣なりしなるべし。享保の頃にや、大阪の書肆澁川某が文正草子以下酒呑童子に至る二十三種を擇び、繪入横本の叢書として刊行せしより廣く世に知られて、これに入りたるもののみを御伽草子と思へる人もあれど、こは只手あたり次第に採り集めしばかりにて、深き理由あるべくもあらず。

さてこの類の草子は其數も多く内容も雜駁なれど、まづは戀愛譚、武勇譚、繼子いぢめ、遁世物、緣起物、異類物等に區別し得べし。趣向文章俱に幼稚にして、筋の通らず前後矛盾せるもの、敍述に主客輕重の權衡を失ふもの、挿話の冗漫煩縟に過ぐるもの、引用の詩歌故事

その當を得ざるものなど疵瑕百出、加ふるに一定の型式に陷りて摸倣につぐに摸倣を以てし、依様葫蘆の弊を極む。美人はいづれも丹花の脣、青黛の眉、翡翠の髪ざしあざやかに、唐土の楊貴妃、李夫人、我朝の衣通姫、小野の小町、染殿の后と引較べられ、悲歎の時はいつも天に仰ぎ地に伏し、流涕焦れ泣きて是は夢かや現かやとかこち、徒らに陳套の極文句をつらねて、語格調はず文脈通ぜず、且作者の文盲なる、頼朝を左近の右大將といひ、公卿の私邸に日の御座あるなど、創意もなく知識もなき衰世の文學たる陋態を遺憾なく暴露しつくせり。さればその文學的價値は固より多くいふに足らねども、平安文學の末路を辿り、江戸文學の發程を知らんとする者にとりては、之によりて王朝の戀愛小説がいか程まで墮落せしか、江戸の淨瑠璃小説はいづくより萌えいでしか、その源委を尋ぬる好史料たるべく、又今昔物語以後の口碑傳説を保存するものとして其價値少しとせず。

本集收むる所すべて三十九種、そのうち文正草子より酒呑童子に至る二十三種は、明治二十四年今泉畠山二氏の校刊せられしものあれど、誤脫も少からず、且文章に修正を施したる箇所多く、却て原書の面目を毀損せし嫌なきにあらず、今は假字を一定し漢字を宛てたる外は一切原本に從へり。三人法師以下の十六種は萩野氏の新編御伽草子、平出氏の室町時代小説集等に收錄せられざるもののみを擇べり、これらは概ね傳本稀少なるものなれば、當代の文獻に志ある人々のために便益少からざるべきを信ず。

今三人法師以下新採の十六種について簡略なる解題を施さんに、

三人法師（刊本）　一名を三人懺悔冊子といふ。高野山にて遁世の法師三人相會して、互に出家の來歴を語ることを敍せり。そのうち二人の話は相關聯し、他の一人の話は獨立せり。就中篠崎六郎左衞門が遁世出家の後、その鄕里河内に至りて、二人の子に邂逅する一段は、余の所藏せる朽木櫻（室町時代小説集に收む）と酷似す。遁世物中の傑作にして、七人比丘尼四人比丘尼等の懺悔物語は皆此書を祖とするものの如し。こゝに收むるものは鱗形屋本を底本とし、寛永頃とおぼしき繪入刊本と荒五郎發心記と題せる古寫本とを以て校合し、尙續群書類從本、史藉集覽本（明治十六年刊行の分）を參酌せり、刊本は文章殆ど異同なきも、發心記は出入稍多し。

大佛供養物語（寫本）　東大寺の俊乘坊重源入唐して、極樂の曼陀羅、五祖の眞影を將來せしを、源頼朝、法然上人をして東大寺に供養せしめんとす、上人叡山を憚りて辭退せしかば、叡山、園城寺、奈良の僧をして三座の說法をなさしむる事となり、道俗男女來り集るもの無數なりしが、其說法いづれも傾聽するに足るものなく、群衆皆慊焉たり、頼朝の北方も亦失望して、法然上人の說法を聽聞せんことを請ふ、頼朝强ひて上人を請ず、是に於て上人來りて、唱名の功德を述べ念佛往生の事を說きたるに、聽衆皆感に堪へたりと。享祿四年の寫本なり。

俵藤太物語（刊本）　田原藤太秀鄕が龍神の仇敵たる三上山の蜈蚣を退治して、龍宮より取れども盡きぬ米俵と祇園精舍の佛供養の時に鑄し釣鐘等を返禮として贈られ、又龍神の加護によりて將門を滅す事を記せり。

秀衡入（寫本）　牛若奥州に下りて秀衡の館に入り、平氏追討の事を託するに終る。十二段草子の後を受けたるものにして、牛若の威光と秀衡の豪富とを寫すを主とせり。

いはやのさうし（刊本）　一名をたいのやひめといふ。中納言有末卿といふ人白河の姫君と契りて一女を生む、此女十歲の時母死せしかば、新に後妻を迎ふ、この北方一人の娘をつれて嫁ぐ。有末卿前妻の姫君のために西の對の屋をしつらひて住ます、よりて彼の姫を對の屋姫と呼べり。對の屋十三歲の時中納言太宰帥に任ぜられ、家族を伴ひて下向す。下向の途次北方對の屋を失はんと謀り、おのが乳母子佐藤貞家を語らひ、姫を海中に投ぜしむ、貞家姫を殺すに忍びず、淡路の海邊に棄てて歸る、明石の漁夫之を見つけて、おのが住居とせる岩屋に伴ひ歸り、主の如くかしづき養ふ。其後姫は關白の子二位中將なる人の、伊豫の溫泉より歸京の途次、明石の浦に舟がかりせしに見出され、榮華を極むることを敍せり。二位中將が蜑の子をつれ歸りたりと聞きて、その母北政所これを歎き、姫を恥ぢしめ中將を懲らさんと謀り、中將の姉妹四人を美々しく著飾らせ、列座の中へ對の屋を引見したるに、容貌技藝いづれもおのが娘に立ち勝りたる見て、我を折りてめでくつがへる一節は、鉢かづき姫の趣向と頗る相似たり。

花みつ（寫本）　播磨の國守赤松則祐の臣岡部某、前妻の出に花みつ、後妻の腹に月みつといふ二人の男子をもてり、戰亂の世の習ひ、かゝる足手まとひありては奉公のさはりとなるべしと、二子をちごとして書寫山の別當に託す。繼母花みつの事を父に讒し、何彼につけて冷遇せしかば、花みつは世をはかなみて、日頃親しき二人の僧に弟月みつを殺害しくれよと頼みて、豫め手筈を定めおき、みづから月みつに代りて殺さるゝ事を敍せり。兒物語に繼子いぢめを結びつけたるが此書の特色なり。

美人くらべ（刊本）　丹後少將といふ人五條宰相の姉娘の美人なるを聞き之を娶らんとす、宰相の後妻おのが生みたる妹娘を進めんと欲し、侍に命じて前妻腹の姉娘を失はしめんとせしに、侍は私に姫を助けて逃れしむ。少將姫の行くへを尋ねて遙に東國に至り、遂に之を伴ひて歸り、めでたく夫婦の契を結ぶ。

花鳥風月（刊本）　葉室中納言の邸に人々集りて扇合を催しけるに、或人の出しゝ扇に風丰都雅なる貴公子と容顏美麗なる上臈とを畫きたるあり、或は業平ならんといひ、或は光源氏ならんといひて決せず、終に花鳥風月といふ姉妹の女巫を招き、梓にかけて卜はしむ。刊本と寫本とは文辭に異同少からず。

紫式部の卷（刊本）　紫式部が上東門院の仰せをうけ、石山寺に籠りて大齋院のために源氏物語を作りしこと、安居院法印澄憲僧都が源氏供養として石山寺にて表白文を述ぶることを記す。謠曲の源氏供養、宇治加賀掾の淨瑠璃の源氏供養等と同種のものにして、源氏表白に依據したる作物なり。

伊香物語（寫本）　近江伊香郡の郡司某の妻美にして才藝あり、國守某此女を得まほしく思ひ、郡司某を招き酒興のうへ、賭事に託して郡司勝たば我所領の半を與ふべし、勝たざれば汝の妻を得さすべしと約して、堅く封じたる文筥を出し、此内に和歌の上の句あり、此下の句をつゞけよ、和歌の上下付合ひたらば汝が勝なりといふ。郡司家に歸りて妻に謀る、妻石山の觀音に參籠して夢想を請ふべしといふ、郡司之に從ひ滿願の日神託を得て、首尾よく下の句をつけて、所領を得て富み榮えしとなり。文章よく調ひ同類の書中に一頭地を拔けり、著作

の時代は明かならねど、或は國學者などの手によりて修整せられしものにあらずや、猶考ふべし。

ふくろふ(刊本)　中むかし加賀の國かめわり坂の麓にふくろふ鳥あり、鷺姫を戀ひ山がらを媒として、さまぐ〜かき口說き、終に思ひを遂げけるに、かねて鷺姫に心ありし上見ぬ鷲、嫉妬のあまり鷺姫を殺害せしかば、ふくろふ悲歎の情に堪へず、法師となりて其菩提を弔ふ。

三浦爲春のあた物語(寛永十七年)は之を敷演せしものなれど、和漢儒佛の引事うるさく、德川期の色彩いちじるし。

胡蝶物語(寫本)　都近く妻子もなく、只春秋の花にうき身をやつし、さまぐ〜草木の種を集め、前栽に植ゑて之を樂む胡蝶と諢名せられし隱士あり、一朝母を失ひて會者定離の理を感じ、草木の色香にめでて道心を失はんことを憂ひ、これをも棄てて東山の邊に墨染の衣を纏ひ行ひ澄ましゝに、或夜數多の上臈の草庵を叩きて敎化を請ふより、庵主は懇に佛道の難有き旨を說きたるに、いづれも感動して、まこと我等は嘗て上人の寵愛をうけたる花の精なり

と語りて、各結緣のために一首の歌を詠むといふに終る。後水尾天皇の御作なりといふ。

玉水物語(寫本)　高柳宰相殿の姫君の優にやさしきを、或日狐の垣間見て思慕の情抑へ難くせめてあたり近く侍りて切なる心を慰めんものと、女子に變じて姫の侍女となり玉水姫と呼ばれしが、或時紅葉合のありしに、姫君のために珍しき紅葉の枝を求めいでて捧げ奉り、一時にほまれを揚ぐ。此事ありしより時の御門姫君を入內せしめ給ふ。玉水且喜び且悲み、一篇の長歌に苦衷を漏らして、もとのすみかに歸る。狐が姫を愛するあまり其身を汚すことを敢てせざりし點、此類の小說中において稍異色とすべし。紅葉合と題する異本あり、趣向は同一なれども文辭は全く別なり。

鶴のさうし(刊本)　宰相にて右兵衞督を兼ねし人あり、慈悲心深く他人の饑寒を見るに忍びず、常に衣食を施しゝかば家貧しくなりて片山里に籠りぬ。或日獵師の雛鶴を捕へて殺さんとするを見て、さまぐ〜に言ひ宥め、家寶の黃金作の太刀に代へて鶴を放ちやりぬ。翌日やごとなき上臈道に迷ひて宰相の庵室に一夜の宿を乞ひ、終に妹背のかたらひを爲す。上臈が

携へもちし黄金にて家を作り、下人多く召使ひて樂しく日を送りしに、國守宮崎某遊獵のついでこの上臈を垣間見て、軍兵を以て其家を圍み之を奪はんとす、時に空中より鷲雕等の鳥類群り來りて、宮崎の軍を惱まし退く。宰相は始めて上臈のたゞ人ならぬを知り、その素性を問ふ、上臈今は父母の許に歸るべき時節到來せり、また生を替へて再び君に契るべし、誠は君に助けられし澤邊の鶴なりとて、虛空高く飛び去りぬ。其後宰相は三條内大臣の女たまづる姫と二世の縁を結び、めでたく繁昌すとなり。

草木太平記（刊本）　吉野の里近き一むら薄、八重櫻の花の姿を籬の隙に見そめしより、色深き戀となり、小萩を仲立として言ひ寄り、いつしか花の下紐打解けて、草の枕をとりかはしたるに、梅聞きて大に怒り、薄が野邊に火をかけて燒き拂はんと、一味の木の勢を催せば、薄も草の一類を集めて相戰ひ、互に勝敗ありしが、楠の木の加勢に薄敗北して、はら一文字に搔切つて淺茅が原の露と消えにしかば、櫻は花の衣を改めて墨染となり菩提を弔ひしとなり。こは鴉鷺合戰物語、魚鳥平家の系統を引けるものにて、武器の名稱などいと詳かにして、

草木に因みたる地口も頗る巧なり、思ふに德川時代の作物なるべし。

歌舞妓草子（寫本）　お國が北野の社頭にて念佛踊を興行せし際、見物の中より名古屋山三郎の亡靈現れいでて、互に懷舊の情を述ぶることを綴れり。小町草紙と似寄りたる趣向なれど、彼の和歌に代ふるにこれは小唄を以てしたれば、近代的の情味豐にして、本集中この一篇を見るは恰も累々たる頑石の間に、撫子の一もと咲き出でし感なくばあらず。山三郎お國死後の作なるべく、元和寛永頃のものならんか。

大正四年四月春雨花を催す夕

校訂者　藤井紫影

御伽草紙　目錄

文正ざうし……一
はちかづき……二七
小町草紙……五五
御曹子島わたり……七一
唐糸草紙……八九
木幡ぎつね……一二一
七草草紙……一三一
猿源氏草子……一三五
物くさ太郎……一四七
さざれいし……一六七
蛤の草紙……一七一
小敦盛……一八五
二十四孝……一九五
梵天國……二一一
のせざる草紙……二三三
猫の草紙……二四一
濱出草紙……二五一
和泉式部……二五五
一寸法師……二六三
さいき……二六九
浦島太郎……二七七
横笛草紙……二八五
酒呑童子……二九九
三人法師……三二三
上……三二三
下……三四一
大佛供養物語……三五七
俵藤太物語……三七三

上……三七三
下……三九〇
秀衡入……四〇七
いはやのさうし……四一九
上……四一九
下……四三九
花みつ……四五七
美人くらべ……四七一
上……四七一
下……四八四
花鳥風月……四九九
紫式部の卷……五一七
伊香物語……五二九
ふくろふ……五四一
胡蝶物語……五五五
玉水物語……五七三
上……五七三
下……五八三
鶴のさうし……五九三
上……五九三
中……六〇五
下……六一〇
草木太平記……六二九
卷上……六二九
卷下……六四六
歌舞妓草子……六六三

文正ざうし

文正ざうし

年頃のもの―多年仕へしもの

それ書より今にいたるまで、めでたき事を聞き傳ふるに、賤しきものの殊のほかになりいでて、始よりのちまでも、物憂きことなくめでたきは、常陸の國に、鹽燒の文正と申すものにてぞ侍りける。そのゆゑを尋ぬれば、國中十六郡のうちに、鹿島の大明神とて、靈社ましく〳〵けり。かの宮の神主に、大宮司と申す人おはしけるが、長者にてぞましましける。四方に四萬の倉をたて、七珍萬寶のたから滿ちく〳〵て一つ缺けたることもなく、よろづ心にまかせて、いろ〳〵あり。家のかずは一萬八千軒なり。郎黨に至るまで數をしらず、女房たち仲居のもの、八百六十人なり。男子五人ともに、みめかたち藝能萬人にすぐれたり。又大宮司殿の雜色に、文太といふ者あり、年頃のものなり。下郎なれども心は正直に、主の事を大事におもひ、よるひる心にたがはじと、宮仕へしけれども、心をみんとや思はれけん、主の大宮司殿、汝年頃のものといへども、わが心にたがふな

081.6
Y

いづくにことも　おろか云々―何處にありとも君を疎略に思ふことなし

ろはの空なるもの―風來の者

り、いかならん處へも行きて過ぐべし、また思ひもなほしたらんには、歸りまゐれとの給ひければ、文太おもひけるは、たとへ千人萬人ありといふとも、わが命あらんかぎりは、奉公申すべきと存じ候ひつるに、かゝる仰せくだるうへは力なし、さりながらいづくにこともおろかに思ひ申すべからず、又やがてこそまゐり申すべしとて、いづちともなく行くほどに、つのをかが磯、鹽燒く浦につきにけり。ある鹽屋に入りて申すやう、これは旅のものにて候ふ、御目をかけて給はれと申しければ、あるじ聞きて、うはの空なるものなれども、見るよりそゞろにいとほしく思ひて、その家におきける。日數ふるほどに、あるじ申しけるは、かくてつれ〴〵に

徳人―富人

なりにける―原本「なり」にけり」とあり、今改む

須達長者―天竺の富豪

主な嫌ひそ云々―主人の身分を論ぜず恩の厚薄を思へとなり

おはせんより、鹽やく薪なりとも、取りたまへと言ひければ、いと易き事なりとて薪をぞ採りける。もとより大ぢからなれば、五六人して持ちけるよりも多くしてぞきたりける。

あるじなのめに悅びて、又なき者と思ひける。かくて年月をふるほどに文太申しけるは、われも鹽やきて賣ちばやと思ひ、あるじに申すやう、この年月、奉公つかまつり候ふ御恩に、鹽竈一つ給はり候へかし、あまりにたよりなく候へば、あきなひしてみ候はんと申しければ、もとよりいとほしく思ひければ、鹽釜二つとらせけるに、鹽やきて賣りければ、此文太が鹽と申すは、こゝろよくてくふ人病なく若くなり、また鹽の多さつもりもなく、三十層倍にもなりければ、やがて徳人になりたまふ。年月ふるほどに、いまは長者とぞなりにける。さる程につのをかが磯の鹽屋ども皆々從ひける。さるほどに名をかへて、文正つねをかとぞ申しける。堀のうち七十五町にかいこめて、四方に八十三の倉をたて、家の棟かず九十間つくり並べたり。昔の須達長者もかくやと思ひける。さればこそ常陸の國のものども此頃のことなれば、主な嫌ひそ、恩をきらへ、なにか苦しかるべきとて、皆々文正にぞ使はれける。しかれば家の子郎黨に至るまで、三百餘人のほか、雜

色、草刈、しもべに至るまで、そのかず知らず。たからはいかなる十善の君と申すとも、これには過ぎじとぞ覺えける。

さりながら男子にても女子にても、子はなかりける。あるとき大宮司殿此よしきこしめし、さても不思議におぼしめし、彼を召して尋ねんと思ひ給ひ、文太をぞ召されける。久しくまゐり候はねば、うれしく思ひて、いそぎまゐりける。大庭にかしこまりてゐ申しける。大宮司殿御覽じて、その身こそ賤しきとも、めでたきものなれば、いかで庭には置くべきとて、これへ〳〵とこそ召されける。さるほどに文太は廣椽までぞまゐりける。大宮司殿のたまひけるは、文太はまことや限りなき長者となり、十善の君にてましますとも、われにはいかで勝り給ふべきと、かたじけなくも申すとかや、さやうに冥加なきこと、何とてか申すぞとのたまへば、文太かしこまつて申すやう、わが身のいやしき有樣にて、これ程の寶を持ちて御事おぼえず、あやなく申して候なりと申しければ、いか程のたからなれば、かやうに思ふぞとのたまへば、金銀綾錦、七珍萬寶かずしらず、四方につくり並べたる倉を申すにかず知らずとぞ申しける。大宮司殿きこしめし、誠にめでたきものの果報かな、さて末を繼ぐべき子はあるかとの給へば、未だ候はずと申しける。

御事―候事の誤にて、寶を持ちて候ふ事と續くなるべし、一本には「かやうに寶をもち候ことよと思ひ候まゝあやなく申して御座候へ」とあり

それこそつたなきことなれ、人の身には子ほどの寶よもあらじ、たゞその寶を神佛にまゐらせん、一人にても子を申すべしとの給へば、文太げにもと思ひ、家に歸りて是非なく女房を叱り、既に追ひいだす。女房これはいかなる事ぞと騷ぎければ、文正申しけるは、大宮司殿一人の子をもたぬ事を、本意なくおぼしめすなり、いそぎ子を産みてたび候へと申しければ、廿卅の時だにうまぬ子が、四十になりて何として叶ふべき、その儀ならば力なしと言ひければ、文正げにもと思ひ、大宮司殿も神佛にも申せとこそ仰せられつれと思ひて、さらば神佛へまゐりて申しうくべしと申しける。女房げにもと思ひ、七日精進して、鹿島の大明神へぞまゐりける。いろ〳〵の寶をまゐらせ、三十三度の禮拜をして、ねがはくは一人の子をたび給へとぞ祈り申しける、七日と申す夜半に、かたじけなくも御寶殿の御戸を開き給ひ、誠にけだかき御聲にて、汝申すところさり難きにより、この七日のうち到らぬ處なく求むれども、汝が子になるべき者なし、さりながらこれをたぶとて、蓮華を二ふさ給はりて、かき消すやうに失せにけり。

さるほどに、文正よろこび、八箇國にすぐれたる男子を生ましめ給へとぞ申しける。九月の苦み十月のすゑには、產の紐をときたる。三十二相たらひたるいつくしき姫にてあ

つたなき―果報乏しき
是非なく―遮二無二
既に―早くも
さり難き―否みがたき

おとなしき女房―頭だちたる老女
かいしやく―介錯、附添

りける。文正腹をたて、約束申せしかひもなく、女を生みたる事よとて叱りける。そのなかに、おとなしき女房たち申すやう、人の子に姫君こそ末繁昌してめでたき御事にて候へと申しければ、さらばうちへ入れ申せとて、寵愛申しける。乳母かいしやくまでも、みめよきをすぐり付けにけり。又つぎの年も尚光るほどの姫御前をまうけける。文正なにぞと申せば、いつものものと申しける。文正腹をたて、さきこそ約束たがへめ、さのみはいかで人の命を背き給ふぞ、その子を具して、いそぎ出で給へと、叱りけること限りなし。その時御前にありし人々申しけるは、男子にてましまさば、大宮司殿にこそつかはれさせ給はんに、御かたち勝れたる姫たちにて候へば、國々の大名、いづれか婿にならせ給はざるべき、又は大宮司殿の公達と申すとも、御むこにならせ給ふべし、これほど然るべきことなしと申しければ、その時文正げにもと思ひ、さらばとく〳〵入れ申せとありければ、見るに姉御前よりもいつくしく有りければ、又乳母かいしやくまでも、みめかたちよきを揃へてつけにけり。姫たちの御名をば夢想にまかせ、れんげを給はると見たれば、姉は蓮華妹を蓮御前と付け、いつきかしづき給ふほどに、年月かさなり、光るほどの君に見え給ふ。よみ書よろづ利根にて歌草子ならぶかたなし。これを聞き八箇

夢想―夢中の神託

阿彌陀の三尊―中央に彌陀左右に観音勢至を据うるをいふ

位たかき公達などこそ云々―位高き公達などならば或は望にも應ぜん

國の大名たち、われも〳〵と心をつくし、文玉章かぎりなし。姫たち思ひ給ふやう、かゝるあづまに生れけるぞや、都のほとりにも生れなば、世にあるかひには、女御后の位をも心がけ、さて世の常のことは思ひよらずと思はれける。文正は國中の大名いづれも仰せをかうぶり、面目と思ひて、姫に此よし申せば、耳にも更に聞きいれず、あかし暮し給ふ。父母も子ながら心にたがはじと、もてなし給ふ。此姫たちは來世の事まで深く思ひいりて、常にものまゐりし給ひけるを、大名たち道にて取るべきよし聞えければ、文正此よしをきゝ、西の方に御堂をたて、阿彌陀の三尊をすゑ奉り、心のまゝに姫たちをまゐらせけり。かやうに用心深くいたせば、道にて奪ひとる事もかなはず。大宮司殿此よしを聞召し、文正を召して、汝まことや光るほどの姫をもちたると聞く、大名たちの方へいだすべからず、わが子にいだすべしとの給へば、文正うれしく思ひ、やがてわが家にかへり、あなめでたや、大宮司殿の公達を、婿にとるなり、皆々御ともせよとのゝしりける。やがて姫たちのかたへ行きて、めでたや、大宮司殿よめにすべきよし仰せ候ふと申しける。姫たちは淺ましげなるけしきにて、涙の色みえければ、呆れはててぞゐたりける。姫たち仰せけるは、いかなる女御后にも、又は位たかき公達などこそ、もしも

思ひつき候はんずれ、さなくば尼になりて後世菩提を願ふべしと申しける。文正面目なく、大宮司殿に此有樣を申せば、大宮司殿は腹をたて、汝が子共の分として、みづからを嫌はんこと不思議なれ、いそぎまゐらせずば汝を罪科に及ばすべしとの給へば、文正又娘のかたへ行き、此よし申しければ、姫たち仰せけるは、かやうの道はたかきも賤しきにもよらぬ事にて候へ、たゞ尼になりて、うき世を厭ふか、さなくば淵河へも身をいれんと歎きける。文正さめ〴〵と泣きて、又大宮司殿へまゐり、此よしを申しければ、それほどの儀ならば、力なしとぞ仰せける。さてその後、衛府の藏人みちしげと申す人、常陸の國司を給はりてくだり給ひけり。此人はなのめならず色好みにて、いかなるやまがつ賤の女なりとも、みめかたち世にすぐれたる人をと心がけておはしける。國中の大名たち、われも〳〵と見せけれども、心にあはずして、あかし暮し給ひけり。ある人申すやう、鹿島の大宮司の雜色に文正と申すもの、光るほどの娘を持ちて候ふ、國中大名われも〳〵と申されけれども、用ひ候はず、これは天人のあまくだり給ふかと、おぼえ候ほどの娘二人もちて候ふ、主の大宮司仰せられて召され候へかしと申しければ、よろこび給ひ、大宮司を召し、まことやみうちの雜色に、文正とやらんもの、ならびなき娘を

見せけれども―女を見せたる也

主の大宮司―此下に「に」の字を添へて見るべし

もちたる由うけ給はりて候ふ、御はからひにて給はり候へ、そのよろこびは國司をゆづり申すべしとの給へば、かしこまつて候へども、すべて人の申すことをも聞かず、親の命にも從はず候ふなり、さりながら申してみ候はんとて、御まへをたち給ふ。文正も御とも申しけるを召して、かゝるめでたき事なれば、汝が娘を國司の御みだいに參らせよと仰せあり、さあらば國司をわれに給はらんとなり、汝をば大官になすべきなり、面目此うへはあるべからずとの給へば、文正うれしげにて、かしこまつてうけ給はり候ふ、さりながら親の申すことを用ひぬものにて候へば、いかゞ申し候はんとて歸りける。門の程より、あなめでたや女子は持つべき物なり、國司の御舅になるぞや、みな〳〵用意して御とも申せと申しつゝ、娘に向ひて申すやう、さて〳〵めでたき事なり、いち〳〵に申せばこれをも受けでさめ〴〵と泣きて居たりける。母も文正もこれをさへ嫌ひ給ふことの淺ましさよ、此事叶はぬものならば、つねをか何となるべきと言ひて、いろ〳〵申せども返事もせず。あまりに口說きければ、姫たちは大宮司殿の公達を嫌ひて候へば、大宮司殿も心のうちは、さこそ思召さん、たゞ身を投げんとぞ申しける。此うへはとて、大宮司殿へまゐり此よし申しければ、大宮司殿は、國司へはじめより終

よろこび―返禮

めでたき事なり―此下に脫文あるべし

まで語り給へば、此よし聞召し、此程はあひみん事を思ひて、ものうき鄙の住居もなぐさみぬ、今はそのかひなしとて、都へのぼり給ひける。日數かさなりて、都へつかせ給ふ。まづ天下の御所へ參りける。折ふし國々の物語ども侍りしに、衞府の藏人、わが心にかゝるまゝに申しけるは、いづれの國と申すとも、常陸の國ほど不思議なる者のある國は候ふまじと申しければ、てんかの御子に二位の中將殿、此由きこしめし、何事やらんと御尋ねありければ、鹿島の大宮司と申すものが雜色に、文正と申すもの、いかなる前世のいはれにや、七萬寶たからに飽きみち樂み榮ゆるのみならず候ふ、かの大明神より御利生に給はりたる姫を二人もちて候ふが、優にやさしく光る程のみめかたち、心ざま藝能にいたるまで、人間のわざとも覺えず候ふときゝ、みちしげもとかく申して候ひしかども、更に辭くけしきもなく候ふ、主の大宮司をはじめて、國々の大名共、われも〳〵と申しけれども聞きいれず、ふたりの親が申すことも聽かず候ふと、語り申しければ、中將殿はつく〴〵と聞召し、やがて見ぬ戀とならせ給ひて、いつとなく惱み給ふ。その頃しかるべき公卿殿上人の姫君たちを、われも〳〵と申されけれども、更にきゝいれ給はず、うちふし給ひける。殿下もきたの政所、御祈りさま〴〵なり。やう〳〵月

天下―正しくは殿下とあるべし

二位―原本「三位」とあり、一本によりて改む

七萬寶―七珍萬寶の誤なるべし

日もたちければ、秋のなかばなれば、隈なき月にあこがれ、中將殿たちいで給ひければ、なぐさみ申さんとて、管絃をぞはじめ給ひ、さま〴〵の御あそび共あり、中將殿かくなん、

月見ればやらんかたなく悲しきをことゝとふ人のなど無かるらん

かやうによませ給ひて、袖を顏にあて涙ぐませ給ひて、又うちふし給ふを、兵衞のすけみとゞめ申して、此ほど君の例ならぬ御うち、いかなる御事にやと思ひ候へば、人しれず物思はせ給ひけるを、今までさとり申さぬ事よとて、兵衞のすけ、式部の大夫、とうまのすけ、三人御まへにまゐりて申しけるは、これ程におぼしめし候ふ御ことを、仰せもいださせ給はず、いかなる唐土までも尋ね申すべし、何か苦しく候ふべきなどと申しければ、包めど色にいでけることの恥しさよとおぼしめし、われながらうはの空なるやうに、憚り多く侍れども、今は何をか包むべき、過ぎにし春のころ、衞府の藏人が物語り候ひし大宮司がうちの雜色に、文正むすめに、かたちすぐれたるを持ちたる由をきゝしより、一すぢに思ひ侍るなり、人をくだして召したけれども、世のそしりも憚りあれば、たゞ思ひに身をくだき候ふとて、御涙にむせび給ひければ、人々申されけるは、昔

月見れば―此歌一本に「月見れどやるかたもなく悲しきは人もとひこぬ秋の夜すがら」とあり

みとゞめ―みとがめの衍か

御うち―御こゝちの衍なるべし

御事―原本「御申」とあり、今改む

より戀の道かくこそ候へ、たゞ常陸の國へ御とも申してくだり候はんと申しければ、中將殿の御よろこびは限りなし。かくは申しながら、いかゞして下り申すべき、都にてだにもまぎれなく、いつくしくましますに、あづまの奥にては、いよ〳〵まがふかたも有るべからずと、案じめぐらすに、たゞ商人のまねをして、いろ〳〵の賣物をもちたらば然るべしとて、さま〴〵の物をもちて、各々せんだんびつを背負ひ、既に下らんとぞし給ひける。中將殿、さすがはる〴〵の道に赴き給はんに、今一度父母たちにも見えたてまつらんと思召し、御前に參り給へば、此程は何とやらん惱みがちにておはしませしが、立ちいで給ふうれしさよと、よろこびあひ給へば、中將殿は、遠國へ下らん事もしろしめさず、あとにて歎き給はんことよと、なげき御涙ぐみ給へば、御ふたところながら、袖を顔にあて給ふ。中將殿思ひきつていで給ひけり。御心のうちかきくれて、御裝束をぬぎおかせ給ひて、御直衣の袖にかくなん、

束路のかたみとてこそぬぎ置くにかはるまでとは思ふなよ君

かやうにあそばして、いつ召しなれたる事もなき草鞋直垂をめして、御身をやつし給ふ。御ともの人々、同じくやつれくだり給ふ。中將殿は十八、式部の大夫二十五、いづれも

せんだんびつ―千歇櫃とて商人の用ふる器なり

東路の―此歌一本に「逢ふまでのかたみなりけり脱ぎおくをかはれる袖と思ふなよ君」とあり

若殿上にて、いつくしかりける御姿にて、御身をやつし下り給へども、まがふべきかたもなし。十月十日あまりのころ、都をたち出でさせ給ひて、常陸の國へぞくだり給ふ。道すがら歌をよみ、心をすまし、物あはれにおぼしめし、よろづ草木までも、御目をとゞめて、人々と伴ひくだり給ふ程に、ある山を御覽じて、

身をしれば戀ぞくるしきものぞとてさこそは鹿のひとり鳴くらん

有明のくまなき空を御らんじて、うらやましとおぼしめし、

うらやまし影もかはらずすむ月のわれには曇れ秋のそらかな

しきぶの大夫、

めぐりあはん程こそくもらん月影はつひに雲井のひかりましなん

かくて物ごとに祝ひ申し、行くほどに三河の國八橋を過ぎ給ふに、から衣きつゝなれにし古も、今のやうに思召しつゞけて、蜘手に物をこそおもひ給ひけれ。ある山中にて、年のよはひ七八十ばかりなる翁の、見たてまつりて、おの〳〵いかなる人にてましますぞと申しければ、これは都より物うりにくだる商人にて候ふが、常陸の國へくだり候ふとの給へば、いや〳〵商人らとは見申さず候ふ、此頃天下の御子に二位の中將殿と見申し

くもらん―くもちめの衍か

から衣云々―伊勢物語「から衣きつゝ馴れにしつましあればはるゝ〴〵きぬる旅をしぞ思ふ」

蜘手に物を云々―續古今、十一「戀せよとなれる三河の八橋の

蜘手に物を思ふ比かな」

て候ふ、戀路に迷ひいでさせ給ひて候ふか、此くれにおほしめす人に必ず逢はせ給ふべし、此翁よく見申して候ふぞと申しけるに、そらおそろしく思召しながら、思ふ人にひき合せべきといふが嬉しきにとて、御小袖一かさね取りいだして、彼の翁にたびける。これは聞ゆる見通しの尉にて候ふとて、かき消すやうに失せにけり。

さてその後はたのもしく思召して、御足のいたさも覺えずいそぎ下り給ふ。都には二位の中將殿うせ給へるとて、院中のさわぎなか〳〵申すもおろかなり。北の政所の御事は申すに及ばず、京中のさわぎ限りなし。いつとなくむすぼほれておはしませば、いかなる御怨みもやとて、住み給ひしかたを御覽じ給へば、ぬぎおき給ひし直垂の袖に、あそばしたるを御覽じて、すこしたのもしく思召しける。さるほどに常陸の國へつき給ふ。まづ鹿島の大明神へまゐり給ひて、御通夜申させたまひ、願くば文正が娘に引き合はせ給へと、終夜祈念申させ給ひて、あくれば下向し給ひけり。ある家にたちよりて尋ね給へば、あるじ道しるべして教へ申しけるに、文正が館七十町の築地をつき、かゞる田舍にもめでたき處ありけりと思召し、立ちやすらひておはしけるに、下女の出でて申しけるは、いかなる人ぞと問ひければ、都の方より物うりに下りて候ふなりとの給へば、さ

あいさせ―愛させなるべし

具足―道具
みのつぼ―一本「ゐりのつぼ」とあり

やうの事をこそ是にあいさせ給ひ候へ、申し入れ候はんと言ひければ、嬉しくてやがてつゞきて入り給ふが、賣物にとりては、かぶり裝束、紫の指貫、笏、あふぎ、女房の裝束、春秋の吉野泊瀬の花、いろ〳〵をつくし織りたる紅梅、うめ、さくら、柳の絲の春風にみだれて物ぞ思ひける。契のほどは知らねども、音にのみきくの水、心つくしぶねこがれて出でにし山吹の、色をしるべにあこがれて、逢ふに命もながらへて、結びかけたる契をもめしたくや候ふ。夏は涼しき泉殿、鴨やをしどり織りかけて、菖蒲がさねの唐衣に、戀の百首を縫ひつくし、そのはながさねの十五夜のこひしき人をみちのくの、しのぶの里は尋ぬれど、あはれを誰かさゞがにの、蜘手に物や思ふらんをも、めしたくや。秋はもみぢの色ふかき、思ふ心のあゐぞめかは、名のみして袖は朽葉にあこがれて、戀路にまよふ道芝の、露うちはらふ白菊の、うつろふ道もめしたくや候ふ。冬は雪間に根をませば、やがてか人を見るべき、富士のけぶりの空に消ゆる身のゆくへこそあはれなれ、風のたよりのことづてもがな、心のうちの苦しさも、せめてはかくと知らせばやと、色おりたるもめしたくや候ふ。春にとりては白きあかきかけおび、几帳ひきものなどもめしたくや候ふ。さて具足のいろ〳〵は、手筥硯にかけごなり、又みのつぼにあひそへて、

豐のあかり云々―一本に「豐のあかりの節會の櫛、疊紙にとりては云々」とあるよろし

やまがつ―原本「やましろ」とあり、一本によりて改む

豐のあかりの節會には、くし、疊紙、紅、むらさき、色ふかき薄樣、すみ、筆、沈、麝香、たき物なども候ふなり。枕のすぐれて覺ゆるは、殊にやさしき花枕、こすけの枕、から枕、戀路に迷ふうき枕、沈の枕を並べつゝ、人にはじめて新枕、鏡にとりては、しろがねのうらなる、とりのむかひたる唐の鏡や、ひわ、小鳥、鶯、ひよ鳥などまでも、數をつくして鑄つけたる鏡や召され候ふと、詞に花を咲かせつゝ、かやうにやさしき賣物ども戀の心をたよりとや、聞きしる人もあるやとて賣り給ふ。文正が内のものども多けれども、やまがつなれば聞き知らず。女房たちのそのなかに都人にてありけるが、情も深く、讀みかき和歌の道にくらからず、みめかたちいつくしき人とて、姫君のかいしやくに付けたりしが、此商人をうち見つゝ、姿ありさまに至るまで、たゞ人ならぬ風情なり、賣物の言葉つゞき、いとやさしき人なり、不思議なり、もし若殿上人たち聞き及びあこがれて、是まで下り給ふかと、あやしげにこそ思ひけれ。いまだかやうのおもしろき賣物こそ候はね。聞かせ給へと言ひければ、文正も出居の窓あけて聞きつれば、さもおもしろくぞ覺えける。あの殿ばらは、いづくの人にてましませば、かく面白くは賣り給ふぞ、今一度賣り給へと申せ。人々目を見あはせて、これこそ聞ゆる文正よとて、又さきの如く

ねりぬき―生絲を經とし練絲を緯として織りたる絹

具足―食菜

横座―上座

あるじ關白―主人は最も貴きものとの意

賣りたまふ。あまりおもしろきに、二三度までぞ賣らせける。いかにしてか此人々をこれにとどめんと思ひ、あの殿ばらたち、宿はいづくにて候ふと問ひければ、宿は候はず、是へすぐにまゐりて候ふと申し給へば、うれしと思ひ、やがてなかの出居に入れたてまつり、御足の湯などいだしければ、とうまのすけ御足をすましければ、兵衞のすけ、ねりぬきの御手ぬぐひにてのごひ申しけり。中將殿は御身も衰へやせ給へども、なほ人にはすぐれ見え給ひけり。文正がうちの者ども申しけるは、せんだんびつもちたる男、大事のはんざう盥に足を入れて、一人は洗ひ、今一人はいつくしき絹にてのごひ候ふ惜しさよとて笑ひける。文正、京商人はばづかしきぞ、飯など尋常にしてまゐらせよと言ひければ、高坏に八種の具足し、皆々同じやうにして据ゑける。おの〳〵は取りおろしければ、都人はをかしきものや、あのやせ男に物をくはせて、ひれふすやうにして、食ひもならはぬやらん、そなへを皆とりおろして食ひけるをかしさよと笑ひける。文正出居に出でて、此人々に酒をすゝめんとて、色々の肴をこしらへいだし、横座に直り、さかづきを取りて申すやう、あるじ關白と申す事の候へば、まづ飲み候ふべしとて、三度のみて後に、中將殿にまゐらせければ、力なくてまゐりけり。御ともの人々、日もくるゝ

心ちして、戀ほど悲しきものはなし、院よりほかは、たれか君よりさきに盃をとらせ給ふべきとて、おの〳〵涙をながす。中將殿もあさましく思召しけれども、力なくまゐりける。さて文正、酒のゑひのまゝ申しけるは、つねをか賤しきものにて候へども、鹿島の大明神より給はりて、みめよき姫を二人もちて候ふが、主などのやうにもてなし候ふ、八箇國の大名たちわれも〳〵と申され候へども、更に靡かず、つねをか主の大宮司殿、よめにとおほせ候へども、從ひ申さず候ふ、又國司に下り給ひし京上蔦も、とかく仰せ候へども、只一筋に佛道を願ひ申すなり、その女房たちにみめ能きがあまた候ふ、傾城ほしくば、十人も二十人もまゐらせ申すべし、しばらくこれに御逗留候うて、御あそび候へと申しけり。

つねをか―文正の名

中將殿をはじめて、をかしくぞ聞き給ふ。其後いつくしき物ども、箱のなかに入れて姫君のかたへとてつかはされける。姫たち御覽じて、多くの物を見つれども、これ程めづらしき物をいまだ見ずとて見給へば、硯の下に紅葉がさねの薄樣に、

君ゆゑに戀路にまよふ道芝のいろの深さをいかで知らせん

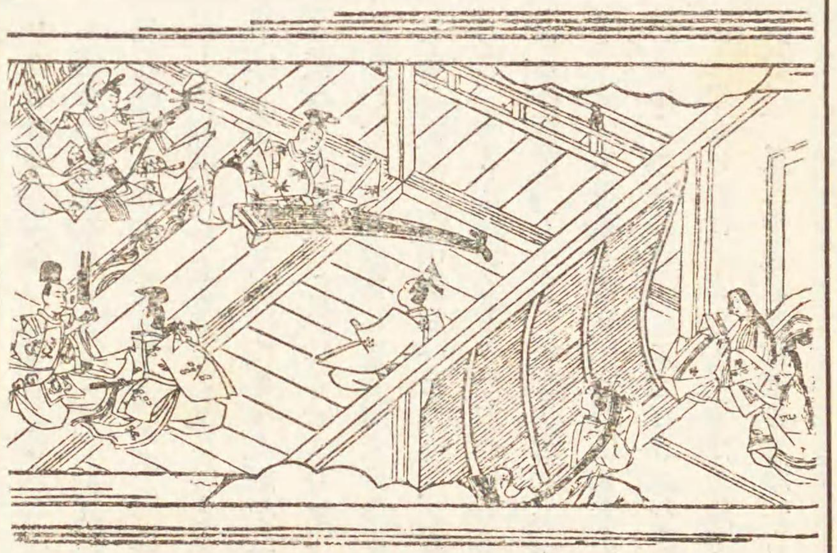
君ゆゑに―此歌一本に「君ゆゑに迷ひきにける陸奥の忍ぶ心をあはれとも思へ」とあり

姫君これを見給ひて、顔打ちあかめて、つゝましながら見給へば、筆のながれ、墨つき

いまだ見馴れぬなり、此年月多くの文を見つれども、これ程いつくしきは見ざりける。物を賣りつる詞つき、さればこそと思ひて、姉姫はかへし給ふを、かいしやくの女房たち、これ程やさしきものを、御かへし候へば、色をも知らぬやうに覺え候ふ、たゞ御とめ候へと申しければ、げにもとおぼしけん、とゞめ給ふなり。又妹、此いろ〳〵を御覽じて羨みければ、文正申しけるは、つねをか娘を二人もちて候ふ、さきに給はり候ふものを、いもうと羨み申し候ふ、これにも給はり候へと申しければ、かねてより用意しておき給へば、劣らぬいつくしき物どもを贈り給ひける。文正申しけるは、殿ばらたち、つれ〴〵にましまさば、此西の御堂へまゐりて、なぐさみ給へと申しけり。やがて御堂へ參り御覽ずるに、まことに尊くありがたき心ちして、かなたこなた見給へば、琵琶琴たて竝べおきたるを御覽じて、めづらしく思召し、琵琶をひき寄せひかせ給ふ。兵衞のすけ琴をひき、とうまのすけ笙を吹き、式部の大夫笛を吹き、おもしろく感涙をながしける。文正が内のものこれを聞きて、よしなき人を御堂へ入れ給ひて、垣壁をやぶるらん、ひしめき候ふと申しければ、文正申すは、見て來れと申しける。十人ばかり行きて、遲くかへるほどに、又二十人ほど行けどもかへらず。あれ行きこれゆき、行く程に皆々ゆきてかへ

遲くかへる程に―未だ歸らざるに

かねてより一前以て



らず。文正不思議に思ひて、いそぎ行きてみるに二三百人白洲になみ居たり。近くよりてきゝければ、管絃の音、耳にあきれたる風情なり。おもしろさ尊さ、心もおよばず。これほど面白くありがたきことを、今まで聞かざりし事のうたてさよ、ありがたく罪もきえ候ふ、御引出物申さんとて、さまゞの物まゐらせければ、此人人かねてより聟引出物取り給ふとて笑ひ給ふ。姫君はありし硯の下の文、人しれず心にかゝりけれども、いひ傳ふべきたよりもなし。其うへひととせ下り給ひし國司よりも、したの人にて有らんと思ひ亂れ給ひけり。文正つかひを立てて申しけるは、わが姫たち、今度は聞かすべく候ふあひだ、今一度面白く引き給へと申しける。

中將殿みなゝ―中將殿を初め一同の意

孟をばしちめて―しちめはしらべにて調ふる意なるべし

中將殿みなゝ嬉しくおぼしめし、ひきつくろひて御堂へうつらせ給ふ。姫君たちもひきつくろひ、女房たち、はしたものにいたるまで、心も及ばず出でたゝせ、御堂へ入り給ふ。片田舎とも覺えず、心にくき風情にて、沈麝香のにほひ滿ちゝて、由あるさまなれば、いつよりも御心を澄まして、琵琶をひかせ給ふ。姫君はきゝしり給ひて撥音のけだかさ、愛敬つきたる手あつかひも、たとへんかたなし。御身をやつし給へども、優にけだかくいつくしく、いかなる風のたよりもがなと思召しける。をりふし嵐烈しく吹きて、簾をさつと吹きあげたるひまより、姫君と中將殿の御目を見あはせ給ひける。彼の姫君の御ありさま、姫の李夫人楊貴妃もこれには過ぎじとぞ見え給ふ。いよゝたしなみ、琴琵琶をひきあはせ吹きならし給へば、聽聞の人々、あまりのおもしろさに隨喜の涙を流しける。姫たちの心のうちたとへんかたなし。文正又盃をばしらめて、中將殿にさしにけり。力なくまゐりて、又つねをかに給へば、いつぞやも申して候ふ、御きらひ候ふか、姫のかたにみめよき女房たち多く候ふ、いづれにても召され候へ、これより北に候ふとて指をさして教へける。人々目を見あはせて、御心の中おしはかり、嬉しく候ふとて笑ひ給ふ。さてその夜をすごし給ふべしとも覺えねば、人しづまりて忍び入

り給へば、姫君もありつる姿忘れやらず思ひ給ひ、格子もおろさず、月くまなきを眺めつゝ居給ふをりふし、中將殿八重の垣を忍び入りたまへば、例ならず男の影見えければ、胸うちさわぎ、かたはらに入り給へば、中將殿もともに入らせ給ひ、御そばに添ひふさせ給へば、かの人やらん、おそろしくもあさましく、さしも人々をきらひ、商人にちぎりを結びて、父母の聞き給はんこと、悲しくはづかしくて、思ひよるまじきよしの給へば、中將殿もことわりと思召し、衞府の藏人語りしより、はじめ今までかきくどき語り給ふに、姫君もうち解け給ひ、いつしか淺からず契り給ふ。さるほどに秋の長き夜なれども、あふ人からのしのゝめ早くしらみければ、

こひ〳〵てあひ見しよはの短きは睦言つきぬにひまくらかな

と、か様にの給へば、姫君打ちそばみつゝ、

かずならぬ身には短きよはならしさてしも知らぬしのゝめの空

それより天にあらば比翼の鳥、地にあらば連理の枝とぞ契り給ひけり。

忍ぶとすれど露れてさゝやきあへり。母上も聞き給ひて、あさましや、大名たちを嫌ひて商人にちぎりし事の悲しさよ、商人につけて追ひいださんとぞ申しけるほどに、文正

あふ人からの―古今十三「長しとも思ひぞはてぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なればこひ〳〵て―此歌一本に「こひこひて逢ふ夜は秋も短きに月はつれなく殘るありあけ」とあり

かずならぬ―此歌も「かずならぬ身は秋の夜の短きと思ひもあへず東雲の空」とあり

がところにこそ、都より下りたる商人を愛しおきて管絃させるよし、大宮司殿きこしめし、御つかひありしかば、文正うけたまはり、かしこまつて候ふとて、商人に申しけるは、大宮司殿御聽聞あらんとの給ふあひだ、いつよりもひきつくろひて、管絃し給へと申しければ、今日こそあらはれんと思召し、皇子にての御しやうぞく、いづれももたせ給へば、御かぶり束帶の姿にて、かねつけ眉つくり給へば、心も詞も及ばず、いつくしく見えたまふなり。文正がうちの者これを見て、商人はいづれやらん、たゞ神佛の現れたまふかと驚きける。大宮司殿、公達五人つれ給ひて、輿にて入らせ給ひ、御堂の正面を見給へば、中將殿と見給ひ、肝をけし輿よりころび落ち、扨も天下の御子に、二位の中將殿うせさせたまふとて、國々を尋ねまゐらせ給ふとうけたまはり候ふ、これにましますを夢にも知りたてまつらぬこと、淺ましさよと呆れて、かしこまりてぞゐ給ふ。さるほどに兵衞のすけ立ち出でて、いかにさだみつ、これへまゐれとの給へば、文正いそぎ家にかへり、あさましや、人の目をみすまじきものは京の商人なり、かたじけなくもわが君をなめげに申すと、ふるひ泣きけり。大宮司殿は文正を召し、汝知らずや、かたじけなくもてんか殿の御子に、二位の中將殿と申して、竝ぶかたなき御人なり、さても

わが君―大宮司を指す

冥加（みやうが）につきなんと申し給へば、文正うけたまはり、肝たましひも失（う）する心ちして、このほど商人と思ひつるに、てんかの御子にてわたらせ給ふを、夢にも知らずと赤面して、又うちへ戻りけり。聟（むこ）どのは天下ぞ、天下は聟殿（むこどの）よと、ものに狂ふばかりに悦びける。大宮司どのは、手づから御輿をかき、わが宿へうつし申し、八箇國の大名にふれければ、われも〳〵とまゐり集りける。これほどめでたき幸をひき給はんとて、諸人（しょにん）を嫌ひ給ひけると申しける。中將殿は姫君を具して、都へのぼらんと思召し、御いで立ちたまふ。當國の大名一萬餘騎、御ともに參りけり。御かいしやくには、大宮司殿の北の方をはじめとして、われも〳〵とぞまゐりける。文正が四方の倉のたから物はいつの用ぞと、御車をば金銀にて飾り、女房たちをいつくしく飾り、都へ上り給へば、見る人きく人羨まざるはなかりける。

三月十日あまりに、都へつかせ給ふ。天下の北の政所（まんどころ）も、たゞ夢の心ちせさせ給ひて、嬉しさかぎりなし。たとひ如何なるものの子なりとも、おろかには思ふべからずとて、もてなし給ふ。姫君は藤がさねの七重ぎぬに、えいその唐衣（からぎぬ）、さくらのくれなゐの袴、にほやかに著なし給へば、姿かゝり誠にいつくしさ譬へんかたなし。いかなる故に文正とや

いつの用ぞ―今此時に使用せざしていづれの時に用ふべきか

えいその唐衣―えびぞめ（葡萄染）の唐衣の衍なるべし

らんが子に生れ給ふらん、ひとへに天人の影向（やうがう）かと、御寵愛かぎりなし。こんどの御よろこびにとて、常陸の國を大宮司にたびにけり。さて中將殿みかどへまゐり給へば、此程は戀しきをりふしに、御よろこび譬へんかたなし。やがて大將にぞなし給ふ。さて此程の事ども御尋ねありけるに、いち〳〵語り給ふ。帝（みかど）おほせありけるは、妹さだめてよかるらんとの給へば、姉よりもまさりて候ふと申し給へば、やがて宣旨をくだされけり。文正此由きゝ、宣旨かたじけなくは候へども、姉は力なし、妹は此國におき候うて、あさゆふ見參らせでは叶ふまじき由申しければ、そのよし奏しけるに、さらばとて父母ともに都へ召しけり。帝御覽ずれば、姉君よりもいつくしく思召し、御寵愛かぎりなし。よき子をもちぬれば、文正七十にて宰相にぞなされて、引きあげ給へば、五十ばかりにぞ見えにける。姫君は女御になり給ふ。さるほどに例ならず惱み給へば、帝をはじめさわぎ給へば、ひきかへ御よろこび限りなし。十月と申すに、御産平安し給ひて、皇子（わうじ）をぞ産み給ふ。御めのとには、關白殿の姫君、中宮にまゐり給ひぬ。又おほぢこの宰相は、やがて大納言になされけり。賤しき鹽賣の文正なれども、かやうにめでたき果報ども、中中申すにおよばれず、母も二位殿とぞ申しける。いかなる過去のおこなひにやらん、み

おほぢこの宰相―「こ」の字不用なるべし

なみな繁昌して榮華にほこり、年さへわかく見え給ひ、下人若黨おほくめし使ひ、女房たち上下にいたるまで人に用ひられ、榮耀にほこり給ふ。

さるほどに大納言は高きところに塔をたて、大河に舟をうかめ、小河に橋をかけ、善根かずをつくし給ふ。いづれも〳〵御いのち百歳にあまるまで保ち給ふぞめでたき。まづまづめだたき事のはじめには、此草子を御覽じあるべく候ふ。

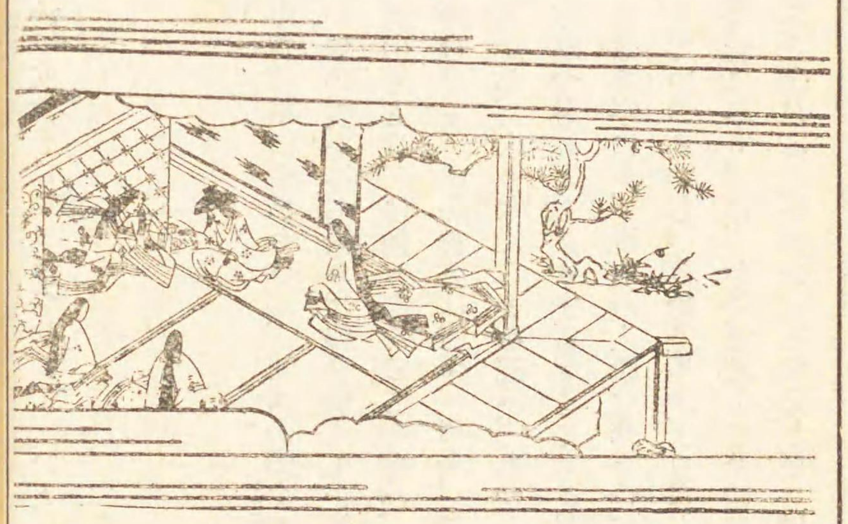
はちかづき

はちかづき

中昔の事にやありけん、河内の國交野の邊に備中の守さねたかといふ人ましくけり。かずの寶を持ち給ふ。飽き滿ちて乏しきこともましまさず、詩歌管絃に心をよせけるが、花のもとにては散りなんことを悲み、歌をよみ詩をつくり、のどけき空をながめ暮らし給ひける。北の御方は古今、萬葉、伊勢物語、かずの艸子を御覽じて、月の前にて夜をあかし、入りなんことを悲み、あかし暮らし給ひつゝ心に殘ることもなし。鴛鴦のむすび隔つ事もましまさず、思ふまゝなる御中なるに御子一人もなし。朝夕悲み給ひしに、いかなる事にや、姫君一人設けたまひて、父母の御よろこび申すばかりは無かりけり。かくていつきかしづき給ふ事かぎりなし。あけくれ觀音を信じ申されけるほどに、長谷の觀音に參りては、かの姫君のすゑ繁昌の果報あらせ給へとぞ祈りたまふ。かくて年月をふるほどに、姫君十三と申せし年、母上例ならず風の心地との給ひて、一日二日と申せ

かんざし―髪

かくこそ詠じ給ひける―係結の破格なるも原本のまゝにして一切改めず



しほどに、今をかぎりに見えければ、姫君をちかづけて、緣のかんざしを撫であげ、あらむざんやな、十七八にもなし、いかなる緣にもつけおき、心やすく見おき、とにもかくにもならずして、いとけなき有樣をすて置かんこと、あさましさよと涙をながし給ふ。姫君ももろともに涙をながし給ひける。母上は流るゝ涙をおしとどめ、そばなる手筥を取りいだし、中には何をか入れられけん、世におもげなるを姫君の御ぐしに戴かせ、その上に肩の隱るゝほどの鉢をきせまゐらせて、母上かくこそ詠じ給ひける。

さしも草ふかくぞ賴む觀世音誓のまゝにいたゞかせぬる

かやうにうちながめ給ひて、遂に空しくなり給

孝養―佛事供養

梅が枝の云々―文章つゞかず、一本には「春は軒端の梅の花櫻は風にちりぬれど又くる春に開きけり月は山の端に入りぬれど又こんゆふべに出で給ふ」とあり

そでまくら―袖を枕に歎く意、一本には此句な

ふ。父大きに驚き泣き給ひて、いとけなき姫をば何とて棄ておき、いづくとも知らずかくなり給ふと、泣き給へどかひぞなき。かくてさして有るべきならねば、なごりつきせず思へども、むなしき野邊に送りすて、花のすがたも煙となる、月のかたちは風となり、散りはつるこそいたはしけれ。かくて父御前姫君をちかづけまゐらせて、いたゞき給ひたる鉢とらんとしけれども、吸ひつきて更にとられず。父大きに驚きて、いかゞはせん、母上にこそは離れまゐらせめ、かゝるかたはのつきぬることの淺ましさよと、歎きたまふこと限りなし。かくて月日をたてければ、あとの孝養とり行ひたまふ。おもひは姫君の御まへにこそとどまりけれ。春は軒端の梅が枝の、さくらは咲きて梢まばらの青葉とぞ、名殘をしくは思へども、又こん春を待ちてさく。月は山の端に入りぬれど、今夜の闇とへだつれど、又こんゆふべに出で給ふ。わかれし人の面かげ、夢路にだにも定かならず、いつの日のいつの暮にかわかれぢを、いかなる人の踏みそめて、現にも逢ふことなかるらん。思ひまはせば小車のやるかたもなき風情かなと、よその見るめもあはれなり。さるほどに父御前の一族、親しき人々よりあひて、いつまで男子のひとり住みがたしと、このそでまくら、歎きくどき給ふともそのかひはよもあらじ、いかなる人を

もかたらひて、憂きに別れしなごりをも慰み給へとすゝめられ、さきだつ人はとにかくに、残るうき身の悲しさよと、思ひごともよしなしとて、ともかくも御はからひとありければ、一門の人々よろこびて、さるべき人をとたづね、もとの如く迎ひとり、移ればかはる世の中の、心は花ぞかし。秋の紅葉のちり過ぎて、その面影は姫君ばかりぞ歎かる。かくてかの繼母、此姫君を見たてまつりて、かゝる不思議のかたはもの、浮世にはありけることよとて、悪み給ふことかぎりなし。さてまゝはゝの御腹に、御子一人いできたまへば、いよ〳〵此鉢かづきを見じ聞かじと、なみの起居の事までも、そらごとのみばかりの給ひて、常には父にざんそう申す。鉢かづきは餘りやるかたなきまゝに、母の御墓へまゐりて、泣く〳〵申させ給ふやう、さらでだに憂きにかずそふ世の中の、わかれを慕ふ涙川、沈みも果てずながらへて、あるにかひなきわが身ぞと、思ふにいとゞ不思議なるかたはのつきぬる事のうらめしさよ、繼母御前のにくみ給ふもことわりなり、したしき母上に捨てられまゐらせ、わが身何ともなりての後に、父御ぜんいかゞ御歎きのあるべきと思ふばかりを、心ぐるしく思ひしに、今の御母に姫君いでき給へば、はや思召しおかんこともなし、まゝはゝ御前の悪み給ふゆゑ、たのみし父おろかなり、今はかもかたらひて、憂きに別れしなごりをも慰み給へとすゝめられ、さきだつ人はとにかくに、残るうき身の悲しさよと、思ひごともよしなしとて、ともかくも御はからひとありければ、一門の人々よろこびて、さるべき人をとたづね、もとの如く迎ひとり、移ればかはる世の中の、心は花ぞかし。秋の紅葉のちり過ぎて、その面影は姫君ばかりぞ歎かる。かくてかの繼母、此姫君を見たてまつりて、かゝる不思議のかたはもの、浮世にはありけることよとて、悪み給ふことかぎりなし。さてまゝはゝの御腹に、御子一人いできたまへば、いよ〳〵此鉢かづきを見じ聞かじと、なみの起居の事までも、そらごとのみばかりの給ひて、常には父にざんそう申す。鉢かづきは餘りやるかたなきまゝに、母の御墓へまゐりて、泣く〳〵申させ給ふやう、さらでだに憂きにかずそふ世の中の、わかれを慕ふ涙川、沈みも果てずながらへて、あるにかひなきわが身ぞと、思ふにいとゞ不思議なるかたはのつきぬる事のうらめしさよ、繼母御前のにくみ給ふもことわりなり、したしき母上に捨てられまゐらせ、わが身何ともなりての後に、父御ぜんいかゞ御歎きのあるべきと思ふばかりを、心ぐるしく思ひしに、今の御母に姫君いでき給へば、はや思召しおかんこともなし、まゝはゝ御前の悪み給ふゆゑ、たのみし父おろかなり、今はか

なみの起居に―金葉七「あふ事はいつと渚の濱千鳥波の立居にねをのみぞ鳴く」の語を取れり

ざんそう―讒訴

おろか―我身におろそかなり

ひなきうき身のいのち、とくして迎ひとり給へ、同じはちすの縁となり、心やすくあるべきと、流涕こがれて悲み給へども、生をへだつる悲しさは、さぞと答へる人もなし。

まゝはゝ此由きゝ給ひて、鉢かづきが母の墓へまゐりて、殿をもみづから親子をも呪ふことこそ恐しけれと、まことをば一つもいひ給はず、虚言ばかりを父にたび〳〵言ひければ、男心のはかなきは、まことと思ひ、鉢かづき呼び出だし、不道のものの心やな、あらぬかたはのつきぬるを、よに痛はしく思ひしに、咎もなき母御前兄弟を呪ふことこそ不思議なれ、かたはものを内におきては何かせん、いづかたへも追ひいだし給へとのたまへば、繼母これを聞きて、そばへうちむきて、さも嬉しげなる風情して笑ひける。さていたはしや、鉢かづきを引寄せて、召したるものを剥ぎ取りて、淺ましげなるかたびら一つ著せ参らせ、或野の中の四つ辻へ捨てられけるこそあはれなれ。さてこはいかなる浮世ぞと、暗に迷ふこゝちして、いづくへ行くべきやうもなし、泣くよりほかの事はなし。やゝしばしありてかくなん、

野の末の路ふみわけていづくともさして行きなん身とは思はず

とうちながめ、足にまかせて迷ひあるき給ひけるに、おほきなる川のはたへうちつき給

とくして―早くの意

のぞき―臨み

ふ。こゝに立ちとまりて、いづくをさして行くともなく迷ひありかんより、此河の水屑となり、母上のおはします處へ參りなんと思召して、河のはたへのぞき給へば、さすが幼き心のはかなさは、岸うつ浪もおそろしや、瀬々の白波はげしくて、そこはかとなき水の面、すさまじければいかゞあらんと思へども、これを心のたねとして、既におもひきり、河へ身を投げんとし給ふとき、かくこそ一首つらねけり。

河岸の柳の糸のひとすぢに思ひきる身を神もたすけよ

かやうにうちながめ、御身を投げしづめけれども、鉢にひかれて御顔ばかりさし出でて流れける程に、獵する船の通りけるが、こゝに鉢の流れける、何ものぞと言ひてあげて見れば、かしらは鉢にてしたは人なり。舟人是をみて、あらおもしろや、いかなる者やらんとて、河の岸へ投げあぐる。やゝしばらくありて、起きなほりつくゞくとあんじ、かくばかり、

河波の底にこの身のとまれかしなど再びは浮きあがりけん

などとうちながめ、あるにあられぬ風情して、たどりかねてぞ立ち給ふ。さてあるべきにあらざれば、足にまかせて行くほどに、ある人里に出で給ふ。里人これを見て、これは

久しき鉢―年ふりたる鉢

えんぎやうだう―縁行道、散歩すること

いかなるものやらん、かしらは鉢、したは人なり、いかなる山の奥よりか、久しき鉢が變化して、鉢かづいて化けけるぞ、いかさま人間にては無しとて、指をさして恐しがりて笑ひける。ある人申しけるやうは、たとへ化物にてもあれ、手足のはづれの美しさよと、とりぐゝに申しける。さる程にその處の國司にてまします人の、御名をば山蔭の三位中將とこそ申しける、折節えんぎやうだうして四方の梢をながめつゝ、霞に遠里の賤が蚊遣火さしも草、そこひにくゆるうすけぶり、うはの空にてたち靡き、面白かりけるゆふぐれは、戀する人に見せばやと、眺めいだして立ち給ふところに、かの鉢かづき歩みよる。中將殿は御覽じて、あれ呼びよせよとの給へば、若ざぶらひども二三人走りいで、かの鉢かづきをつれてまゐる。いづくの浦いかなるものぞとの給へば、鉢かづき申すやう、われは交野の邊の者にて候ふ、母にほどなく後れ、思ひのあまりにかゝるかたはさへつきて候へば、憐むものも無きまゝに、難波の浦によしなしと、足にまかせて迷ひありき候ふと申しければ、さて〳〵不便とおぼしめし、戴きたる鉢を取りのけて取らせよとて、皆々よりて取りけれども、しかと吸ひつきてなか〳〵取るべきやうもなし。これを人々御覽じて、いかなるくせ者ぞやとて笑ひける。

結句―其末

ふしなれぬ―臥しと節とにかく

中將殿は御覽じて、鉢かづきはいづくへぞとの給へば、いづくともさして行くべき方もなし、母にはなれて結句かゝるかたはさへつき候へば、見る人ごとにおぢ恐れ、憎がる人は候へども、あはれむ人はなしと申しければ、中將殿きこしめて、人のもとには不思議なる物のあるもよきものにて候ふとのたまへば、仰せに從ひておかれける。さて身の能は何ぞとの給ひければ、何と申すべきやうもなし。母にかしづかれし時は、琴、琵琶、和琴、笙、篳篥、古今、萬葉、伊勢物語、法華經八卷、かずの御經ども讀みしよりほかの能もなし。さては能もなくば、湯殿におけとありければ、いまだ習はぬことなれど、時にしたがふ世の中なれば、湯殿の火をこそたかれけれ。明けぬれば見る人笑ひなぶり、にくがる人多けれども、なさけをかくる人はなし。あけくれ、御行水よ、鉢かづきとて、三更四更も過ぎざるに、五更の天も明けざるに、責め起されて、いたはしや、ふしなれぬ篠竹の、おのれと雪に埋れて、ふし倒れたる風情して、ものはかなげに起きなほる、思ひを柴のゆふけぶり、立つ名をもくるしと打ちながめ、行水は沸きまゐらせ候ふ、はやとり給へと催促する。くるれば御足の湯わかせや、鉢かづきと下知をする。うき身ながらも起きあがり、みだれた柴を引きよせながら、かくこそつらね給ひける。

ありつき給ふ―妻常し給ふ

とのうへ―殿と奥方

苦しきは折りたく柴のゆふけぶりうき身とともに立ちや消えまし

と、かやうに打ちながめ、いかなる因果のむくいにや、かゝる浮世に住みそめて、いつまで命ながらへ、かほどに物を思ひねの、昔を思ひいでのさと、胸は駿河の富士のだけ、袖は清見が關なれや、いつまで命ながらへて、憂きには絶えぬ涙河、流れて末もたのまれず、菊の裏葉におく露の、何となりゆく此身ぞと、ひとりくどきて、かくばかり、

松風の空吹きはらふよにいでてさやけき月をいつかながめん

かやうに詠じ、足の湯をぞ沸かしける。

さる程に此中將殿は御子四人持ち給ふ。三人は皆々ありつき給ふ。四番めの御子、宰相殿御曹子と申すは、みめかたち世にすぐれ、優にやさしき御姿、むかしを申せば源氏の大將、在原の業平かとぞ申すばかりなり。春は花のもとに日をくらし、散りなんことを悲み、夏はすゞしき泉の底、玉藻に心をいれ、秋は紅葉落葉のちりしく庭のもみぢを眺め、月の前にて夜をあかし、冬は蘆間のうす氷、池のはたに羽をとぢて鴛鴦の浮寢ものさびし、かさぬるつまもあらばこそ、ひとりすさみて立ち給ふ。御兄たちも、とのうへも御湯殿へ入らせ給へども、かの御曹子ばかり殘らせ給ひ、さよ更けてはるかになり

て、ひとり湯殿へ入らせ給ふ。かの鉢かづき御湯うつしさふらふと申す聲やさしく聞えける。御行水とてさしいだす手足のうつくしさ、尋常けに見えければ、世に不思議におほしめし、やあ鉢かづき、人もなきに何かは苦しかるべき、御湯殿してまゐらせよとの給へば、今更むかしを思ひいだして、人にこそ湯殿させつれ、人の湯殿をばいかゞするやらんと思へども、主命なれば力なし、御湯殿へこそまゐりける。御曹子は御覽じて、河内の國はせばしといへども、いかほどの人をも見てあれども、かほどにものよわく愛敬世にすぐれ、うつくしき人はいまだ見ず、ひととせ花の都へ上りし時、御室の院の花見のありし時、貴賤群集して門前に市をなしつれども、その時にもこの鉢かづきほどの人はなし、いかに思ふとも此人を見捨てがたしと思はれける。いかに鉢かづき、思ひそめにし紅の、色はうつろふことなりと、君とわが中かはらじと、千秋の松に契りをはるかにかけ、松の浦の龜に久しくむすばれける。今よりのちはかの鉢かづきは、軒端の梅に鶯の、またはなれえぬ風情して、かくかへりごとをものたまはず。

かさねて御曹子は、これやこの龍田にはあらねども、くちなし色にたとへつゝ、物をいはねの松やらん、引きすてられし琴のねの、よそに引く手もあるやらん、もしふみかさ

御湯殿してー垢を流すこと

はなれえぬー原本「はなれぬ」とあり、一本によりて改む

かくかへりごともー「かく」は「とかく」の衍なるべし

なるかたもあらば、逢はで空しく消ゆるとも、君ゆゑならばなか〳〵に、うらみと更に思ふまじ、いかに〳〵との給へば、野飼の駒の人馴れで、心はたけく思へども、妹背の川の中だちに、よしやあしやを知らざれば、何と申さんこともなし。よそに引く手もあるやらんと、の給ふことの恥しさに、調べの絲みな切れて、よそにひく手もさふらはず、なみのたちゐに悲しきは、空しく別れし母の事、さては此身のさえやらで、いつまで命ながらへて、あらぬ浮世にすみ染の、色にもならぬ怨めしさを、歎きはんべりけると申しければ、宰相の君は聞召し、げにもことわりなりと思召して、かさねて仰せあるやうは、さればとよ、有爲轉變の世の中に生れあひぬるはかなさよ、憂きはむくいと知らずして、神や佛を怨みつゝあかし暮らしてすごすなり、御身もさきの世に野邊の若木の枝を折り、思ひし中をおしへだて、人に歎きをせさせつる報のほどの事ありて、親にも早くおくれつゝ、いまだいとけなき心に、物をおもひねの涙とこせく風情なり、みづから二十のきやうがいまで、定むる妻はいまだなし、ひとり片敷くうたゝねの、枕さびしく住むことも、さきの世に御身と契ふかくして、その業因のつきねばこそ、めぐり〳〵てとにかくに、今こゝにおはすらん、世にいつくしき人なれど、緣なきかたへは目もゆかず、御身

さえやらでーはか〳〵しからずして

とこせくー床堰くの意なるべしきやうがいー境界

千尋―傍訓原本のまゝ
五道輪廻―地獄餓鬼畜生人間天上の五道に流轉すること
六道四生―六道は地獄餓鬼畜生
修羅人間天上、四生は胎生卵生濕生化生
舟のゐる―舟のすわること
かきくちし―涙にかきくちし

に縁があればこそ、かくまで深く思はるれ、思ひそめにし昔より、今逢ふまでの言の葉こそ、末たのもしく思はるれ、鯨のよる島、虎ふす野邊、千尋の底、五道輪廻のあなたなる六道四生のこなたなる、妹背の川のみなかみの、涅槃の岸はかはるとも、君とわが中かはらじと、深く契をこめ給ふ。さて鉢かづきは漕ぐ舟のゐる風情して、君の仰せの強きまゝ、思はぬながら靡きそめ、その夜はこゝにふし竹の、よゝの契もあらがねの、末いかならんわが思ひ、知られぬそのさきに、いづくへも足にまかせて出でばやと、かきくらし思はれける。あはれなれば、宰相殿はいかに鉢かづき、さほどなにを歎かせ給ふぞよ、見そめ馴れにしよりも、露ちり程もおろかに思ふまじ、暮れなばやがてまゐりなんと、ひるもをり〳〵通ひ、これを見て慰みたまへとて、黄楊の枕と横笛をとり添へてぞおかれける。

其時いとゞ恥しさは、やるかたもなし。わが人のやうにもあらばこそ、人の心は飛鳥河、夜のまにかはる習ひのあるまでも、頼まんともおもひなん、あるに甲斐なきありさまにて、見えぬることの恥しさよと、かきくらし泣き給ふ。御曹子は御覽じて、この鉢かづきの風情を、ものによく〳〵譬ふれば、楊梅桃李の花の香に、雲間の月のさし出でて、二月なかばの絲柳の風に亂るゝよそほひも、籬のうちの撫子の露重げに物よわく、はづかしげにてそばみたる顔の愛敬のいつくしく、楊貴妃李夫人もいかでか是にまさるべきと、不思議におぼしめしける。同じくは此鉢をとりのけて、十五夜の月の如くに見るよしもがなとぞ思はれける。さて若君は湯殿のかたはらの、柴つむ臥戸をたちいでて、わが御かたへ歸りつゝ、軒端の梅を御覽じても、いつしか鉢かづき如何にさびしく思ふらん、今日の暮るゝを待つほどは、住吉の根ざしそめにし姫小松、千代まつよりも尙久しくぞ思はれける。鉢かづきは黄楊の枕と、御笛をおくべき處のあらざれば、もち煩ひてゐたりける。かくてやう〳〵東雲もあくると告ぐる關路の鳥、まだ横雲も引かざるに、御行水よ、鉢かづきと責められて、御湯はわきさふらふ、取らせ給へと答へつゝ、いぶせき柴を折りくべて、かくこそ詠じけれ、

くるしきは折り焚く柴のゆふけぶり戀しきかたへなど靡くらん

とうちながめければ、湯殿の奉行きゝつけて、かの鉢かづきはつぶりこそ人には似ず、ものいふ聲色わらひぐち、手足のはづれの美しさは、これに疾くから住ませ給ふ御女房衆も、究めてこれには劣りなり、ちかづきて彼の人と契らばやとは思へども、あたまを見れ

つぶり―頭

まう〳〵―濛々なるべし

ふとくじん―不得心にて、ふ心得の意

ばまう〳〵として、口よりしたは見ゆれども、鼻よりうへは見えもせず、朋輩衆にも笑はれ、なか〳〵恥しやと思ひもよらぬぞことわりなる。さるほどに春の日ながしと思へども、其日もやう〳〵くれなゐの、たそがれ時や、ゆふがほの人の心は花ぞかし、彼の宰相の君、いつよりも花やかに裝束して、湯殿の側の柴の臥戸にたゝずみ給ふ。鉢かづきこれを知らずして、暮はと契りしかねごとの、はやよひのまも打過ぎぬ、人をとがむる里の犬、聲するほどになりにけり。來んまでとのかたみの枕と笛竹をとりそへもちてかくなん、

君こんとつげの枕や笛竹のなどふし多きちぎりなるらん

とうちながめければ、御曹子とりあへず、

いく千代とふしそひて見んくれたけの契は絶えじつげの枕に

さて宰相殿は、比翼連理と淺からず契らせ給ふ。包むとすれどくれなゐの、洩れてや人の知りぬらん、宰相殿こそ、鉢かづきがもとへ通はせ給ふ淺ましさよ、もとより高きも賤しきも、男はあるならひ、立ちより給ふとも、あの鉢かづきが近づき參らせんと思ふ心の、ふとくじんさよと、惡まぬ人はなかりけり。ある時よそより客人きたり、夜ふけがたまでひま入り、遲く入らせ給ひければ、鉢かづきおぼつかなく思ひて、かくばかり、

人まちてうはの空のみながむれば露けき袖に月ぞやどれる

と、かやうに打ちながめければ、いよ〳〵やさしく思召し、ちぎり深くはなりけれども、捨つべきやうはましまさず。昔が今に至るまで、わが身にかゝらぬ事までも、人のいふならひにて、宰相殿は世にも人なきやうに、かゝる御ふるまひかな、をかしき御心かなと笑ひけるほどに、母上きこしめし、みな〳〵僻言をや申すらんに、めのと見せよとの給へば、乳母見て、まことにて候ふと申しける。父母呆れしばし物をものたまはず、やゝあつていかに乳母きけ、とかく宰相の君を諫め、鉢かづきにちかづかぬやうに計らへとのたまへば、めのと若君の御前にまゐり、何となく御物がたり申し慰めて、いかに若君さま、まことしくは候はねども、湯殿の湯わかし鉢かづきがもとへ通はせ給ふよし、母上きこしめして、よもさやうには有るまじけれども、もしまことならば、父の耳に入らぬさきに鉢かづきを出だすべしとの仰にて候ふと申しければ、若君のたまふやうは、思ひまうけたる仰せかな、一樹のかげ一河の流を汲むことも、他生の縁とこそ聞け、いにしへもさる事あればこそ、主の勘當かうぶり、千尋の底にしづむとも、いもせの中はさもあらず、

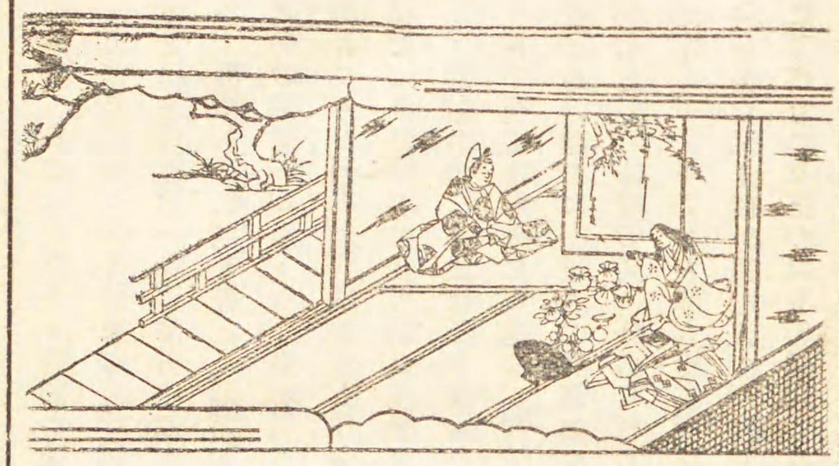
無間―無間地獄
とのうへ―殿、奥方
れんぜい―乳母の名冷泉
おぼろげ事―尋常の事
みたち―御性質

親の御不審かうぶりて、たちまち無間にしづむとも、おもふ夫婦の中ならば何か苦しかるべきぞ、とのうへの御耳に入り、たちまち御手にかゝるとも、かの鉢かづきゆゑならば、すつる命は露ちり程もをしからず、かの人を棄てんこと思ひもよらず、この事用ひ申さぬとて、鉢かづきもろともに追ひいだし給ひなば、いかなる野の末、山の奥に住むとても、思ふ人に添ふならば、ゆめ〳〵悲しかるまじとて、わが御かたを御いでありて、柴つむとほそに入り給ふ。日頃は人目をつゝませ給ひしが、乳母まゐりて申してよりのちは、終日鉢かづきがもとにぞゐ給ひける。さるほどに御兄たちも一門ざしきに叶ふまじとありけれども、厭ふけしきもましまさず、いよ〳〵人目をも憚らず、朝夕通はせ給ひける。母上仰せけるやうは、さもあれ鉢かづきは、いか様變化の者にて若君を失はんと思ふやらん、いかゞせん、れんぜいと仰せける。れんぜい申されけるは、かの君はさならぬことさへ、色深く物はぢをし給ひて、おぼろげ事までもつゝましげなるみたちにて渡らせ候へども、此事に於ては恥ぢ給ふけしきも候はず、さあらば公達のよめくらべをし給ひて御覽候へ、さやうに候はゞ、かの鉢かづき恥しく思ひて、いづくへも出で行くこと候はんと申されければ、げにもとおぼしめし、いつ〳〵公達のよめくらべあるべしと、口々にふれさせける。さるほどに宰相殿鉢かづきがもとへ御入りありて、あれ聞きたまへ、われ〳〵を追ひ失はんために、嫁くらべといふこと申しいだしてふれ候へば、いかゞせんと涙を流し給ひければ、鉢かづきもともに涙を流し申すやう、われゆゑに君をいたづらになし申すべきか、われ〳〵いづくへも行かんと申しければ、宰相殿仰せけるは、御身に離れては片時もゐられ候ふまじ、いづかたへなりとも共に出でんとの給へば、鉢かづき何と思ひわけたる方もなく、涙を流しゐたりけり。さてとかく過ぎゆく程に、よめ合の日にもなりぬれば、宰相殿鉢かづきと二人、いづくへも立ちいでんと思召しけるこそあはれなり。さるほどに夜も明方になりぬれば、召しも習はぬ草鞋しめはき給ひて、さすが父母すみなれ給ふことなれば、御名殘惜しくおぼしめし、おつる涙にかきくもり、今一度父母を見奉りて、いづくとも知らず出でんことこそ悲しけれと思召せども、遂に一度は離れまゐらせんものをと思ひきり給ふ。鉢かづきこの由みたてまつり、われひとりいづ方へも出でまゐらせん、契ふかく候はゞ又めぐりあひ候はんとの給へば、うらめしき事を仰せられ候ふものかな、いづく迄も御とも申し候はんとて、かくなん、

君思ふ心のうちは湧きかへる岩間の水にたぐへても見よ

と、かやうに遊ばし立ちいでんとし給ふ時、鉢かづきかくばかり、
わが思ふ心のうちも湧きかへる岩間の水を見るにつけても
などとうちながめ、また鉢かづきかくなん、
よしさらば野邊の草ともなりもせで君を露ともともに消えなん
とあそばしければ、また宰相殿かくばかり、
路のべの萩の末葉の露ほども契りて知るぞわれもたまらん
とあそばして、既に出でんとし給ふが、さすが御なごりをしく、悲しく思ひ給ひて、左右なく出でやらず、たゞ御涙せきあへず。かくて留まるべきにもあらざれば、夜もやうやう明方になりぬれば、急ぎいでんとて涙とともに、二人ながら出でんとし給ふ時に、いたゞき給ふ鉢かつぱと前に落ちにけり。
宰相殿おどろき給ひて、姫君の御顔をつくゞくと見給へば、十五夜の月の雲間を出づるに異ならず、髪のかゝり、姿かたち何に譬へんかたもなし。若君うれしく思召し、落ちたる鉢をあけて見給へば、二つかけごの其下に、金の丸かせ、金の盃、銀のこひさけ、砂金にて作りたる三つなりの橘、銀にてつくりたるけんぼのなし、十二ひとへの御小袖、く

丸かせ―巾著
けんぼのなし―玄圃梨



千入の袴―幾度染めて色濃き袴
世間さゞめきける―世間の物音騒しくなる
不得心―心得の無きこと

れなるの千入の袴、かずの寶物を入れられたり。姫君これを見たまひて、わが母長谷の觀音を信じ給ひし御利生とおぼしめして、嬉しきにも悲しきにも、さきだつものは涙なり。さて宰相殿これを見給ひて、これほどいみじき果報にてまします事の嬉しさよ、今はいづくへも行くべきにあらずとて、嫁合の座敷へいでんとこしらへ給ふ。既にはや夜も明けければ、世間さゞめきける。人々いひけるは、これほどの御座敷へあの鉢かづきが出でんと思ひ、いづくへも行かぬことの、不得心さよと笑ひける。さる程にとくとくとふれければ、嫡子の御よめ御前は尋常なる御裝束にて、御年の程二十二三ばかりとうち見えて、頃は九月なかばの事なれば、肌には白

すゞし―生絹

き御小袖、上にはいろ〳〵の御小袖めし、くれなゐの袴ふみくゝみ、御ぐしはたけに餘り、あたりもかゞやく計りなり。御引出物には唐綾十疋、小袖十かさね、廣蓋に入れまゐらせ給ふ。次男の嫁ごは御年二十ばかりにて、尋常にして氣高く、人にすぐれて見え給ふ。御ぐしはたけと等しく、御裝束は肌にはすゞしの御袷、上には摺箔の御小袖、紅梅の縫物の御袴ふみくゝみ、さて引出物には、小袖三十がさねまゐらせ給ふ。三男のよめ御前もつとも御年十八ばかりとうち見え、御ぐしたけには足らねども、月に嫉まれ花にそねまれさせ給ふほどの御風情なり。御裝束は肌には紅梅の御小袖、上には唐綾著たまへり。御引出物には染物三十反まゐらせ給ふ。三人のよめ御前、いづれも劣らぬ御姿なり。さて遙にさがりたる處に、破れたる疊をしかせ、鉢かづき置かんとこしらへける。人人申しあひけるは、三人の嫁御前は見奉りぬ、鉢かづきが淺ましき體にて出でんを見て笑はんとて、軒端の烏にはあらねども、羽づくろひして待ちゐたり。さて三人のよめごぜん等も、今や〳〵と待ち給ふ。又しうと御前仰せけるは、いづくへも行かずして、只今恥をかくべき事の悲しさよ、何しによめ合などといはずとも、善きも惡しきも知らぬ體にて、おくべきものをと仰せける。さるほどに鉢かづき遲しと、たび〳〵使たちけれ

翡翠のかんざし―緑髮

いとほしきに―いとほしさにの衍か

ば、宰相殿きこしめし、只今それへまゐると仰せければ、人々見て笑はんとぞじょめきける。出でさせ給ふありさま、物によく〳〵譬ふれば、ほのかに出でんとする月に雲のかゝる風情にて、御かほばせ氣高くいつくしく、御姿は春のはじめの糸櫻の、露のひまよりもほの見えて、朝日のうつろふ風情に異ならず、霞のまゆずみほの〴〵と、鮮妍たる兩鬢は秋の蟬の羽にたぐへ、宛轉たる御かほばせは、春は花にねたまれ、秋は月にそねまれたまふ御風情なり。御年のよはひ十五六ほどに見えさせ給ふ。御裝束には、肌には白き練のきぬ、上には唐綾、紅梅、紫、いろ〳〵の御小袖、くれなゐの千入の御袴ふみくゝみ、翡翠のかんざしゆりかけて歩ませ給ふ御姿、偏に天人の影向もかくやと思ひしられけり。待ちうけて見たまふ人々、みな〳〵目を驚かし、興さめてぞおはしける。宰相殿の御心の中の嬉しさ限りなし。さるほどに御座敷一段さがりて、こしらへたる處になほらんとし給ふ時に、しうと三位の中將殿、いかで天人の影向を下座におくべきとて請じさせたまふ。

あまりのいとほしきに、母御前のひだりの膝元へ呼びまゐらせ給ひける。さてしうと殿への御引出物には、しろがねの臺に黄金の盃するゑ、黄金にてつくりたる三つなりの橘、

目を驚かす―原本「目を」の二字なし、一本によりて補ふ

たえいり―執心に

こがね十両、唐綾、織物の御小袖三十かさね、唐錦十反、巻絹五十疋、廣蓋につませまるらせらる。しうとめ御前への御引出物には、染物百端、黄金のまるかせ、しろがねにて作りたるけんぼの梨の枝をり、こがねの臺にするて參らせらるゝ。人々みてみめかたち、衣裳、御引出物にいたるまで、勝りはすれども人に劣らずと、目を驚かすばかりなり。三人の兄嫁御ぜんたちをも、初めはうつくしく思召しけれども、此姫君にあはすれば、佛の御前に悪魔外道がゐたるに異ならず。兄御たち仰せけるは、いざやのぞきて見んとて、のぞき見給へば、あたりもかゞやくほどの美人なり。皆々不思議に思しめして、何と申すべき言の葉もなし。楊貴妃李夫人もこれにはいかゞ優るべき、とても人間に生れなば、かやうの人とこそ一夜なりとも契りおかまほしけれと、人々うらやみ給ひけり。三位の中將殿おぼしめしけるは、このほど宰相の君たえいり思ひつることこそことわりなれと思しめしける。さて御盃まゐりければ、しうとめ御前きこしめし、やがて姫君にさし給ふ。其後獻々まはりければ、三人の兄嫁御ぜんたち、談合あるやうは、みめは下萬によらぬなり、管絃をはじめ、和琴をしらべさすべし、和琴はことにその源を知らざれば、左右なくひかれぬものなり、宰相殿はそのみなもとをもあきらめ給へば、のちには教へ給ふとも、今夜のうちには教へ給ふことなるまじ、いざや始めんとて、兄嫁御ぜんは琵琶の役、次郎よめごは笙を吹き給ふ。とのうへは鼓うち、姫君は和琴御しらべ候へと責められける。其時姫君おほせけるやうは、かやうの事はいまだ聞きはじめにて候へば、すこしも存ぜず候ふと御辭退あり。宰相殿御覽じて、我身を姫君と見よかし、ゆきてひかんものをと思しめしける。其時姫君御心のうちに思すやうは、われを賤しきものと思ひ、かやうにして笑はんためと思召し、われもむかし母にかしづかれし時には、朝夕手なれし樂の道なれば、ひかうずものと思召し、さらば引きてみ申し候はんとて、そばなる和琴ひきよせ、三べんしらべ給ひける。宰相殿御覽じて、嬉しきことかぎりなし。御ぜんたち御覽じて、歌をよみ、手かくことも、後には宰相殿御教へあるべし、只今のうちには教ふることもなるまじ、さらば歌をよませ笑はんと、談合なされ、これ御覽ぜよ姫君、櫻が枝に藤の花、春と夏とは隣なり、秋はことさら菊の花、これにつき姫君一首あそばし候へと仰せければ、姫君きこしめし、あらむつかしの事を仰せ候ふものかな、われ〳〵が能には、此ほど湯殿にさぶらひて、朝夕てなれし水車、汲みあげしより外のことはなし、歌といふことはいかやうなる物やらん、すこしも存ぜず候ふ、まづ〳〵御ぜん

御客もじ―何々文字といふこと一時流行の語にして、御客といふに同じ

あはぬ事―道理に合はぬ事

たちあそばされ候へ、其後はともかくも申して見んとありければ、御ぜんたち仰せけるは、姫君はけふの御客もじにてましませば、まづ〳〵一首あそばし候へと責められける。その時姫君一首とりあへず、

春は花夏はたちばな秋は菊いづれの露におくものぞうき

と、かやうにあそばしける。御筆のすさび、道風が震ひ筆もかくやらんと目をおどろかすばかりなり。人々これを見て、いかさま此人は、古の玉藻の前か、恐しやなどと申す。さるほどにまた御盃いでければ、しうと御ぜんきこしめし、姫君に御さしありて、御肴申さんとて、我所領七百町とは申せども、二千三百町のところなり、一千町をば姫君にまゐらする、また一千町をば宰相の君にとらすべし、殘る三百町をば三人の子どもに取らするなり、百町づゝわけて取れ、これを不足に思ふものあらば、親とも子とも思ふべからずと仰せければ、兄御たちきこしめし、あはぬ事とは思へども、貴命なれば力なし、今よりしては、宰相の君を總領と思ふべしと、三人同心し給ひけり。さるほどに姫君にはれんぜいを初めとして、女房たち二十四人つけ奉り、宰相殿のすませ給ふたけの御所へうつらせ給ふ。かくて過ぎゆきける程に、ある時宰相殿仰せけるやうは、いかさま御身はたゞ人とは思はぬなり、御名のり候へとありければ、ありのまゝに語らんとは思しめしけれども、まゝはゝの名を立つるにやあたらんと思ひ、かれこれとりまぎらかし名のり給はず。其後姫君は母上の御菩提懇にとぶらひ給ふ。かくて過ぎゆく程に、公達あまた設け給ひて、御よろこび限りなし。これにつけても捨てられし故郷の父御前を戀しく、御公達をも見せまゐらせたく思しめしける。さるほどに故郷のまゝはゝ御前は、慳貪者なるゆゑに召使はるゝものも、かなたこなたへ逃げはしり、後には貧しくなり、ひとりもちたる姫をもとふ人もなし。御ふたりの中もあしくなりければ、貧しきすまひ何かせん、心にのこる事もなしとて、父御ぜんはいづくとも知らず、修行にたち出で給ふ。つくゞ〳〵物を案ずるに、さりにし北の方、子なき事を悲みて長谷にまうで、さまゞ〳〵祈り、觀音の御利生により、姫を一人まうけしに、母むなしくなり給ひて後、あらぬかたはつきけるを不思議に思ひしに、親ならぬ親とて、おそろしや、いろ〳〵にざんそうを言ひけるを、まことと思ひ追ひいだしつる事の不便さよ、其身が人のやうにもあらばこそ、いづくの浦に住み、いかなる憂きめをも見るらん、不便のものかなと思しめしたまふ。さるほどに父御ぜん長谷の觀音へ御まゐりありて、鉢かづきの姫いまだ浮世にあるならば、

今一度めぐり逢はせてたびたまへと、肝膽を碎き祈り給ひける。その後宰相殿、帝の御意にいらせ給ひ、みかどより大和、河内、伊賀、三箇國をくだされければ、御よろこびのために長谷の觀音へ御まゐりある。御一門御公達花をかざり、金銀をちりばめざゝめき給ふ。さるほどに姫君の父御ぜんは、觀音の御前に念誦してゐ給ひけるを、殿ばらどもがこれを見て、御堂のうちが狹きとて、そこなる修行者あなたへしされとて、椽よりそとへ追ひいだす。かたはらに立ちより給ひ、公達を見奉り、さめ〴〵と泣き給ふ。人々これを見て、こゝなる修行者はいかなる事を思ひ泣くぞと問ひければ、わがせんぞありのまゝに語り、恐れながらこの御公達、わが尋ぬる姫に似させ給ふとのたまへば、姫君きこしめして、その修行者爰へ呼べとありければ、椽の上まで呼びあげける。姫君御覽じて、御年より面やせ給へども、さすが親子の御事なれば、人目も憚らず、これこそいにしへの鉢かづきの姫にて候へとて、御いでありければ、父御前きこしめし、これは夢か現か、ひとへに觀音の御利生なりとの給ひければ、宰相殿きこしめし、さては姫君は河内の交野の人にてましますか、されればこそたゞ人とは思はぬものをとの給ひて、御公達一人と、姫君の父御ぜんとをば、河内の國のぬしになしまゐらせ、する繁昌にすま

しされー退け

わがせんぞーせんぞは先祖にて、自家の來歷との意なるべし

せ給ふ。さてまた宰相どのは、伊賀の國に御所をつくらせ、子孫繁昌にすませ給ひけり。これたゞ長谷の觀音の御利生とぞ聞えける。今に至るまで觀音を信じ申せば、あらたに御利生ありと申し傳へはんべりける。この物語をきく人は、常に觀音の名號を十返づつ御唱へあるべきものなり。南無大慈大悲觀世音菩薩。

賴みてもなほかひありや觀世音二世安樂のちかひ聞くにも

小町草紙

小町草紙

種となれり―種となせりの誤か

神佛のたまふげ―神佛より人に給はる偈の意にや

有あく無あく―有惑無惑の訛か

そも〳〵清和のころ、内裏に小町といふ色ごのみの遊女あり。春は花に心をつくし、秋は月の前の雲を厭ひ、あしたに一さいの曙のけしきを眺めて、言葉の種となれり、ゆふべには哀れをさそふ鐘の聲、つく〴〵と世の中を思ふにも、たゞ夢まぼろしの心地して、草葉における露衣、尙あだなるは命なりと思ふにも、日本の歌の道ほど、もてあそぶべき物はなし、よろづの言の葉となりにけり。歌の德あまたあり、世の中の憂きにもつらきにも詠じ、神佛のたまふげにもなり、又は力をも入れずして、天地を動かし、目にみえぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をもやはらげ、猛きものゝふの心をも慰むるは歌なりとて、この小町は歌をよむこと勝れたり。

いにしへの衣通姫の流とも申し、觀音の化身とも申す。かりにこの世にうまれ給ひて、有あく、無あく、衆生の、まよひ深き女人、餘りに心もなき者の、あはれをも知らず、佛を

も禮せず、神をも拜まずして、いたづらに月日をおくり給ふことを悲び、色ごのみの遊女とうまれ、飛花落葉の世の中、ひとたびは榮え、ひとたびは衰ふ。妙なる花の散りはてて、苔のしたに朽ちはつる有樣をみせ、よろづの心にまかせぬ言の葉を、空ゆく月のくもりなき夜も、しぐれの空のたち迷ひて、さはりとなれるをも、これにて眺め、これにつけても歌の姿、人丸の歌に、

ほの〴〵とあかしの浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞおもふ

と詠じ給ひし歌も衆生のためなり。明石の浦とは衆生の迷ひの心なり、島がくれゆくとは三界流轉の心なり、舟をしぞおもふとは、大慈大悲のあはれみ給ふ心なり。されば神世には、あらがねの地にして、素盞男尊より起りける。いまだ文字も定まらず、すなほにしてことの心もわきまへがたし、人の世となりて文字もさだまりぬ。こゝに出雲の國に八色の雲の立ちけるをよみ給へり。

八雲たつ出雲八重垣つまごめに八重垣つくるその八重垣を

これよりして文字のかず三十一字に定まりぬ。花にあそぶ鶯、水にすめる蛙までも知れり。ましていはんや、人としていかでか歌をよまざらん。三十一字はことともおろかや、如

御さうみやうし一誤脱あるべし、意義通ぜず

來の御さうみやうし、されども一の御さうはあまりに申しいだすも恐れなりとて殘し給へり。されば歌をよくよめば、佛をつくり、供養したてまつり申すと同じ。わるくよめば、佛をつくり損ざすると見えたり。又小町は男にあふこと、まづ千人としるしたれども、あうて逢はぬとも見えたり。かたちのよきこと、李夫人、衣通姫にも異ならず。見るもの、聞くもの、これを偲ぶこと筑波根のこのもの繁きこと數を知らずして、ありし事も今は淺香山の淺ましき身となり、難波津にさくやこの花と、さかりにありしことも失せはて、あはれ催す秋の野に、鳴く虫の聲までも、わが身のうへと思ひつる、いつまで命の露、草のいほりに宿りして、昔をしのぶ草の垣にしげく、露のおちぶれいでたる我身かなと、硯をならし筆をそめて、藻鹽草のすける道とて、八そぢあまりにてかき集めたる水莖のあとはかなく成りゆく世の中に、長らへはつべき身ともなきに、などかは人の願はざるらん、知らずしてつもれることは罪の業をしづのめが、明くるをも知らず、只いたづらに年月を、つくも髪のわれらが有樣は、かほどに鶯の音にはや夏にうつりきて、次第々々よわりはてたる身なりけり、さりながら心は花になりにけり。色につき香にふけることは、いにしへよりは勝りつゝと思へども、かへらぬは老の波の

ちりぐ〜袖やしぼるらん、戀しの昔や、しのばしの心や。いにしへはかりに住みにし宿までも、玉をみがき庭には瓔珞をかけ、戸には水晶をつらね、臥し待つ月の床のうへには花のにしき、玉をつらね、戸をそばだてて、枕の塵を拂ひ、心にかゝる人あまたねて狂言綺語の身なれども、今は只朽木の柳いとゞしく、姿は女の歌、此小町が歌は衣通姫のながれなり、あはれなるやうにて强からず。さればよみし歌にも、

思ひつゝぬればや人の見えつらん夢と知りせば さめざらましを

またうたに、

色みえでうつろふものは世の中の人の心の花にぞ有りける

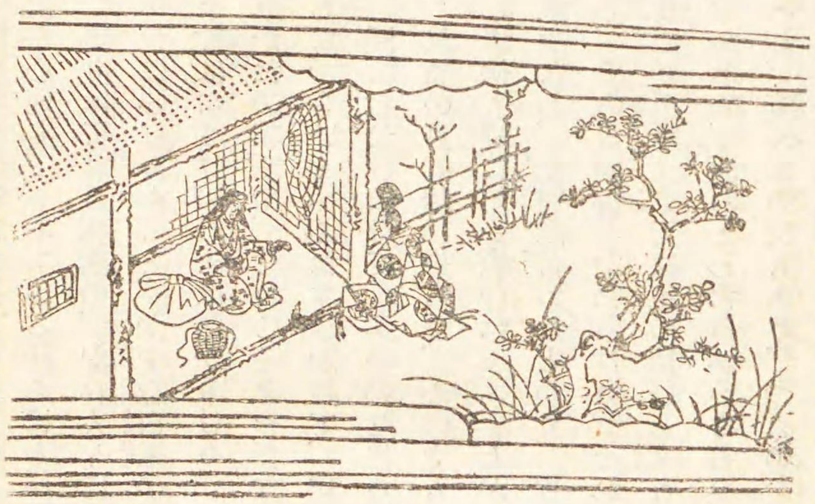
と詠じ給ひしも、げにことわりと詠みしなり。今も思ひあはすれば、業平の歌に、

月やあらぬ春や昔の春ならぬわがみ一つはもとの身にして

とえいじ給ひしもげにことわりと、口ずさみして泣くより外の事ぞなき。身の有樣を思ひつゞけてかくなん、

わびぬれば身を浮草のねを絶えてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ

かやうに詠みおける言の葉までもあはれなり。今は只たのむかたとては、南無大悲觀世



音むかへさせ給へとて念じつゝ、ありがたや、はや行末は近く、なぎさの法の舟うかぶ、たよりは六つの文字、唱ふる聲はひまもなし、いかでか諸佛も助け給はざるらんと思ひつゝ、をりふし小野の細道かきわけて、草のとぼそをうちならし、いにしへの色好みの小野の小町はこれに渡らせ給ふかととはれければ、はづかしや、こはそも夢かうつゝか幻か、いかなる人にてましませば、いやしき柴の戸に竹の柱のふしどころをば問はせ給ふは、こなたの事か、よそのためか、何事ぞや、よく〜思へば同じ色好みの、なさけも殊に在原の、おもかげは業平の、あらはづかしわが姿、さしもこそ、花の姿の袖かさね、にほひも深き梅衣、たち姿は女郎花の、露おも

げなる心地して、おちぶるうちにも誰にか靡かんと、うしろめたくも思ひしに、いつのまに變りはてたる花園の、かれ〴〵になる草の葉をとぶらひ給ふは不思議さよ。その歌人の色にふけりしこと、かずを白玉の、手にとる文のかず數多ありしかども、身のはてしまではなさけのつまは無かりけり。

ありがたの在原や、これこそよき便なれ、いで過ぎにし愛念のうちをかたり申さんと、恥しながらいくへふたすきかけて、賴みはありそ海の底ひなく、懺悔申さんと有りければ、涙にむせび給ひて、業平仰せけるは、さらぬだに女は罪ふかくして、業障の雲あつく、眞如の月も晴れやらず、心の水も濁りつゝ思ひと思ふことは、惡業煩惱の絆なり、されば佛も經に第一嫌ひたまふ、しかりとはいへども、男なくして女なし、佛なくして衆生なし、愛別離苦のことわり、皆目の前ぞかしと語り給へば、小町は手をあはせて禮し、その後懺悔をかたりけり。それ戀路にまよひし人は、第一にみかどの御歌、第二に貫之が玉章、さては花に結びし文もあり、あさがほの黃昏時のふみもあり。よそめを包むふみも、涙おとしたるふみも有り、岩もる水のふみもあり、うきを名をしどりの文もあり、寛の水の文もあり、つまのをじかの文もあり、うらみを葛の葉のふみも有り、た

いくへふたすき―いくゆふだすきの誤にて、幾多の木綿襷の意にや

なばたの逢瀨の中のふみも有り、妹背の中のふみもあり、思ひあかしの文も有り、宇治の柴舟のふみもあり、戀をするがのふみもあり、富士のけぶりの文もあり、難波津の細道たえし身をつくしのふみもあり、すみよしや、きくに人なきふみもあり、濱の眞砂のふみもあり、よみつくしえぬふみも、歌にそへたるふみもあり、やどりの文もあり、おもひますだのいけみ殺しのふみもあり、堅田の鮒包燒きすつるふみもあり、阿漕が浦にひく網の、目にあまりたるふみもあり、藻にうづもれしたまがしはの文もあり、あはれみても兒手柏の文もあり、蓬生の宿とかきたる文もあり、淺香の沼のかつみぐさ、かつ見しより思ひの種と書きたるふみもあり、珍しき初雁がねのおとづれのふみもあり、うはの空にも聞くやいかにと書きたるふみもあり、さゝがにのいとはかなき文もあり、逢坂山のさねかづら、くる人もなきふみも、おぼつかなくも呼子鳥のふみもあり、八つ橋や、蜘手にちかひたるふみもあり、へだてもあらじ杜若色紫のふみもあり、箒木のよそながら見し文もあり、風のたよりの文もあり、細谷川の丸木橋のふみもあり、室の八島に立つけぶりの文もあり、野中の清水とかきたるふみもあり、雪のしたがさねの、紅染のふみもあり、われ知らぬふみもあり、山時鳥きかまほしさは一聲をと、戀ひそめし

ますだのいけみ―益田の池を、生けみ殺しとかけたり
鮒包燒き―鮒の包燒は近江の名物なり、それを燒きすつるとかたりい

みづからが、袞へはてたる有様、譬へんかたもなき心なりとて、又袖を顔におしあてければ、業平、むかしを忍び給ふなよ、逢ふは別れのはじめ、生るゝは死すべきはじめ、ただ水の泡なる世に、何事をいま語り給へる、ふみのかずを打忘れ、思ひしことを拂ひすて、南無西方極樂世界へ迎へさせ給へと念じ給ひて、わが苦患をものがれ、馴れにし情の人をも助け給へと、在原の業平くどき給へば、小町、いよ〳〵心をひるがへし、あら嬉しの御詞ぞや、生死流浪の迷ひの道しるべ、教へ給ふことの有りがたさよ、よく〳〵思ひつゞくるに、妄執の深きは女人なり、觀音とも、地藏とも、御身を頼み申さんとありければ、まことの道を願ふこそ、佛も慈悲を垂れ給へ、われも過ぎにし古事を語りてきかせ申さんとて、同じ懺悔をし給ふ。われも心をうつし、身をすてて色ごのみは數をしらず逢ひ馴れしかども、その中にも思ひとめしはわづかなり、以上十三人、第一染殿の后、第二には紀の有常がむすめ、第三には齋宮の女御なり、そのほか伊勢物語にかきつけし筆のあとに見えぬべし。

みづからも千人としるしたり、これ皆いつはりの情なり、まことに妄執の雲晴れにけり、などか成佛ならざらんや、されば世の中のさだめしことは定めありと、むばたまの

たゞそふ―たゞよふの衍か

さてしもあらざる―さてしもあらざればの衍かそんをひろげ物をたて給へ―そでをひろげ物をたべ給への誤にや

夢につたはりたることわり、明けくれ思ひすつる言の葉、誰かは老の坂を越えざらん、のがるべき道もなし、花もさすが荅めるうちに、嵐はげしくして、さそひぬる時もあり、入らずして雲にたゞそふ月もあり、これ生死の境にひとしくして、よろづ身のうへと思ひける、ある歌に、

世の中を何にたとへんあさぼらけ漕ぎゆく舟のあとの白波

とよまれけるも、ことわりなりと思ふにも、ひまもなくして、淨土を願はざりけり、いかでか馴れにし人も助からざるべき、みづからも狂言綺語のことわりをふり棄てて、大悲をたのみ申すべしとて、かき消すやうに失せにけり。不思議やな、夢にたはぶれつる心して、ゆき方しらず歸りたまひし面影を、かい見えさせ給はずて、うせ給ひつるは、是は業平にてはましまさずや、觀音菩薩と思ふなり。さてしもあらざる草のとぼそ引きたてて、又里へとて出でにけり。こゝやかしこの門に立ちて、そんをひろげ物をたて給へと、聲をあげて立ちゐたり。見る人ごとに、いにしへの小町がなれる姿を見よやと有りければ、集りこぞりてさゝやきける。

あさましや、あまりに都のほとりは、われを知らぬ人もなしとて、足にまかせて、足曳の

山路をたどりゆく程に、遠きあづまに思ひきぬ。をちこち人に問ひ給へば、はや逢坂山につきにけり。これやこの蟬丸のすてられし跡かとよ。たづぬれど小町に答ふる人もなし。たづきも知らぬ旅人を、とむる關屋はあれども、小町をとゞむる關守はなし。わが身一つのひとりごと、よしや人をも怨むまじ、たゞわが身のありさまを、ゆふつけ鳥の聲までも、泣く涙おちそひて、頼む力は竹の杖、ふすかとすれば草莚、枕となるは、この宿のなさけの人もなきまゝに、立ちよる蔭は松のした、休み〳〵ゆく程に、鏡の山につきにけり。いざ立ちよりて、老の形をも見るやとて、しばしは足を休めつゝ、いまは賤しき身とはなりぬれど、一首かくなん、

花の色もうつしとゞめよ鏡山春よりのちの影もみるやと

かやうに詠じ、又小町、

人影もせぬものゆゑに呼子鳥何を鏡の山になくらん

とうちながめて、人伴はねども、又とふ人もなけれども、むかひの里につきにけり。さだめし宿はなけれども、雨はふりきぬ美濃の國、みののおやまの一つ松、語らふ友はまれにして、いそぎ〳〵ぞ下りける。

いざ立ちよりて云々―古今十七「鏡山いざ立ちよりて見てゆかん年へぬる身は老いやしぬると」

思ひきや美濃のお山の一つ松契りしことはいつもかはらじ

とよみしは、これはいつはりなり。契ることはかはりきて、月よりほかの友はなし。はや行末はみのをはり、何となるみの潮干がた、あしやをさして鳴くたづの、ゆふべの聲までも身のうへかと、潮汲むあまの衣ほすまもなき、わが袖かなとあらそひて、こゝやかしこを打過ぎぬ。もしもやわがよびつぎの里もやあると聞きゐたり。松風の里のあたりさびしやな、さよ千鳥聲こそ近くなるみがた、かたぶく月にしほや滿つらんと、八つ橋の蜘手に物やおもふらん、一むら山や、みやぢ山、日もはや既にくれはどり、あやはかなき身の、いつか身のゆくへをとほたふみ、さよの中山こえやすし、憂きにもかこつ命なりけり、露の枕にかたぶきて、

たびねする木の下露の袖にだにしぐれぬるなりさよの中山

と詠じけるこそやさしけれ。いかなる罪のむくいにて、かゝる憂き身の旅をするがなる、宇津の山路をこえにけり。昔は夢かうつゝの山路を、あとも見えぬ蔦の細道かきわけて、草のこもともしをれけり。今はまた何をか身にも纏へんと、なく〳〵おきつの濱千鳥、清見が關につきにけり。富士の高嶺に立つけぶりをながめ、漕ぎゆく舟をみほの浦、松原こ

あしや―葦間の誤か

よびつぎの里―原本「よひ月の里」とあり、今改む

草のこもと―草のたもとの衍なるべし

ゆるしほけぶり、われは八十路あまりの身なれども、いにしへの歌人のよみしことは、なほもおろかと思はれて、かくなん、

清見潟こゝろに關はなかりけりおぼろ月夜のかすむ浪路を

又さいぎやうじの歌に、

風になびく富士のけぶりの空にきえて行くへも知らぬわが思ひかな

とよまれしも、今こそ思ひ知られたれ。さらぬだに物憂きことは東路の、埴生の小屋のいぶせきに、都の空を見て、けふはうき身を浮島が原にまよひ出でて、行きかふ人の道しるべとて、たどり〳〵行くほどに、ゆくへも知らず、はてもなき、武藏野のすゑになる、草葉におく露の玉鉾の、道のほとりの早蕨を、折りてもち居たり。これもものうき露の命たすけんために、ひぢかけがさ、さすがにかけし武藏鐙と、古歌にも有るぞかし。などか人の情のなかるらんと、ゆふべ〳〵の假枕、草の衣に草むしろの、深き心はあらずして、日かず積れば陸奥の、しのぶの里にほど近し、都をば霞とともに出でしかど、けふしら川の關にもつきにけり。げにや命ほどつれなきものはよもあらじ、遠きあづまの旅衣、きつゝ怨むるかひもなし。都にて身のむかしをみちのくや、しのぶの山のしの

さいぎやうじ―西行法師の誤なるべし

さすがにかけし云々―伊勢物語「武藏鐙さすがにかけて頼むには問はぬもつらし問ふもうるさし」

都をば云々―後拾遺、能因「都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く白川の關」

ぶ摺、袖にもうつしとどめばやと、宮城野の小萩が花のむらずすき、靡くけぶりは鹽竈の、八十島かけて千賀の浦波、淺香の沼のかつみ草、緒絶の橋や阿武隈川のわたりして、ゆきみの里のほど近し。はなかの櫻、かけくまの松の木立もみきときく、あこやの松やあねはの松、人ならば都の旅にさそふべきと、よみし歌の枕を、せめて筆にうつしても、見ばやと思ひし言の葉の、いまは目に見ることの嬉しけれども、いたづらに歌枕よむとても、たれか小町が歌とて、もてあそぶ人もなし。

くるしののいたづきやすることものてうありし昔に君をととける

とありし歌の心かや。雪をいたゞきて、額に苦海の浪をたゝへ、身には首までおひずりをかけ、ねぶりのうちにも果てよかしと思へど、つれなく殘る有明の、影も形も衰へていづくともなくあこがれて、細杖に草の衣ひぢにかけ、笠と簑と棄てもやられぬ身のはてしがなと思へども、いつの時をか待つべきと、歎き悲みけれども、さすがに惜しきは命なり。厭へども厭はざるをば老の坂、願へども叶はぬは和歌の浦のたづの聲かなと、年をへて今日はみちのくの玉造の小野といふ草原に宿りして、あさなゆふなを暮しけり。岩木にもあらざれば、つひにはかなく露と消えにけり。あたりを見れば、草ふかく繁りあ

かけくまの松云云―たけくまの誤なり、後拾遺、季通「武隈の松はふた木を都人いかゞと問はゞみきと答へん」

人ならば都の旅云々―伊勢物語「粟原の姉羽の松の人ならば都のつとにいざといはましを」

くるしのの―此歌誤脫あるべし意義通ぜず雪をいたゞきて―此上に「頭に」の二字脫せしか

をうの心―誤字あるべし
名所みち―名所みんなるべし
けふの郡云々―後拾遺、能因「錦木は立てながらこそ朽ちにけれけふの細布胸あはじとや」
かの小町は―「は」は「が」の衍なるべし

ひたる絲薄、よる〳〵風の吹きにけり。をうの心あるやうに聞きにけり。尋ぬる人もなきまゝに、とぶらふかたらひ更になし。不思議やな、在原の業平は、歌の名所みちとかや、けふの郡、織る細布の胸うちさわぎ、かの小町は朽ちはてしあとをとぶらはゞやと思ひしが、しばし心にうかゞはせ給ふことありて、休らひ給へば、歌の上の文字、吹きくる風につたはりて、

くれごとに秋風吹けばあさな〳〵

と、さやかに聲の吹きければ、業平、下の文字をつぎたまふ。

おのれとは言はじすゝきの一むらと詠じ給へば、いづくともなく、みめかたちいつくしき女房出でて、いかなる人にてましませば、この草むらに立ちよりて、歌の下をつけたまふらん、これこそ古きこえし色好みの小町が老い衰へて、白骨となりて失せにしあとにて候へ、もし都人にてましまさば、かやうなる所ありと、業平にかたり給へとなり、それをいかにと申すに、業平はなさけも深き慈悲の人にてましませば、さて小町はこの世にはや無きかと聞かせ給はゞ、とぶらひにもありぬべしと、業平とは、業をたひらむると書きたれば、おのづからこの業平を呼びたてまつれば、悪業も皆消えにけりとなり。業平、

候へ―原本「候ひ」とあり、今改む

如意輪―傍訓原本のまゝ

これはたしかなる幽靈なるとて、草叢をかきわけて見たまへば、女はなし、たゞ白骨と薄一むら生ひにけり。これを見たまひしより、いよ〳〵世の中のあはれ、人のうへと思ふことをば、いかにも山坂を隔ててもとひ給ふべし。

此物語を聽く人、まして讀まん人は、すなはち觀音の三十三體をつくり、供養したるにも等しきなり。小町は如意輪觀音の化身なり、又業平は十一面觀音の化身なり、あだにもこれを思ふべからず、南無大慈觀音菩薩と回向あるべし。

御曹子島わたり

わがてう―我朝

御曹子島わたり

さる程に御曹子、秀衡を召されて、都へ上るべきやうを問はせ給へば、秀衡うけ給はり、日本國は神國にてましませば、ものゝふの手柄ばかりにては成りがたし、是よりも北州に一つの國あり、千島とも、蝦夷が島とも申す、その内に喜見城の都あり、其王の名をばかねひら大王と申しけり、かの内裏に一つの卷物あり、其名を大日の法と申してかたき事なり、されば現世にては祈禱の法、後世にては佛道の法なり、此兵法を行ひ給ふ物ならば、日本國は君の御まゝになるべし、何とぞ御てうほふあつて御覽候へと申したてまつれば、義經此由聞しめし、とやせんかくやあらましと、しばし物をもの給はず。やゝあつて所詮只かの島へ渡らばやと思しめして、秀衡にいとま乞ひ、旅の裝束し給ひて、音に聞きしわがてう四國土佐の港へつきたまふ。船頭を近付けて、是はいづくへ行く舟ぞ、數はいかほどあると問はせ給へば、船頭共うけ給はり、これは北國、又は高麗の船も御

入り候ふと申せば、名船いかほどとの給へば、船頭共うけ給はり、船の數は一千艘と申す、その中に七艘さふらふ、こたか、はやつき、波くどり、はやかぜ、いはわり、なみわたし、いはくだきとて御座あると申す。義經きこしめし、餘の船はほしからず、はや風と好ませ給ひ、こがね百兩に買ひとり給ひ、御座船と號して、尋常に飾り、かしらには鞍馬の大悲多聞天、ともに氏神正八幡大菩薩、ろかいには廿五の菩薩を書きたてまつり、勸請し、祈誓を申させ給ひ、土佐の港を漕ぎ出だし、蒼波萬里へおしいだす。潮をむすび手水とし、日本の神々を拜みたまふ。上は梵天帝釋、下は四大天王、熊野三所の大權現、大小の神祇、ことには下界の龍神、鹽竈六所の明神、ねがはくは千島へ渡してたびたまへ、大慈大悲と祈念して、風にまかせて行くほどに、通る所はどこ〳〵ぞ、こんろが島、大手島、猫島、犬島、まつ島、うし人島、おかの島、とゝ島、かぶと島、たけ島、もろが島、ゆみ島、きかいが島、ひるが島を、明けぬ暮れぬと行くほどに、七十五日と申すに、きようがる島につき給ふ。渚より見給へば、高さ十丈ばかりのもの二三十人出で來りしが、腰より上は馬にてあり、下は人なりしが、腰のあたりを見給へば、太鼓をつけてぞ居たりける。義經見給ひ、あまりの事の不思議さに、いかに島人たち、此島は何といふぞとの

熊野三所―本宮、新宮、那智

給へば、島人うけ給はり、是は王せん島と申して、かくれもなき馬人島とはこの所なり。御曹子はきこしめし、面々の腰につけたるは、いかなる物ぞと問ひ給へば、是は太鼓と申す物なり。何のために付くるとの給へば、島人申すやう、われ〳〵が背のあまり高くして倒れてあれば起きあがる事なし、叫べど聲の出でざる時、是を打鳴らし候ふと申す。義經しばらく物語して、逗留も詮なしとて、又御舟をおし出だす。風にまかせて行くほどに、八十餘日と申すには、又ある島へぞ著き給ふ。渚によせて見給へば、男女の隔てはしらず、三十人ばかり裸にて居たりしを御覽じて、いかに島人、この島をば、いかなる島との給ひければ、さん候ふ此島はかしまと申して、かくれなき裸島と申すなり。御曹子きこしめし、これは神の誓かや、所のならひか、不思議なりと仰せければ、神の誓にてもましまさず、只昔より此所のならひにて候ふとて、かくなん、

風ふけばさむくはあれど裸島麻の衣のやうを知らねば

義經きこしめし、やさしき事を申すものかな、さらば麻の衣をまゐらすべしとて、南に向はせ給ひ、はたひゐんと申すを行ひ給ひて、三度まねかせ給へば、ゑちの上品七八十船中にみえたり。すなはち是を島へ與へ給へば、島人ども喜ぶ事かぎりなし。其後義經

ゑち―越にて南越國の事にや
はたひゐん―ゐんは印なるべし

まほり―守、護符

のたまふは、是より千島の都へはいかほどの舟路ぞやと問はせ給へば、島人うけたまはりて、喜見城の都へならば、順風よくして三年、風あしくば七年にもわたるなりと申しければ、御曹子きこしめし、かなたこなたの島わたりして、心勞をせんよりは、これより歸らばやと思しめして、案じ煩はせ給ひけり。島人ども申しけるは、此島に御とどまりあれとぞ申しける。さるほどに義經案じかねておはしけるが、待てしばし我心、此まゝ歸る物ならば、秀衡に何といふべきやうもなし、見限られては叶ふまじと思しめし、又御舟を漕ぎいだし、日數つもりて七十二日と申すに、又ある島につき給ふ。渚により て見給へば、年の程四十ばかりを先として、十七八なるものもあり、女あまた出で合ひて、御曹子をとりこめ、あら嬉しや、島のまほりこそ來れとて喜び、既に害せんとしけるに、御曹子仰せけるは、いかに島人たち、まづ物を聞き給へとありければ、それには取りあひ申さずして、おのれら互にいふやうは、二三百年がそのさきに、葦原國より男三人來りしを、おさへて斬りて島人のまほりにし給へば、それより島はめでたうして何事も思ふまゝなり、皆々よりてきり取りて、まほりにせよと言ふまゝに、鉾をよこたへかかりたり。義經今を限りとおぼしめし、少しのいとまをたび給へ、竹を鳴らして聞かせ

むくり―蒙古

なんしう―南州か

最愛―最愛の夫の意

んとて、たいとう丸を抜きいだし、干、五、上、勺、中、六、下、九とて、八つの歌口に花の露を吹きしめし、時の調子を取り、黄鐘にて吹き給へば、女共は是をきゝ、面白いぞや冠者、島のまほりにしたけれども、竹を鳴らすおもしろさに、しばし許し申さんと、鉾を投げすて笛をこそは聞きにけれ。さる程に御曹子は、たばかりたると思召し、そのあひ〳〵に物語をぞし給ひける。われ日本葦原國より、むくり退治のそのために、十萬餘騎のつはものを揃へて渡るなり、これらをとり給ふべし、われ〳〵を斬りて、少しづつまほりにかけ給はんより、男一人づつ夫と定めてもち給へ、十萬餘騎の人かずはわれらのまゝにて候へば、いそぎ歸りてわたさんと仰せければ、島の女どもよろこび、心うちとけ語りける。此島は隱れなき女ごの島とぞ申しける。義經仰せけるやうは、女ばかりにて、和合のかたらひなくして、種をばつくるぞとの給へば、さればこそとよ、是より南にあたり、なんしうといふ國あり、その方より吹きくる風、南風と申す、これふくみて最愛とす、又生るゝも女にて、かやうに多く侍るなり。御曹子は聞召し、やがて男をまゐらせんと、いとま乞ひしてたばかりすまし、御船をおし出だす。風にまかせて行くほどに、三十餘日と申すには、又ある島につき給ふ。さるほどに御船なぎさに寄せて見給

へば、せいの高さは一尺二寸ばかり、扇のたけに等しきほどの者、三十人ばかり出で來れり。御曹子は御覽じて、此島の名は何といふぞと問はせ給へば、島人まなこに角をたて、何といふぞや、冠者は、是こそは隱れもなきちひさご島とは此ところなり、又ほさつ島とも申すなり、ちひさご島と申すは、餘りせいのちひさき故なり、またほさつ島とは、よるも三度、ひるも三度、南方極樂世界より二十五の菩薩たち、管絃を奏し影向なり、異香薫じ、花ふり、紫雲たちて殊勝なり、しかるゆゑに此島をほさつ島とは申すなり、人の命も長くして、八百歳を保つなりと申す。義經きこしめし、扨は菩薩のましますかや、一日なりとも留り、拜まばやと思召しければ、案のごとく二十五の菩薩影向ならせ給ひて、管絃音樂し給ひて、心も詞も及ばれず。法華經に說かれたり、らうりくとくあんおんらくと聞く時は、ありがたしありがたし、上品上生、極樂世界うたがひなしと思しつつ、隨喜の涙を流したまふ。誠にあり難しとは思へども、こゝに心をとめてもせんなしとて、また御船をおし出だし、風にまかせて行き給ふ。明けぬ暮れぬとせし程に、九十五日と申すには、又不思議の島につき給ふ。さるほどに御船を渚によせて見給へば、年の程四十ばかりを先として、二三十人いで來り、御曹子を見たてまつり、横手をはたと

てんくわのぼう—アイノ語に得物をふりまはす事を「テンカコンナ」といへばそれを訛りてテンクワの棒といふなちんぶすの矢—附子の毒を塗りたる矢

打ち、あら嬉しやといふまゝに、てんくわのぼうに、ぶすの矢を持ちて、中にとりこめければ、いたはしや御曹子、既に御命あやふかりける有樣なり。淺ましや、かゝる憂目にあふ事も、前世の因果めぐりきて、かゝる憂目にあふ事よと、心細くて、すこし心をとりなほし、島人にの給ふやうは、少しのいとまをたび給へ、竹を鳴らして聞かせんとありければ、少しくつろげ奉る。其ひまにたいとう丸を取りいだし、ねとりすまして、萬壽樂といふ樂を、しばし吹かせ給へば、島人是をきくよりも、竹を鳴らすが面白きに、いかほども鳴らせとて、皆々しづまり笛を聞きてぞゐたりける。義經は御覽じて、物語をし給ひける。此島の名をば、何といふぞと問ひ給へば、

たゝせいめうしゆやしやきー未詳、但しやしやきは夜叉鬼なり

蝦夷が島とて憑れもなき島なりと申しければ、御曹子きこしめし、これより千島の都へは、いかほどの船路ぞと問はせ給へば、これより都へは、順風よくして七十餘日、只よの常の船路ならず、同じくは是にとゞまり給ふべし、住めばいづくも都なり、竹を鳴らしてきかせ給へ、命を助くるうへなれば、何に恐れ給ふぞや。義經聞召し、とゞまるべきにもあらずとて、暇ごひをぞし給ひける。島人は色々止め申しけれども、十日ばかりは休み給ひて、そののち船をおしいだし、あたりの體を見給ふに、渡るべきやう更になし。御曹子垢離をとり、潮をむすび手水として、珠數さら〳〵とおしもみて、南無や梵天帝釋、四大天王、日輪月輪、總じては氏神正八幡、ねがはくば、島へ難なくわたしてたび給へと、祈念ふかく申させ給ひ、艪かいかぢを取りなほし、風にまかせて行くほどに、はるかに遠き船路なれども、祈誓のしるし現れて、音にきゝし千島の都につき給ふ。大王のうちを見てあれば、心も言も及ばれず。地よりは三里たかく、八十町のくろがねの築地、鐵の網をはり、くろがねの門を立てたりけり。門のあたりを見てあれば、牛頭馬頭阿彷羅刹、たゝせいめうしゆやしやきとて、鬼どもあまた居たりしが、御曹子をみつけ、横手をはたとうち、あら嬉しや、餌食にせんとて中にとりこめけり。彼等がせいを見給へば、

霞の息云々ー蝦夷人は息を吹きて霞となすと云へり

あふちうー皇麗か

かんしゆー甘州

さうふれんー想夫戀

まんしゆちくー萬秋樂

しゆみやうりうー春楊柳の訛

やこんらくー夜半樂の訛

くわんきよー冠者といふべきを、わざと蝦夷語めかして言ひかへたるなるべし

十丈ばかりに見えにけり。十二の角をふりたてて、霞の息をつきければ、長夜の闇とぞなりにけり。義經は御覽じて、日本にてあるならば、十萬餘騎が來るとも、物のかずとも思はじに、かゝる處にてとやせんかくやあらましと、思ひまはせば小車のやるかた更になかりけり。せめての名殘とおぼし召し、少しの暇を乞ひ給ひ、たいとう丸を取り出だし、干五上勺中六下九とて、八つの歌口花の露にて打ちしめし、時の調子をとり合せ、黄鐘にあふちう、かんしゆ、さうふれん、まんしゆらく、しゆみやうりう、やこんらくといふ樂を、今ぞかぎりと吹き給へば、阿彷羅刹は是を聞き、餌食にはしたけれども、竹を鳴らすが面白ければ、ゆるして吹かせ聞かんとて、霞の息を引きければ、もとの空にぞ晴れにける。御曹子は時の命をたすかりて、こゝをせんどと吹き給へば、あまり面白きに、いざや習ひて吹かんとて、竹をもとめて穴をあけ、吹きて見れども鳴らざれば、只くわんきよが吹くほど面白き事よもあらじとて、東西をしづめて聞きけるが、ある鬼がいふやうは、是程おもしろき事を我等ばかり聞かんより、いざ大王へ申さんと申しければ、もつともと申しつゝ、やがて奏聞申しけり。大王きこしめし、いかなる事ぞや、見給はんとて、八十二間の廣椽まで呼びたまひければ、やがてまゐり給ひて、大王の出でさせ給ふ姿を

ひやうし―袋しか

油單―笛の表をいふ

見給ふに、五色をひやうし出で立ちて、十六丈のせいにて、手足は八つ、角は三十ありて、よばはる聲は百里が間も響きわたるなり。肝たましひも身にそはず。大王は大の眼に角をたて、日本葦原國より渡りたるくわんきよとは汝が事かとの給へば、まなこは朝日のかゞやく如くなり。汝は竹とやらんを鳴らすと聞く、吹けきかんと云ひし有樣、おそろしき事は限りなけれども、思ひ設けたる事なれば、たいとう丸を取り出だし、錦の油單はづし、ねとりすまし給ひて、樂はさまゞ多けれども、それ天竺にてはしゝとり、へいとり、とくてん、とやかてん、りんせい、さうふれん、しゆみやうわう、にちはんらく、驚破霓裳羽衣の曲と申せし樂、爰をせんどと吹き給ふなり。大王うつら〳〵と聞きたまひてなのめならず喜び、さても奇特に鳴らすものかな、よき小くわんきよはこれまで渡りたり、三百年以前に葦原國よりわたり、忽ち道にて命を失ふもののあるが、汝はこれまで難なう來る不思議さよ、望のありて來りけるか、隱さず申せとありしかば、御曹子聞召し、恐れがましき事なれども、此内裏に大日の兵法のましますよし承りおよび、是まで參りて候ふなり、御なさけに御傳へありて給はり候へかしとの給へば、大王聞召し、あらやさしのくわんきよの心ざしや、難なく是まで來り、師弟の契約となのるぞや、七生の契なり、一字千金のことわり、師匠の恩は七百歳と說かれたり、されば御身渡りて河の案内知りたるらん、その河をば、かんふう河と申すなり、水の底より大風ふき、白波たちて、葦原國の氷に百千まさりつめたかるらん、その河にて、朝三百卅三度、ゆふに三百卅度垢離を取り、三年三月精進をして、八月十五日に一度習ふ大事なり、葦原國の大天狗太郎坊もわが弟子なり、四十二卷の卷物を相傳せんと申せしが、やう〳〵に廿一卷、いのほうまで行ひて、それより末は習はぬなり、もしそれを習ひてやあるらん、それを習ひてあるならば、われ〳〵が目の前にて、ことゞく語るべし、其後大事を傳ふべしとの給ひければ、御曹子は聞召し、もとより鞍馬育ちの事なれば、毘沙門天王の化身、文殊の再誕にてましますうへ、文字にくらき事ましまさず、鞍馬の奥にて習はせたまひし、四十二卷の卷物を、ことゞく行ひ給ふ。大王御覽じて、誠に汝は心ざし深きものなり、神妙なりと仰せありて、さらば許し申さんとて、師弟の契約をなし給ふ。先りんしゆの法、かすみの法、こたかの法、きりの法、雲井に飛び去る鳥の法などを、御傳へあり。是より奥は無益なりとて、御座敷をたゝせ給ひにけり。御曹子はたゞ一人、廣庭におはしまし、とやせんかくやあらましと、佇みたまへば、大王は、ゑしやきといふものを使にして、くわんきよ

は、いづくにあるぞ、見てまゐれとありしかば、ゐしやき立ち出で見て、もとの處にありけるを、よく〳〵見てぞ歸りける。

大王にかくと申しければ、大王聞召し、さては不思議のものかな、さらば出でて酒盛し（さかもり）て、竹を鳴らさせ聞かんとて、今度は姿をひきかへて出でばやとの給ひて、阿彷羅刹（あはうらせつ）を千人ばかり引き具して出でさせ給ふ。大王の出でたちには、年の齡四十ばかりの男にいでたち給ひ、烏帽子裝束を引きつくろひ、三でう重ねのたゝみの中程に、むずとなほり御曹子を左手（ゆんで）の方へ呼び寄せなほらせ給へば、前見し姿はかはりけり。御盃はじめ給ふ。くわんきよは竹を鳴らせとの給へば、たいとう丸を抜きいだして、くわいはいらくといふ樂を吹かせ給へば、面白いぞや、くわんきよ、廻盃樂（くわいはいらく）といふ樂は、盃をめぐらすと云ふ樂なり、さらば盃めぐらせとて、順逆（じゆんぎやく）なりとさす程に、酒もなかばと見えしかば、大王扇とりなほし、錦の暖簾（のうれん）かきあげて、あさひ天女は聞くかとよ、葦原國のくわんきよが、竹を鳴らすがおもしろきに、出でて聞けやとの給へば、天女はきこしめして、出づまじき物とは思へども、父の仰せにてありければ、出でばやと思しめし、出でたち給ふ御裝束、しげまき染の花のやうなるに唐卷染（からまきぞめ）、菊がさね、むらがさね、このはがさね、八重

まき染―布を卷きたるまゝ所々くゝりて染むるをいふ

がさね、唐綾織一かさね、十二ひとへを引き重ね、女房たち十二人ひきつれ、七重の屏風、八重の几帳、九重の幔（まん）の内より出でさせ給ふ御有樣を、物によく〳〵たとふれば、十五夜の月の、山の端をほのぐ〳〵出でし御姿、ませのうちの八重菊、大廈嶺（たいゆふれんい）の梅の花かと疑はれ、いでさせ給ひて、父大王の右手（めて）の脇になほらせ給ふ御姿を見たてまつれば、三十二相、八十すいかうのかたちをもたせ給ひたる姫君にてこそおはしけれ。御曹子は御覽じて、たとひ命はすつるとも、一夜（いちや）なりとも馴れてこそ、この世の思出ともなるべしと、心そらにあこがれて、樂はさまぐ〳〵多けれども、男は女を戀ふる樂、女は男を戀ふる樂、想夫戀（さうふれん）といふ樂を吹かせ給へば、天女はこれを聞き咎め、くわんきよがみづからを心にかけるやさしさよと思しめす。大王仰せけるやうは、あの姫は去年（きよねん）三月に母に離れ、心慰むかたもなし、竹を鳴らして聞かせよと仰せあり。酒もすぐれば、大王御座敷をたち給へば、天女も共にたち給ふ。御曹子も慕ひゆかせ給ひ、一日二日と思へども、日かず積りければ、天女も岩木ならねば靡かせたまひ、淺からず契をこめ、心うちとけ給ふ時、御曹子天女にの給ひけるは、われ葦原國より望ありてまゐりたり、叶へ給はゞゆめばかり語り申さんと仰せければ、天女はきこしめし、何事なりとも叶へ申さん、

大廈嶺―傍訓原本のまゝ

八十すいかう―八十種好の訛なるべし

りやうー寵か
こそうの點ーこそうは虎爪か

はやとく〳〵とありければ、此内裏に大日の兵法のまします由うけ給はる、一目みせ給へとの給へば、それは是よりうしとらの方より七里奥に、壇を築き注連を張り、石の倉にこめおき、金の箱に納めつゝ、たゞ世の常の事ならず、ことさら女のまゐる事、なかなかならざる處なり、その事ばかりは思ひもよらぬ事とぞ仰せける。義經きこしめし、こゝにたとへの候ふぞや、父の恩の高きこと須彌山よりもなほ高し、母の恩の深き事は大海よりも尙ふかしとは申せども、親は一世のむすびなり、不思議なりとよ、夫婦は二世の契ぞかし、一夜の枕をならべしも、百生の契にて侍るなり、御身と我とはこと更に蒼波萬里をへだてたれども、誠に他生の契深きことなり、何とぞ案をめぐらして、かの卷物を一目みせてたべとぞ仰せける。天女は此由きこしめし、おもふ中の事なれば、父の勘當は蒙るとも、見せばやと思召し、ふしやうなる身ながらも守刀を持ち給ひ、七里山の奥におしいらせ給ひ、七重の注連をひき拂ひ、石の土藏を見たまへば、文字三ながれあり、是にりやうといふ字をかきて、こそうの點を打ち給へば、石の土藏はひらけにけり。金の箱の蓋を開き、ふしやうの手にとり、我屋にかへり給へば、御曹子斜ならずに思しめし、三日三夜に書きうつし給ふ。奇特の兵法なれば、あとは白紙とぞなりにける。

けんさんー建盞、天目の一種
あふむー阿吽か

天女見給ひ、いかにや、御身きゝ給へ、此卷物の白紙になるうへは、定めてしるしあるべし、大事の出で來ぬそのさきに、はや〳〵歸り給へとぞ仰せける。義經きこしめし、大事出來御身の命のがれずば、われも共に御身の如くなるべし、さらずは葦原國へいらせ給へ、御とも申さんとありければ、天女是を聞き給ひ、葦原國へまゐる事、ゆめ〳〵成らざる事にてあり、名殘をしみの物語に、此兵法の威德を語りきかすべし、御身を返し申さんに、さだめて討手むかふべし、其時ゐんさんといふ法を行ひ、うしろへ投げさせ給ふべし、海のおもてに、しほ山出來あひへだたるべし、山を尋ねんそのひまに、逃げのびさせ給ふべし、第三の卷物に、らむふう、ひらんふうといふ法を行ひ給ふものならば、日本の地に程なくつかせ給ふべく、みづからが事を思しめし給はゞ、大日の一の卷に、ぬれての法と申すを行ひ給ひて、けんさんに水を入れ、あふむといふ文字を書きてみ給はば、その水に血うかび申すべし、其時父の手にかゝり、最後ぞと思しめし、御經よみて弔ひたまへ、大事いできぬそのさきに、とく〳〵歸り給へとて、天女はうちに入り給ふ。御曹子は忍びて内裏を出でさせ給ひ、かんふう川へ御舟を乘り出ださせたまへば、案にもたがはず、内裏には火の雨ふり、いかづち鳴り、くらやみにこそなりにけれ。大王大

てんくわんのぼろ―前には、てんくわのぼろとあり

きに驚き、築地に腰をかけ給ひ、つく〴〵物を案じ、かのくわんきよが、兵法を望みてこれまで渡りしを、許さずしてありつるが、天女がありどころを教へ取らせけるぞと思へば、忽ちしらかみの卷物、二三卷御まへに吹き降る。案にも違はざれば、おつかけよとありしかば、阿彷羅刹の鬼ども、千人ばかり出であひて、我さきにと急ぎつゝ、てんくわんのぼうにぶすの矢をはめて、浮沓といふ馬などにうち乗りてぞおつかけける。御曹子あとをきつと見、案にも違はず、天地をひゞかしおつかけける。既に御舟まぢかく見えしかば、天女の教へ給ひし、ゑんさんの法を行ひ、うしろへ投げさせ給へば、平々たり海の面に、潮の山七つまでこそいできたれ。この山を尋ぬるそのひまに、早かぜの法を行ひつゝ、さきへ投げ給へば、俄に大風ふき來り、四百三十餘日にわたりしを、七十五日と申すには、日本土佐の港につき給ふ。

さる程に鬼ども、御曹子を見失ひ、せんかたなくて立ちかへり、此由かくと申せば、大王大きに腹をたて、天女がくわんきよに心を合せたること疑なし、天女がしわざなれば、助けおきて詮なしとて、花のやうなる天女を、八つにさきてぞ棄てたりける。この天女の本地をくはしく尋ぬるに、日本相摸の國江の島の辨財天の化身なり。義經をあはれみ、源氏

いねう―圍繞（ゐねう）か

の御代になさんため、鬼の娘に生れさせ給ひ、兵法傳へんそのため、かやうの方便ありとかや。さるほどに義經、兵法の卷物取らせ給ひて、土佐の港へつき給ふ。奥州に下りたまひ秀衡にかくと仰せければ、秀衡はうけたまはり、さても御命のはてさせ給ふかと案じ申すところに、兵法傳へ歸らせ給ふ事、日本はやす〴〵切りとらせ給ひ、源氏百代の世とならんこと疑なしとて、喜ぶ事限りなし。是ほどの君はあらじとて、いねう渇仰申しけり。さる程に義經少しまどろみ給へば、天女枕がみに立ちそひての給ふやう、御身は何ともなく渡らせ給ふ物かな、みづからは大王の手にかゝり、空しくなり候へども、御身ゆゑの事なれば、命はつゆも惜しからず、二世のちぎりは朽ちせじと、涙をながし給ふかと見えさせ給ひければ、御曹子かつぱと起きさせ給ひ、いかにやと言はんとし給へども、夢にてあり。あはれと思しめし、涙をながし給ひ、あまりの不思議さに、天女いとまごひありし時の給ひける如く、けんさんに水を入れ、大日の法の一の卷にぬれての法を行ひて、あふむの二字をかきて見給へば、約束にたがはず血一滴うかびたり。さてはの疑なしとて、歎き給ふ事かぎりなし。さて御僧を供養し、御經をよみ、さま〴〵弔はせ給ひけり。昔より今にいたるまで、夫婦の中ほど切なる事はよもあらじ、かくて兵法

ゆゑ日本國を思ひのまゝにしたがへて、源氏の御代とならせ給ひけり。

唐糸草紙

唐糸草紙

きつくわい―奇怪

かなざし―金刺

壽永二年の秋の頃、鎌倉の兵衛佐頼朝は、八ヶ國のさぶらひたちを、皆鎌倉へ召しのぼせ、中門に出でさせ給ひて、さぶらひたちに向つて仰せけるは、いかに方々聞き給へ、そも〳〵平家、頼朝が威勢に恐れてこそ、都をばおちて候ふに、木曾の左馬の頭義仲、十郎藏人行家らが高名顔に關白にやならん、主上にや參らん、法皇にやならんと、天下をほしいまゝに振舞ふことこそ、きつくわいなれ、平家退治のさきに義仲を退治せん、佐竹の冠者もその由を申し、奥州の秀衡も九郎冠者義經をのぼせんと申すなり、この十月の頃なるべし、勢をのこさでつれたまへ、支度せよとぞ仰せける。さぶらひたちはうけ給はり、かしこまると申して、皆國々へぞくだられける。をりふし其頃、鎌倉殿に唐糸の前と申して、御所方の女房あり。これは信濃の國の木曾殿のさぶらひに、手塚の太郎かなざしの光盛が娘なり。あまりに琵琶の上手なり、琴もすぐれてあればとて、十八の年、鎌

奏者―取次

忠臣―忠義の意

倉へ召しのぼせ、管絃の座敷を預けらるゝが、唐糸は此由をうけ給はり、なさけなの事どもや、木曾殿の御滅亡は、親一門の滅亡なり、いかにもして此事を、木曾殿へきかせ奏らんとて、ひとま所へ忍び入り、文こまぐ〳〵と書き、下人の男にもたせて都へとてこそ上せらるゝ。下人鎌倉を出でて、十三日と申すには都につきて、父の手塚が奏者にて、かの文を木曾殿へ奉る。義仲ひらきて御覽じて、これはいかなる風のたよりと思しめし讀み給ふに、鎌倉中にては木曾殿御退治の御評談、奥兩國と關東勢が、一つになり、十月の中頃に都のぼりと申すなり、此たびのよろこびには、父の手塚に越後信濃をくだされよ、これにて唐糸がいかやうにも賴朝の御命を、一脇差あてがひ奉らん、木曾殿の御重代に、ちやくいと申す脇差をそへて給はれとこそ書いたりけり。義仲御覽じてなのめならずに思しめし、御返事をあそばしける。そも〳〵唐糸が忠臣をば山ほどに思しめす、此度のよろこびには越後信濃を取らするなり、唐糸それにて賴朝が命をとるならば、關東八ヶ國を父の手塚にとらせ、あめがしたの副將軍となさうずるなり、唐糸をば、義仲が御臺になすべし、もし又露の命を失はゞ、父の恩に報ぜよかし、此事人にしらすなと書きとゞめ、木曾に傳はる重代のちやくいと申す脇差をさしそへ下されける。下人は

睡眠―傍訓原本のまゝ

これを給はりて、鎌倉へこそ下りけれ。唐糸御文見まゐらせ、なのめならず喜びて、かの脇差を肌身をゆるさず差しもつて、賴朝の睡眠のたびごとに、狙ひけるこそ恐しけれ。さすがに賴朝は果報いみじき大將軍にてまし〳〵ければ、とかく遁れ給ふぞめでたけれ。をりふしその頃、大御所さま、御臺さまの、藥の風呂の候ふに、かの唐糸も御とも申してまゐられける。其日の風呂の奉行には、土屋の三郎もとすけなり。もとすけ、唐糸の前が小袖のしたより、かの脇差を見つけつゝ、此きぬの主はたれ人ぞと尋ねける。ともの女房うけ給はり、唐糸さまの御小袖なりと申す。もとすけ、大きに驚き、あの唐糸と申すは木曾殿の内に手塚の太郎が娘なり、いかさまこれは我君さまの御命をねらひ奉る女なり、君に此事をしらせ奉らんとて、御所をさしてぞまゐりける。賴朝は御覽じて、何とてもとすけは風呂の奉行は申さぬぞ。もとすけうけ給はり、土屋が風呂の奉行に、寶を見つけて候ふぞ、御覽ぜよと奉る。賴朝御覽じて、さても不思議の事どもかな、これは木曾に傳はる重代にちやくいと申す脇差なり、何とてもとすけは見つけたるぞとの給へば、御所方の女房唐糸の前が、小袖のしたより見つけ申して候ふ、そも唐糸と申すは、木曾殿の御内なる手塚の太郎かな

ざしの光盛が娘なり、いかさまこれは我君様の御命をねらひ奉るなり、御身近く寄せられ召使はるゝ御事、なか〳〵君の御不覺なりとぞ申しける。頼朝きこしめし大きに驚き、唐糸召せとぞ仰せける。うけたまはると申して、御前へ召しいだす。御まへにかしこまる。頼朝御覽じて、何とて汝は木曾が重代にちやくいと申す脇差をばさしたるらんと問はせ給へば、これは木曾に仕へ申す時、かたみに見よとて給はりて候ふと申しける。頼朝きこしめし、女の形見に重代は似合はぬなり、先きづかひに思しめすまゝ、世のしづまるまで、松が岡殿へあづけ奉れ、土屋とぞ仰せける。土屋うけたまはり、唐糸を引き具して、松が岡にあづけ奉る。其後土屋は唐糸の前が局にて、木曾殿よりの御文を見つけいだし、頼朝へ奉る。兵衛の佐殿御覽じて、天の與ふる寶なりとて、八幡の寶殿に深くこめおかる。もとすけはとにかくに、守護神なりとて、武藏の國池の庄、一萬貫の所を土屋にとてこそ下されける。其後唐糸召せとぞ仰せける。土屋うけ給はり、松が岡へまゐり、このよし申し上ぐる。松が岡にはきこしめし、そも〳〵頼朝は日本の主となるべきものが、禮儀法度をしらで、日本の主になりがたし、いかにもとすけ物をきけ、佛は惡人を助けんため、淨土をたてさせ給ふ、その如くにこの界にても、惡人を助けんが

さんりん―未詳

舌を喰はん―舌を噛みて自害せんと也

ちやうにち―上日又は直日の意にて當番の者をいふ

ために、出家は佛舍をたつるなり、たとひ主に向つて弓を引き、親に向つて太刀をぬき、牛馬の首をきりたりとも、さんりんしたる惡人に子細はあらじと思ふなり、さやうに咎を責むべくば、在家にあづけて置かずして、みづからに預け置き、咎をせむべきとて還せとは、もとすけが不届か、頼朝の不届か、申すに及ばず、殊にみづから出家と申し、女といひ、頼朝はもとめて恥をかゝするか、舌を喰はんと御腹たつ。力及ばず、もとすけは御所さまへまゐり、此由をぞ申しける。頼朝きこしめし、その儀ならば、松が岡殿の御腹のなほるまで預けおき奉れとて、かさねて子細はましまさず。其後松が岡殿には、とにかくに唐糸は大事のものにて候へば、鎌倉中に置きてはあしかりなん、いそいで信濃へ下れとて、ちやうにちの者を添へらるゝを、忍びて信濃の國へぞ送られける。武藏の國六所と申すところにて、梶原平三景時は、上野の國沼田の庄にて、百日の日をふんで、いま鎌倉へ上るとて、唐糸と行きあふこそ本意なけれ。景時見るよりも、それなるは唐糸か、我君の御命をねらひ奉るくせものなり、それ〳〵たぞと下知すれば、ちやうにちのものも、西東へばつと散る。そのとき景時は唐糸をおしこめて、鎌倉へ上りけるこそ本意なけれ。梶原はわが家にも歸らず、唐糸をすぐに御所へひかせて參り、上野土産奉ら

ふのわるさ―ふは分にて天運の意「ぶがわるい」といふに同じ

んとてまゐらせける。頼朝は御覽じて、これは何たる土産にもましたるとて、大きに悅び給ひて、いかさまこれは唐糸がひとりの謀叛にてはよもあらじ、鎌倉中にては、大名か小名の人數あるべきぞ、松が崎にて七十五度の問狀して問へとて、ものゝふどもにぞ仰せける。松が岡殿には此由を聞しめし、梶原と死なんとて、鎌倉へ御輿かたつ。頼朝このよし聞しめし、まづ〳〵こなたへ引けやとて、御うらの石の牢へぞ入れられける。唐糸がふのわるさ、君の御果報申すに及ばず。其後唐糸は信濃の國に六十にあまる老母と、十二になる姫をもたれけるが、唐糸十八歳の年、鎌倉へ上りしが、ことしは十二になると覺えたり。名をば萬壽の姫と申しけり。唐糸の牢舍のよし、信濃の國へ風の便に聞えければ、そもこれは何事ぞとて、天に仰ぎ地に俯して、流涕こがれて泣きにける。萬壽涙をおさへて申しけるは、我身鳥ならば飛びも越し、母の行くへを聞かまほしうこそ候へ。尼公きこしめし、みづからが歎きも汝には劣るまじ、今より後に逢ふ事もありもやせんと歎かれける。萬壽も一間所へ歸り、衣ひきかつぎて、流涕こがれ泣きけるが、さ夜ふけ方に、乳母の更科をめされ、いかにや、更科うけたまはれ、わが母の唐糸は、鎌倉に石の牢にましますとうけ給はり候ふぞ、わが身いかやうにも鎌倉へ尋ねこし、御ゆくへを

おとことも思はず―まことともも思はずの誤か

をさあい―をさなき人といふ意

みのぎぬ―美濃絹しけもん―惡しき絹絲をしけといふ、それにて織りたる絹をいふにや

尋ねきかまほしく候へ、更科をひとへに頼む、つれて鎌倉へ上りてくれよと申されける。更科うけ給はり、をとことも思はず、親をば何とか尋ね給ふべき、萬壽さまとぞ申しける。萬壽きこしめし、これはいはれぬ申しごと、みづから鎌倉へ上り、唐糸を親なると尋ねて參らばこそ人も不審をたて候ふべき、鎌倉殿か、それなくば秩父殿か、和田殿へ、五年も三年も、奉公を申し、鎌倉にあるならば、いかでか母の御ゆくへを聞きいださざるべきぞ、更科いかにとの給ひける。更科うけ給はり、をさあいの心にさへ親の御恩を思しめす、たとひ賤しき者なりとも、お主の御恩をわすれ申さんや、野の末山の奥までも、みづから御とも申すべしとぞ申しける。まんじゆ聞しめし、なのめならずに思しめし、さらば今宵に思ひたち、旅の裝束せんとて、萬壽その夜の裝束には、肌には練のあはせを召し、親を尋ぬる門出なれば、めでたき事を菊染の御小袖、しげむらさきの織物に、十二一重をひきかさね、柳色の袴をきて、市女笠をめされける。めのとが其夜の裝束には、そめつけにみのぎぬの染小袖、七つひとへをひき重ね、麻の袴をきるまゝに、しけもんのつゝみには、よろづの物を忍ばせて、乳母がこれをいたゞいて、故里を出でられける。萬壽の姫も更科も、あとさき知らぬ旅なれば、山路のするに行きまよひ、呆れはててぞ

立たれける。萬壽仰せけるやうは、いかに更科うけたまはれ、鎌倉は東の方と承る、月日は東の空より出でて、夕日は西に入り給ふ、月日を心にあててゆけ、更科とのたまひて、月をしるべに行くほどに、既に其夜も明けければ、手塚の里にては、萬壽の姫、失せさせ給ふとて、貴賤群集をなしければ、尼公此由きこしめし、いか様これは、鎌倉の方へ出でたるらん、いそいでそれをとどめよとて、かちや徒跣にて出でられける。信濃の國雨の宮といふ所にて、やがておつつき給ひける。

尼公萬壽に抱きつき、いかに聞くかや、萬壽の姫、唐糸は、はや死にたるものと思ひしに、汝までみづからを捨て、鰐の口へ尋ね行き、鎌倉殿へきこしめさば、にくき唐糸が子なりとて、必ず死罪に行はれ奉らん、思ひとまれと泣き給へば、萬壽承り、みづから鎌倉へまゐりて、唐糸を親と申して、尋ねてまゐらばこそ、人も不審に思はんずれ、鎌倉殿か、和田殿か、秩父殿へ、二年も三年も御奉公を申すならば、いかでか母の御ゆくへ、尋ねいださで候ふべきと思ひ立ちてさふらふぞや。尼公聞しめし、其儀ならば鎌倉の近くに、藤澤の道場と申して、遊行和尚の建て給ふ御寺あり、知る人のあれば、みづからは藤澤の道場に隠れゐて、御身たちは鎌倉へこすべきなりとぞ仰せける。萬壽き

こしめし、人目を忍ぶ旅なれば、多勢つれては叶ふまじ、其儀ならば、いかなる淵瀬へも身を投げて、浮世のひまをあけんと泣き給へば、尼公きこしめし、人の子の親を思ふこと、稀なる道と聞きつるに、さても汝は親孝行のものかな、其儀ならば力なし、尋ねてもみよ、更科をひとへに頼むなり、よきに供してくれよかし、更科とぞ仰せける。めのとは承り、御供申していづるより、野の末山の奥、火の中水の底までも、共に入り、共に沈み申すべし、御心安くおぼしめせ、尼公さまとぞ申しける。尼公はきこしめし、其儀ならば鎌倉へ下るまで、男ひとりつけんとて、五郎丸をぞつけ給ふ。さらばと言ひて立ち別れ、そなたこなたへ行く袖の、

はらふ涙のひまぞなき。萬壽の姫は、雨の宮を立ち出でて通る所はどこ〳〵ぞ。親子の契は、ふかしの里こそめでたけれ。淺間の嶽に立つけぶり、身には餘れる思ひにや、いま入山をうち過ぎて、上野の國に隱れなき、常盤の宿をもうちこえて、一の御宮をふし拜み、二のたまはらに出でしかば、親の名のみか、ちゃぶ山、末まつ山をうち過ぎて、霞の關をもわけこして、入間の郡、やせの里、いくらの里をか越しつらん。曇らぬかげは星の谷の、とがみ河原をもうち過ぎて、鎌倉山につき給ふ。鶴が岡に參り、南無や八幡大菩薩、よろづの御神にこえさせ給ひ、親孝行の御神とうけたまはりて候へば、わが母の唐糸の露の命のうちにめぐり逢はせてたび給へと、肝膽をくだいて祈られける。

入山―上野にあり

星の谷―相模にあり

とがみ―砥上、相模にあり

其夜はこもりゐて、明けぬれば、文こま〴〵と書かれける。みづから何事なう鎌倉まで參りて候ふ、とにかくに、うばさまの、御命をよく〳〵惜ませたまふべし、命をまたう持つ龜は蓬萊にあふとかや、ある歌に、

命をまたう云々―謎

命あらばいくよの秋の月や見ん消えてはいかに露の玉の緒

と聞く時は、たゞ命がせんにて候ふぞや、御命まし〳〵てこそ、唐糸にもみづからにも又はあはせ給ふべけれと書きとめて、鎌倉山より手塚の里のうばさまへ、萬壽姫とかきて、五郎丸をば鶴が岡へつき、これまでなり、さらばとて、それより手塚の里へ返さる。そののち萬壽姫は、御所さまへまゐり、御奉行をのぞまれける。御臺さまには聞召し、國はいづくの者なるぞ、親をばたれと申すやらん。萬壽うけ給はり、武藏の國六所別當の者にて候ふ、親を名のり申すまじ、御奉公申すならば、尋ぬるものが親にて候はんとぞ申されける。御臺此由きこしめし、親を名のり申さねば、御氣づかひに思しめす。まづまづ侍從の局にて奉公申せとのたまひ、御局がたへ預け給ふ。萬壽は侍從の局にてよきに奉公つかまつり、人の返事をわがにして、人の立たん所へも、わがものと立ちゆけば、御局がたにも、萬壽はきようの者なりとて、御なさけをぞかけ給ふ。廿日の過ぐるその間、萬壽は人の物いふたびごとに、わが母の唐糸と、名にても人の申すかと、聞けども聞けども言はざりけり。ある夜の寢覺に萬壽、乳母に語られけるは、いかにや、更科うけたまはれ、今まで廿日あまり過ぐるうちに、唐糸と名にても人の申すかと、聞けどもも〳〵申さぬは、浮世にもなきか、生きて浮世にあるならば、人をばよかれあしかれ沙汰する習ひなり、名をだに申す人もなし、必ずこれは死したる人なり、卅二日たづねき

尋ぬるものが―たのめるものがの衍か

人の返事をわがにして―他人の返事したる用も自分にて辨じてきよう―器用か

萬事はとまれ—是非とも留りくれ上
みづし—下女

て、逢はではつべき悲しさよと、ふし沈みてぞ泣かれける。めのとは大きに腹をたて、信濃を御いでの時は、二年も三年も、鎌倉中にましまさんと仰せありしが、いまだ廿日も過ぎざるに、さやうに御涙をながさせ給はゞ、涙の色にて人に知られ、必ず死罪にあひたまはん、其儀ならばみづからは是にて憂目をみんよりも、あすは信濃へ歸り申さん、御身ばかりになり給へ、萬壽さまとぞ腹をたつ。萬壽大きに驚き、めのと更科にいだきつき、其儀ならば今より後は歎くまじ、萬事はとまれと泣き給ふ。めのとも主も泣きあかす。夜も既に明けければ、萬壽姫は御主さまの御うらへ出でて、あたりを眺めて御覽ずる所に、いづくともなく御みづし一人まゐり、いかにやのう萬壽、此釘門のうらへ入らせ給ふな、御法度なるとぞ申しける。萬壽きこしめし、御法度はいかにと問はせ給へば、みづしうけ給はり、御所樣がたの御女房、唐糸の前と申すは、石の牢につきこめられしに、これよりあなたへは、男女によらず、御法度なりとぞ申しける。萬壽きこしめし、唐糸といはれて、雪ならば消え入るばかりに嬉しくて、みづしはよく教へ給ふ、われは夢にも知らぬなりと、喜ぶ體にて御所へまゐり、めのとを近づけて、唐糸さまの御ゆくへを、只今きいて候ふぞ、よろこび給へと言ひながら、又かきくどき泣きたまふ。

人の咎めぬ—人を咎めぬの誤か
あま—天
岩が根さわぎあたる—岩が根にさわぎあたる意
ゐなか—玄中、十時頃

めのとも喜びの涙をぞ流しけり。

頃は三月廿日に鎌倉山の花見とて、をりふし御所には人もなし。萬壽は、こよひ母の御ゆくへを尋ねて見んとて、御所のうちをば忍び出でて、釘門をみてあれば、正八幡の御方便かや、をりふし番衆もなかりけり。門も細目にあいたるなり。萬壽は嬉しけれども、よその見る目もあるらん、人の咎めぬ里犬あるやとばかり疑はれ、めのとをば御門の脇にたゞせて、わが身は内へたづね入り、かなたこなたを尋ねけり。あま吹きおろす松風の、岩が根さわぎあたるをば、人やあるかと疑はれ、心を靜めてあたりを見る。廿日ゐなかの雲はれて、月すこし見え給ふ。松の一むらある中に、尋ね入りて見てあれば、石の牢こそ見えにけれ。萬壽うれしさに急ぎたちより、牢の扉に手をかけて、内の體を聞きけるに、唐糸は人音を聞きつけて、そもゝ門におとづるゝは誰なるらん、變化のものか、又は唐糸が討手にばし向く人か、御使にてましまさば、浮世のひまをあけたしと、かきくどきてぞ泣きにけり。

萬壽は承り、いとゞ哀れはまさりけり。牢のすきより手を入れて、母の手をとり、これは母の手にてましますか、わが身は萬壽にてさふらふぞや、なつかしさよと泣きにける

涙は淵となる。唐糸聞きて、萬壽は信濃にこそおきつるが、今年は十二になると覺えたり、夢かうつゝか幻か、夢ならばとく醒めよ、さめての後はうらめしやと、かき口説きてぞ泣かれける。萬壽、おほせの如く信濃の國にさふらふか、御牢舍のよし風のたよりに承り、御命に代らんと、これまで參りて候ふぞ。唐糸きこしめし、其時萬壽が手をとり、嬉し泣きにぞ泣き給ふ。御涙をおさへ、うばさまの御命はいまだめでたうましますか、なつかしさよと仰せける。萬壽うけ給はり、何事もましまさず、御心やすかれと申しければ、唐糸聞きて、汝ばかり參りたるか。萬壽うけ給はり、更科をつれてまゐりける。唐糸きこしめし、いづくに忍ばせ置きけるぞや。萬壽申しけるやうは、よその見る目のいぶせさに、御門の脇にたゝせておき申し候ふとて、やがてつれてぞ參られける。唐糸御覽じて、更科めづらしや、唐糸がありさまを、不便と思ふべし。萬壽は親子の契なれば、尋ねてのぼるもことわりなり、汝はめのとと云ひながら、他人にて候ふものが、これまで上るは不思議なり、昔より世にある主をば尋ぬれども、世におちぶれたる主の跡たづぬるものは、上代にも聞き及ばず、末代にもあらじと、互に流す涙の色、ふる雨のごとくなり。其後唐糸、涙をおさへて仰せけるは、御身も人も、生きて浮世の對面

思ひきり―決心し
はつたと―斷じて

しろがへて―賣りしろなして食物などを求めて
しゝの間―獅子の間なるべし

して、浮世の妄執はれてあり、更科をひとへに頼み申すぞ、つれて信濃へ歸り申せと仰せける。萬壽うけ給はり、信濃の國を出でしより此かた、御命に代らんと思ひきり、まゐりて候ふ、はつたと信濃へ歸るまじと泣きければ、唐糸きこしめし、その義ならば、たびゝまゐるなよ、人に知られて候はゞ、君よりも唐糸が子なりとて、我よりさきに死罪流罪に行はれ奉らん、よくゝ忍べと泣かれける。萬壽承り、國をも名のり候はねば、存ずる人も候ふまじと、涙を流し語る。夜すでに明けければいとま申して、さらばとて御所のうちへ歸りつゝ、小袖を町へいだし、しろがへて、めのとが忍ぶ時もあり、みづからが忍ぶ時もあり、九月がその間、母を養ふあはれさよ。次の年の正月二日に、鎌倉殿の常に御祈念をなさるゝ、しゝの間の御座敷に小松六本、疊のへりに根をさし、生えいでたるこそ不思議なれ。頼朝大きに騒がせ給ひ、かやうなる草木は、土にこそ根のさすに、疊のへりに根をさし、生ひいでたるこそ不審なれ、鎌倉中のわづらひか、又は頼朝が身のうへか、博士を召せとの給ひて、其頃鎌倉中に隱れなき安倍の中もちと申す博士をめされて問はせ給ひける。いかにや、中もちうけ給はれ、常に祈念するしゝの間の座敷に、今夜の内に、小松が六本生ひいでたり、鎌倉中のわづらひか、頼朝が身の上

か、天下の亂れか、占へとぞ仰せける。博士承り、そも〳〵荻萩の、花の命をのぶること、あまたとは申せども、西王母が園の桃、三千年に一度花さき、實のなると申せども、見る人も候はず、ちんやさいかい八千世の年をふることも、ちくさの八千年をふることも聞くに、一千年の壽命も、相生の松にしくことはなし、そも〳〵君が千代をかさねて六千歳、鎌倉山に年をよせ、榮えさせ給ふべき、かほどめでたき御事に、相生の松が枝を鶴が岡の玉垣の御内に蓬萊をうつしかへ、十二人の手弱女をうつして、今様を歌はせたまはゞ、神德を深く君もめでたうましまさんと、占ひたるこそめでたけれ。

ちんやさいかい―未詳

賴朝なのめに思召し、六本の小松を鶴が岡の玉垣の内へうつし、十二人の手弱女を揃へらるゝ。まづ一番には手越の長者が娘千壽のまへ、二番には遠江の國ゆやが娘の侍從、三番には黄瀨川の龜鶴、四番は相摸の國山下の長者が娘虎御前、五番は武藏の國入間川のほたんといひし白拍子、これをはじめて十一人なり。鎌倉中廣しと申せども、ひと一人に事を缺き、色々尋ねらるゝ。其後萬壽の姫のめのとは、萬壽を近づけて、御身はみめよく、今様は上手にてましませば、此度出でて今様を歌はせ給へ、萬壽さまとぞ申しける。萬壽きこしめし、このたびの今様は世の常の今様にかはりて、めでたき事をばみ

づから何と計らふべき、思ひもよらずと仰せける。更科大きに腹をたて、かやうなる時、今様をうたはせ給ひてこそ、御よろこびもましまさんとて、御局さまへ參り、萬壽こそ、今様の上手にて候へと申し上ぐる。御局よりも、御臺さま、賴朝さまへ御披露あり。賴朝大きによろこび給ひ、萬壽一日みんとて御前にめされ、御覽じて大きによろこび、御臺さまより十二ひとへの御裝束をぞ下されける。もとより姿すぐれたり、肩をならぶる女はなし。頃は正月十五日、御前に山をたて、大宮のゆんでには賴朝の御座敷、八ヶ國の大名小名の御座敷、かず八百八とぞ聞えける。さて又めてには、大御所さまと御臺さまの御座敷をはじめとして、八ヶ國の大名衆のうへがた上﨟衆の御座敷かずを知らず。鎌倉中の貴賤上下がまゐりて見物申しけるほどに、鶴が岡に駒を立つべきかたもなし。十二人のやをとめ、七十五人の宮人、神樂を奏して奉り、手越の長者が娘、千壽の前ときこえける、貴賤群集の言の葉に、海道くだりをつゞけたり。逢坂山のよるの月、くもらぬ影をやながむらん、勢多の唐橋野路の里、霞にくもる鏡山、不破の關屋の板庇、假寢の夢はやがて醒が井の宿、むしのいせいやをはりの國、みかはなる三河にかけし八橋の、くもでに物や思ふらん、知るも知らぬも遠江の、濱名の橋のいるしほに、さゝねど上る

むしのいせい―虫の威勢か

ひきま―遠江の引馬
せと―駿河の瀬戸山
しはりはぎ―しをり萩
すどりわり―硯破くじ―闘
はぶき―羽を振る
やつ―谷
谷―「たに」と傍訓せるは「やつ」の誤なるべし
かち聲―嗄聲
ふくでん―福田か

あま小舟、こがれて物や思ふらん、ま弓つき弓ひきまの宿、さよの中山せとを過ぎ、うつの山邊の蔦のみち、手越をすぎて行くほどに、月を清見が關の戸を、おし明けがたの空みれば、富士の煙や靡くらん、夢にもみやこ人こそめでたや、御代にはいづの國、浦島が玉手筥、あけて悔しき箱根山、鎌倉山をきてみれば、鶴が岡とや申すらん、鶴は千年名鳥、松は千とせの名木、めでたしと歌うたり。二番は黄瀬川の龜鶴、しほりはぎを歌うたり。伊勢の濱荻なにはの蘆、鎌倉や武藏野の、草の名多しと申せども、しほりはぎにしくものは候はじと、歌うたり。三番はゆやが娘の侍從、太平樂をふむ。四番は入間河のほたん、すどりわりを歌うたり。五番のくじは萬壽なり。御臺さまより御裝束給はる。としは十三の春なれば、十二ひとへを著しつゝ、花のまそでを返し、樂屋のうちより出でけるを、物によく〳〵譬ふれば、花木に鶯のはぶき出でたる風情も、是にはいかで勝るべき、はたとあげて歌うたり。鎌倉はやつ七鄕とうけ給はる、春はまづさく梅がやつ、扇の谷に住む人の心はいとゞ涼しかるらん、秋は露おくさゝめがたに、いづみふるかや雪のした、萬年かはらぬ龜が谷、鶴のからごゑ打ちかはし、由比の濱にたつ波は、いくしま、江の島つゞいたり、えのしまのふくでんは、福壽海無量の寶珠をい

うつゝち―未詳
みなしろ―皆白にて全部白きをいふ
たんこふしき―未詳
はんで―誤脱あるべし意味通じ難し

だき參られたり、君が代はさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで、高砂や相生の松萬歳樂に、御命をのぶ、東方朔の九千歳、うつゝちの八萬歳、長命居士の一千歳、西王母の園の桃三千年に一度花さき、實のなると申せども、相生の松にしくことさふらふまじ、そも〳〵君は、千代をかさねて六千歳さかえさせ給ふべき、かほどめでたき御ことに相生の松がえ、福壽無量のよろこびを、君に捧け申さんと、小松の枝をゆりかづき、みなしろの大まくへ、二三度四五度まひかゝりたりければ、頼朝御覽じて、ほうらいにたちゐほし、白鞘卷をさしながら、みなしろの大幕を、投げあげて、かゝるめでたき御ことに、相生の松が枝を給ふらんとて出で給ふ。もとより頼朝は今樣は上手なり、たつ波ゐる波よする波、引きしほの拍子足を、たんこふしきと踏んで、扇流しを歌ひすまし、萬壽が花のたもとへ、頼朝の狩衣の御袖、まひかさね〳〵、二三度四五度舞はせたまへば、風も吹かぬに大宮のたまの戸もきり〳〵ばつと開き、八幡も御納受ありときこえける。さるほどに八百八つのみす簾の几帳もざゝめいて、貴賤群集を返しける。そののち頼朝は座敷のうちへ入り給ふ。萬壽姫は樂屋のうちへと引いて入る。頼朝仰せけるやうは、たれやの人か計らふべしめでたくもはんでをさめよとて、今樣はましまさず、春の日の

くるゝまで酒盛とこそ聞えけれ。其日もかたぶけば皆々鎌倉へぞ歸らせたまふ。さて次の日、賴朝は萬壽を御前に召し出だして、さて汝は今樣の上手かな、めでたうこそは歌うたれ、國はいづくの者なるぞや、親をばたれと申すらん、親をなのれ、御引出物給はるべきとぞ仰せける。萬壽うけたまはり、名のり申すまじと思へども、此たび名のり申さずは叶はじとや思ひけん、思ひきりてぞ名のりける。みづからが親は御所樣の御うらの石の牢につきこめ給ふ唐糸にて候ふなり、されば四つ子にて棄てられさふらふが、去年の春の頃、母が牢舍のよしを、信濃の國にて承り、今はあるにもあられずして、母の命に代らんとおもひ、これまでまゐりて候ふぞや、このたびの今樣の御引出物には、母が命にみづからを取代へてたび給へとぞ申しける。賴朝きこしめし、大きに御おどろかせ給ひ、しばらく物をものたまはず。稍あつて仰せけるは、唐糸は汝が母にてありけるぞや、唐糸を助くる事は、烏の頭が白くなりて、駒に角のはゆるとも助くまじとは思へども、此たびのよろこびには、いづれの物か惜からん、唐糸が露の命、今まで存命にてあるならば、急ぎ召しいだし、萬壽に取らせよとぞ仰せける。土屋うけたまはると申して、石の牢を引きやぶらせ、二とせに餘る牢舍せし唐糸をめしいだし、御所さまの庭に

ふしのゆひわた―富士の結綿か
御ひき―御引出物
美濃のじやうほん―美濃絹の上品
ばんじの床―萬事休する程の重病の床に泣き伏すとの意なるべし

召し具して、萬壽にこそ渡されける。萬壽なのめによろこびて、母にひしと抱きつき、嬉し泣きに泣きければ、母もろともに涙をながす。賴朝をはじめ奉り、大御所御臺いづれもましますさぶらひ達、人の寶には子にましたる寶なし、さても萬壽は女とも思はず、十二三のものが、これまでまゐり、鰐の淵なる親を助けたる、不思議なりと、みな感涙を流しけり。其後賴朝は萬壽に引出物をえさせんとて、信濃の國手塚の里一萬貫の所をば、萬壽にとてぞ下されける。御臺さまより黃金千兩ふしのゆひ綿一千把、萬壽が宿へぞ送られける。大御所さまの御ひきには砂金五百兩、美濃のじやうほん一千匹下されける。これをはじめて鎌倉中の諸大名、われも〳〵と引出物萬壽姫にたまはりける。賴朝仰せけるやうは、萬壽をば鎌倉にとゞめたくは思へども、母が心の恐しきものなれば、いそぎ信濃へかへれとて、御いとまをぞ給はりける。萬壽なのめに喜びて、唐糸をひきつれて信濃へとてこそ歸りけれ。のぼりには三十二日に上りしが、かへりには五日にこそは下られける。手塚の里におちついて、うばの尼公を見申すに、ばんじの床に泣きふして、今をかぎりと泣き給ふ所へ、萬壽まゐりて候ふ、いかにや申さん尼公さま、われは萬壽にて候ふぞ、これは唐糸にておはしますと申しければ、尼公は親子のものを

御覽じて、うれし泣きにぞ泣き給ふ。一族一家のものまでも、よろこびの涙を流す。されば萬壽、親孝行なるゆゑにより、鶴が岡の八幡大菩薩の御方便にて、今樣をうたひ、所領を給はり、二とせあまり牢舍せし母をたすけ、かずの寶を給はりて、子孫ともに繁昌するなり。萬壽姫の親孝行ゆゑなりとうけ給はり候ふ。かゝるめでたき物語かなと、感ぜぬ人はなかりけり。

木幡ざつれ

木幡ぎつね

御めのと思ひ思ひに云々ー思ひ思ひに乳母のつてを求めて

中頃の事にやありけん、山城の國木幡の里に年を經て久しき狐あり。稲荷の明神の御使者たるによつて、何事も心にまかせずといふ事なし。殊には男子、女子、そのかず數多もち給ふ。どれ〳〵も智慧、才覺、藝能いふばかりなく、世にならびなく聞えありて、とりぐ〳〵にさいはひ給ふ中にも、弟姫にあたらせ給ふはきしゆごぜんとぞ申しける。いづれよりも殊にすぐれて、容顔美麗にうつくしく、心ざま竝びなく侍りて、春は花のもとにて日をくらし、秋は隈なき月かげに心をすまし、詩歌、管絃に暗からず。聞きつたへし人々は、心をかけずといふことなし。御めのと思ひ〳〵に緣をとり、我も〳〵とかずの文をつかはし、心をつくすと申せども、行く水にかずかく如し、うち靡くけしきもましまさず。姫君うき世に長らへば、いかならん殿上人か、關白殿下などの北の方ともいはれなん、なみ〳〵ならん住居は思ひもよらず、それさなき物ならば、電光朝露夢幻

の世の中に、心をとめて何かせん、いかなる深山の奥にも引き籠り、浮世を厭ひ、偏に後世を願ひ侍らばやと思ひ、あかしくらし給ふほどに、十六歳にぞなり給ふ。父母御覽じて多き子どもの中にも、此きしゆごぜんは世にすぐれ見えたまふ、いかなる御かたさまをも婿にとり、心安きさまをも見ばやと思ひて、さまざまに教訓したまふ。

さてまた爰に三條大納言殿とておはします。其御子に三位の中將殿とて、容顔美麗にして、まことに昔の光源氏、在原の中將殿と聞えしも、是には勝るべからず、高きも賤しきも心を惑はしける程に、父大納言殿に仰せあはせて、さるかたさまより御使ありしかども、中將殿御心にそむ色もましまさず、いかならん賤の女の子なりとも、そのかたち勝れたらん人ならばと思しめし、常は詩歌管絃にのみ心をすまし給ふ。頃は三月下旬の事なるに、花園にたち出で給ひ、散りなん花を御覽じて、業平のけふの今宵にと詠みけるも、かゝる折にやと眺め給ふをりふし、かのきしゆごぜん稲荷の山より見おろして、うつくしの中將殿や、われ人間と生れなば、かゝる人にこそ逢ひ馴るべきに、いかなるかいぎやうによりて、かやうの身とは生れけるぞや、淺ましさよと思ひけるが、よし〳〵ひとまづ人間のかたちと化け、一旦の契をも結びさふらではと思しめし、めのとの少納言を近づけ

けふのこよひに―伊勢物語「花にあかぬ歎きはいつもせしかどもけふの今宵に似る時はなし」
かいぎやう―戒行

ていかに聞き給へ、われ思ふ子細あり、いざや都に上りさふらふべし、さりながら此姿にて上りなば、人目もいかゞさふらはん、十二ひとへ袴きせてたべ。めのと此由をきゝ、今程都には鷹犬などと申して、家々ごとに多ければ、道の程も御大事にてさふらふぞや、そのうへ御父みやうぶどの、御二所さまきこしめし、とくわらはが仕業とのたまはん事疑なし、思しめしとまり候へと申しける。姫君きこしめし、いかにとゞめ給ふとも、われ思ふ子細ありて、思ひ立ちぬる事なれば、いかにとゞめ給ふとも止るべきにてあらずとて、美しく化けなしてこそ出でにけり。さる程に中將殿は此姫君を御覽じて、夢かうつゝか、覺束なしと御覽じけるに、そのかたち言ふばかりなく、まことに玄宗皇帝の楊貴妃、漢の武帝の世なりせば李夫人かと思ふべし、さて我朝には小野の良實が娘小野の小町などといふとも、是程にありつらん、いかさまいづくの人にてもあれ、よき便ぞとおぼしめし、めのとと覺しき女房に、これはいづくよりいづかたへ通らせ給ふ人やらんと、御尋ねさせたまふ。めのと嬉しくて申しけるやうは、これはさる人の姫君にてましますが、繼母にいひ隔てられさせ給ひ、父の不興を蒙りたまひ、これを菩提の種として、いかならん山寺にも引きこもり給はんとの御事にて候ふが、是をはじめの旅なれば、道ふみ迷

とくわらはが云云―早くも妾が所爲なりと

ひて、是までまゐりて候ふが、憚おほく候へども、一夜の御宿を仰せ付けられ候ひてたび給へと、さもあり〳〵と申しければ、中將嬉しくおぼしめし、此年月色ごのみし侍りしかば、かやうの人に逢はんとの事にてこそありつらん、よし〳〵誰にてもあれ、これも前世の宿縁とおぼしめし、こなたへ入らせたまへとて、わが御館へ伴ひ、御めのとに春日の局に仰せつけ、さま〴〵に御もてなしかしづき給ふ事いふばかりは無かりけり。其後おの〳〵休みたまへば、いとゞ中將殿のあこがれさせ給へば、姫君の御枕に寄りそひて、かやうのまより、二世ならぬさき〴〵の奇縁とこそ思ひ侍れ、何と御心深くのたまふとも、この内をばいだし申すまじとて、さま〴〵御言葉をつくし給ふ。もとより姫はたくみたる事なれば、嬉しさかぎりなし。さりながらいと恥しげなる風情して、うち靡くけしきもなくて居給ひけり。夜もやう〳〵更けければ、鴛鴦のふすまのしたにたはぶれけり。たがひに御心ざし淺からず、生きては偕老の契とおぼしめし、よるの明けやすき夜半にて、程なく烏も音づれ、寺々の鐘もはや明けぬと響きけり。中將殿は餘りなごり惜しさのあまりに、一首かくなん、

むつごともまだ盡きせぬにいかばかり明けぬとつぐる烏の音ぞうき

さもあり〳〵と—さもありげに

御めのとに—に文字不用なるべし

かやうのまより—かやうのたよりの衍か

姫君かへし、

思ひきやこよひはじめの旅寢して烏のなく音を歎くべしとは

かやうにさま〴〵ながめさせ給ひ、よるも終夜ひるはひめもすにたはぶれて、明かし暮らし給ふ程に、月日に關守あらざれば、水無月の頃かの姫君惱み給ふ。中將殿御覽じて、心苦しき有樣かな、いかならん事ぞやとて、さま〴〵御祈ども言ふばかりなし。此事をのみ歎かせ給へば、たゞならず見えたまふ。中將殿もめのとも御よろこびにて、その年も過ぎあらたま如月もたち、やよひと申すには、さもうつくしき若君をまうけ給ふ。中將殿御覽じて、たぐひなき御事に思ひ給ふ。御めのと數々、その外おの〳〵參り、いつきかしづき給ふこと限りなし。かくて日にそへて、光さしたまふ心ちして、うつくしく生ひたち給ふ。大納言殿の北の御方もよそ〳〵ながら聞召し、中將殿は何とてかやうの御事、つゝませ給ふぞや、其身はいかやうの人にてもあれ、中將殿の御覽ぜん人、そのうへ美しき若君も出來させ給へば、我々いかでおろかならぬ、姫君にも對面して、諸共にかしづきまゐらせんと思召し、中將殿へこま〴〵と仰せられければ、なのめならずに喜び給ひ、是よりかくと申し入れたく候へども、はゞかりに存じ候へばとて、姫君にかく

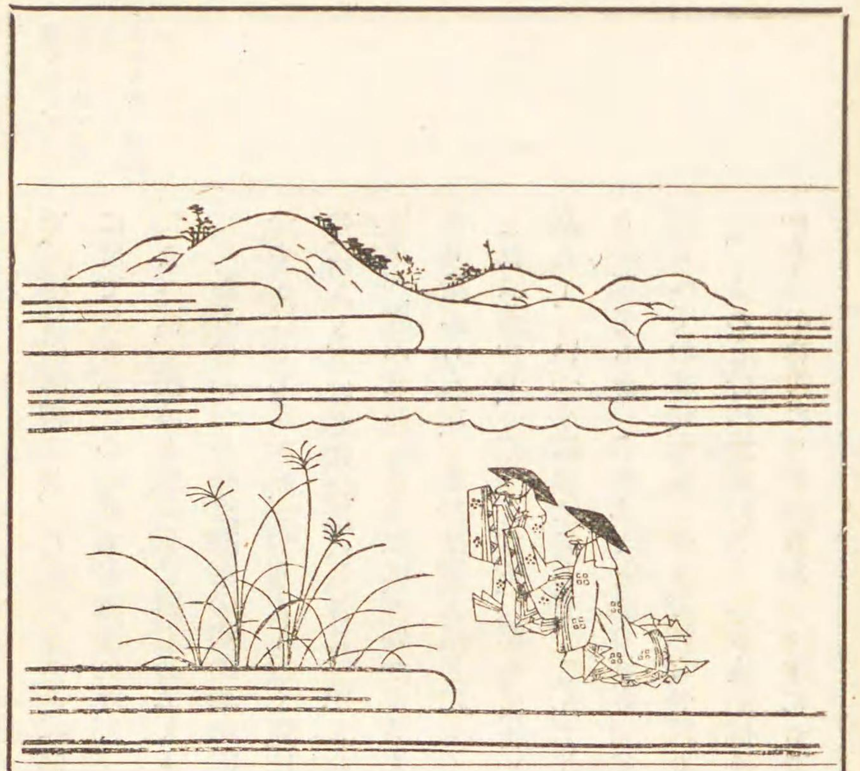
おろかならぬ—おろかならんの訛

いかならぬ―いかならんの訛

かくてさふちはずは―かくてさふちはゞの誤か、或はかくてさぶちはすはの意か

との給へば、憚りながらかやうにの給ふうへはとて、とり〴〵の御裝束などこしらへて、吉日御とり御見參ありけり。

大納言殿北の方御覽じて、かゝる美しき女房も、世にはありけるよ、いかならぬ宮腹の姫君といふとも、かゝる姿はあるまじ、中將殿の思ひ給ふもことわりとぞ思しける。かくて思ふ事なくて、月日をおくり給ふ程に、若君三歳にならせ給ふほどに、御内の人々も、此若君の御機嫌よきやうにとたしなみ、いろ〳〵御もてなし、御あそび物など奉る。あるとき中將殿の御めのと中務のもとよりとて、世にたぐひなき逸物とてうつくしき犬を進上いたしけり。少納言此由をきゝて、身の毛もよだつばかりにて、急ぎ姫君の御前にまゐりて申しけるは、不思議の御大事出來さふらふぞや、この犬かくてさふらはずは、大事これに過ぎ候はずとて、涙にむせぶばかりなり。姫君きこしめし、まことに是こそ限りなれ、この内いづるより外の事あらじ、中將殿、若君の御なごりいかゞすべきとて涙せきあへず。やゝありて仰せけるは、たとひ千年萬年をふるとも、なごりは盡くる事あらじ、ひまを窺ひ立ちいで、是を菩提の種として、世を厭ひなんことは、いと易き事なれども、中將殿さこそは歎かせ給はんずらん、若君のなごり、かへす〴〵も悲しけれども、



是非叶はぬ事なればとて、涙にむせび給ひけり。

さるほどに中將殿みかどより御召ありて、七日の管絃とありしかば、姫君にのたまふやう、われ笛の役とて、内裏へまゐり候ふ、留守の程よくよく、若君なぐさめ給ふべしとて出でさせ給ふ。姫君御覽じて、これぞ限りなる、よそ〳〵ながらは見まゐらせ候ふとも、詞をかはし申さんことは、今ばかりなり。扨そののち少納言をちかづけて、これこそよきひまよ、いざ出で候はんとて、少納言御裝束など取りひそめければ、姫君御覽じて、涙のひまよりかくぞよみ給ふ。

わかれても又もあふせのあるならば涙の淵に身をばしづめじ

かやうに詠じ給ひて、少納言もろともに都をい

歸らぬまでは―歸らんまでは の誤　まほらせ―守らせ

で、稲荷の明神さま、われふるさとへ歸らぬまでは、難なくまほらせ給へとて、涙と共に出でたまふ、心のうちぞあはれなる。深草を通るとて、都の方を見送りて、たゞずみたまへば、折ふし荻の葉に露しめ〴〵とうち置きて、いとものあはれに、

おもひいづる身は深草の荻の葉の露にしをるゝわが袂かな

かやうにうちながめ、やう〳〵行く程に、古塚にこそ著きにけれ。きしゆごぜんの歸らせ給ふと、はした狐のいひければ、父母きゝもあへず、こはいかにとて驅けいで、此三年が程みえたまはねば、いかならん獵人などにも行き遇ひ給ひて、雁股の一筋もあたり給ふらんか、または鷹犬などにもくはれさせ給ふらんと、さま〴〵歎きくらせしに、これは夢かや、うつゝかや、嬉しき中にも涙にて、袂にすがりつき、あらめづらしや、こん〳〵、いづくにおはせしぞ、こん〳〵と、のみ言ひければ、めのと少納言はじめをはりの事どもを、こま〴〵と語りけり。父母きゝて、さてはかやうに近きあたりに住みながらへておはせしに、今まで知らせざりし少納言こそ恨しけれとて、一門眷屬さし集りて、よろこびの酒盛はことわりとぞ聞えけり。

かやうにめでたき事限りなし。中にもきしゆごぜんは、たゞ若君、中將殿の御事のみ戀しくて、さら〳〵浮世に御心もとまらず、樣をかへさせ、菩提の道に入らんと案じ、又こはたの塚を立ちいでて、嵯峨野のかたへ分け入りて、庵室を結び、みどりの髪を剃りおとし、この世は假の宿、電光朝露ゆめまぼろしの事なれば、今此時生死輪廻を免れ、未來は必ず一つはちすの臺に生れんと願はれけり。さても都には、中將殿内裏より御いとま申して、わが御所に歸り給ふが、御前も少納言も見えたまはず、若君は乳母の膝によりふして、母上のうせ給ひし御事、深く歎きたまひけり。中將殿はいかなる御事ぞやと、御歎きなか〳〵たとへん方もなし。常に住み給ひし所御覽ずれば、さま〴〵の御名殘をしき御事、かきつくし給ふ御事かぎりなし。われこそ緣つくるとも、若君さへ生ひたちたまはゞ、何の怨にか出でたまふぞと、御歎きかぎりなし。春日の御局、若君の御乳の人に事の子細をたづね給へども、何とも知りまゐらせ候はず、若君さまへ犬まゐり候てより、少納言殿ことのほか顔の色かはり、世に怨しげにのたまひしよりほかは、見まゐらせず候ふ、何事も候はず候ふと申しけり。中將殿きこしめし、よし〳〵その身は何にてもあれ、せめて此若七歳までは、などか一つにあらざらんと、御歎きは申すばかりなし。しかるに其後こゝかしこより、北の方むかへさせ給へと申しけれども、其色もましまさず。

われこそ―汝こそ

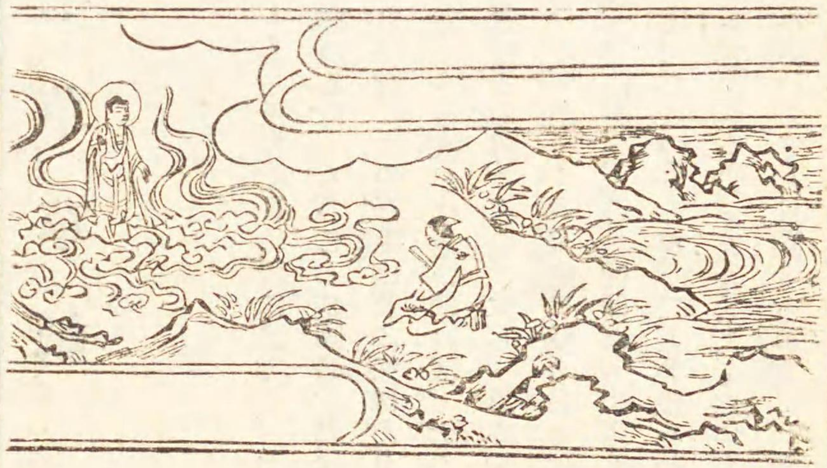
只この御別れのみ歎かせ給ひけり。かやうにして年月を送り給ふほどに、若君はとりどり繁昌させたまひ、するゑ繁昌と聞え給ふ。さるほどに、かの庵室(あんじつ)には都の事のみ戀しくてすごし給ふ。さりながら若君の御榮えよそ〳〵ながら見給ひて、嬉しさかぎりなし。若君はいよ〳〵峯に上り、花を折り、谷の水をむすび、少納言もろともに彌陀の名號(みやうがう)唱へ、行ひすまし給ひけり。かゝる畜類だにも、後生菩提の道を願ふならひなり、いはんや人間としてなどか此道をなげかざらん。かやうにやさしき事なれば、書きつたへ申すなり書きつたへ申すなり。

七草草紙

七草草紙

そも〳〵正月七日に野に出でて、七草をつみて、みかどへ供御に備ふるといふなる由來を尋ぬるに、もろこし楚國のかたはらに、大しうといふ者あり。かれは親に孝あるものなり。既にはや百年に及ぶ父母あり、腰などもかゞみ、目などもかすみ、言ふことも聞えず。さるほどに老いければ、大しうこの朽ちはてたる御姿を見まゐらするたびに、歎き悲むこと限りなし。大しう思ふやうは、二人の親の御姿を、二たび若くなさまほしく思ひて、あけくれ天道に禱りけるは、わが親の御姿ふたゝび若くなしてたび給へと、佛神三寶に訴へ、これ叶はぬものならば、わが姿に轉じかへてたび給へ、わが身は老となりて朽ちはつるとも、二人の親をわかくなし給へと、あたり近きとうこう山によぢ上りて、三七日が間つまさきをつまだてて、肝膽を碎き祈りける。さても諸天諸佛は、これを憐み給ひ、三七日滿ずる暮方に、かたじけなくも、帝釋天王は天降り給ひ、大しうに向

りんしんかいほん―りんしんは龍神の訛なるべし、かいほんは考へ得ず



つての給ふやうは、汝淺からず親をあはれみ、偏に天道に訴ふる事、上は梵天帝釋上品上生、下はりんしんかいほんまでも、納受を垂れ給ふによつて、われこれまで來るなり、いで〳〵汝が親を若くなさんとて、藥を與へ給ふぞありがたき。しかるに須彌の南に白鷺鳥といふ鳥あり、かの鳥の長生をする事八千年なり、この鳥春の初ごとに、七色の草を集めて服するゆゑに、長生をするなり、白鷺鳥の命を、汝が親の命に轉じかへて取らせん、七種の草をあつめて、柳の木の盤にのせて、玉椿の枝にて、正月六日の酉の時より始めて、この草をうつべし、酉の時には芹といふ草をうつべし、戌の時には薺といふ草をうち、亥の時には、五形といふ草、子の時に

とうせん―前にはとうこうせんとあり、案ずるにとうせんは東山、とうこうせんは東梟山か

は、たびらことといふ草、丑の時には佛の座といふ草、寅の時にはすゞなといふ草、卯の時にはすゞしろといふ草をうちて、辰の時には七種の草を合せて、東の方より岩井の水をむすびあげて若水と名づけ、此水にて白鷺鳥の渡らぬさきに服するならば、一時に十年づゝの齡を經かへり、七時には七十年の年を忽ちに若くなりて、その後八千年までの壽命を汝親子三人へ授くるなりと、教へ給ふぞありがたき。大しう大きに喜び、とうせんより立ちかへり、をりしも頃は新玉の元日より、この草をあつめて、父母にこそ與へける。すでに正月七日には二人の親の御姿を見奉れば、忽ち二十ばかりに經かへりけり。大しうこれを見て、喜ぶこと限りなし。七草を正月七日に、みかどへ供ふる事は、この時より始まれり。又若菜、若水などといふことも、このいはれなるべし。さるほどに此事天下にかくれなし。帝も叡聞ましまして、世にたぐひなき事なりとて、いそぎ大しうを雲上へめされ、長安城のみかどの御位を、大しうにゆりづ給ふ。これすなはち親に孝あるゆゑなりと、聞く人殊勝にありがたく、皆感涙をもよほしけり。正月に筋もなき者を位になし給ふを、あるためしといふ事あり。これもこの時より始まれり。今の世までも、親孝行の人は天道の惠にあづかるべし。必ず人をあはれめば、其報早くしてわが身

のためになるとかや。大しう親を深くあはれみける故に、大王の御位になり給ふ。ありがたき事なりけるためしなり。

猿源氏草子

猿源氏草子

鰯かうえい―鰯買へといふ賣聲

中頃の事にやありけん、伊勢の國阿漕が浦に鰯賣一人あり。もとは海老名の六郎左衛門とて、關東ざぶらひにてぞありける。妻におくれて娘を一人もちたりしを、日頃召使ひける猿源氏といふものに取らせて、すなはち鰯賣の職をゆづり、わが身は都へのぼり、もとゆひ切り、えびなのなあみだぶつとて、隱れなき遁世者にぞありける。大名高家近づけ給へり。さるほどに婿の猿源氏鰯賣、都へ上りて、洛中を伊勢の國に阿漕が浦の猿源氏が、鰯かうえいといひて、商ひければ、人々これを聞きて、面白き鰯賣かなとて、人人買ひとる間、猿源氏、程なく有德の身となりにけり。猿源氏鰯賣るとて、五條の橋をわたりしが、折ふし網代の輿に行きあひしが、川風はげしくて、下簾をばつと吹きあげたる其隙より、輿の内の上臈を一目みしより戀となり、あけくれ思ひ煩ひて、心もそぞろに成りはてて、明くれば五條、暮るれば橋へ出でて、商賣更に身にしまずうちふ

あらぬかぎりーあらんかぎりの

ふとくーいたく、甚しく

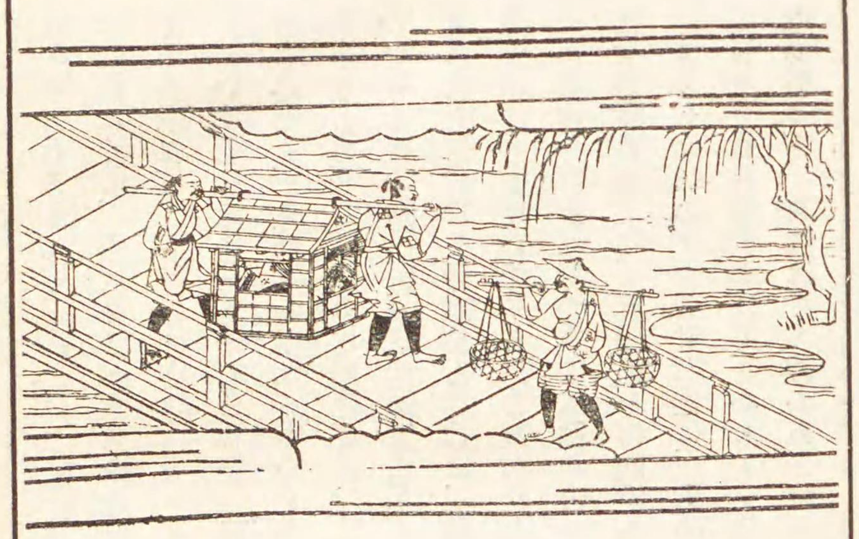
し、一首、

われば かり物思ふ人は又もあらじと思へば水のしたにも有りけり

と、ふるき歌など思ひ出だし、又かくなん、

命あらば又もやめぐり見もやせん結ぶの神のあらぬかぎりは

とよみ、淺ましき有樣、天命不定に見えにけり。なあみだぶ、此由きゝ給ひて、かれが宿へゆき、ありさま見給ひて、それ病といふものは、寒熱二つより起りて、五體を苦むるなり、汝が氣色は何とも見分けず、たゞふとく物を思ふと見えたり、いかにもして養生すべしと、ねんごろにの給へば、猿源氏おもふやう、此人と申すは、才學世にこえたりし人なれば、此事を語りなば、いかなる量見もありやせんと思ひ、申すやう、かやうの申し事、間柄にこそより候へ、はづかしき申し事にて侍れども、申さずして果てなば、妄執ふかき身となるべければ、恐れながら申すなり、わたくし不慮に戀といふ病にをかされてこそ候へ、いつぞや鰯をになひ候て、五條の橋を通りしに、網代の輿にゆき合ひしが、輿のうちなる上臈を一目見しより、その面影忘れかね、かりそめながらかやうになり候ふと、恥をすてて語りければ、なあみ聞きて、から〳〵とうち笑ひ給ひ、鰯賣の



戀をしたりといふためしいまだ聞かず、かまへて〳〵風聞すべからずとの給ひける。猿源氏申しけるは、これは御詞とも覺えぬものかな、魚賣の戀をしたるためしには、近江の國に堅田の浦より、鮒といふ魚を都にて賣りしに、あるとき内裏へもちてまゐりしに、折ふし今出川の局と申す上臈を拜みまつり、肝も魂も消えはてて、あまり思ひやまさりしに、御まへの女房たちを賴みまゐらせて、まことに賤の身として、恐れ多き申し事にて候へども、此魚を今出川の君さまへ奉り候ふまゝ、燒かせ給ひて參らせられ候はゞ、いかばかりかたじけなく思ひ奉らんと申しければ、下臈の身としてやさしき心ざしかなとて、かの鮒を燒きて參らせければ、鮒の

腹の中よりこまぐ〜と書きたる文いでにける、君御覽じて、いとあはれに思しめし、かたじけなくも、雲居をすべらせ給ひ、かの魚賣に契をこめ給ひしとなり、さればその心をある歌に、

いにしへはいともかしこき堅田鮒つゝみ燒きたる中のたまづさ

とよみしも、魚ゆゑの事ならずやと申しければ、なあみ聞き給ひて、さても汝はたとへを申すものかな、さりながら、それは御立姿までよく見ての戀、たゞ一目みての戀はおほつかなしとの給へば、猿源氏申すやう、一目みての戀したるためし、われに限らず、源氏の大將は女三の宮を御寵愛ありしに、程なく思しめし棄てさせ給ひ、葵の上に御心をうつさせ給ふ、源氏いかゞと思しめしけん、ある夕暮に、みやの車をやり入れさせ給ひて、鞠をあそばしける、御つめには柏木の右衛門督參り給ふ、女三の宮は、みす近うかけさせ、鞠を御覽ありしに、其頃猫を御寵愛ありしに、あけの綱にてつながせ給ひしが、折ふしかゝりへかけ出でんとせし程に、猫の綱にてみす上げければ、其隙より右衛門督、女三の宮を一目み給ひしより、心もそらになり給ひて、風の便に玉章を參らせ給へば、御返事ありて、其後は互の御心あさからず、あまつさへ御子いでき給ふ、源氏此若君を御

みやの—みやへか

あけの綱—あけは赤色

覽じて、

たが世にか種をまきしと人問はゞいふゞいはまの松はこたへん

とあそばし、其後は御おとづれも無かりしかば、女三の宮御樣をかへさせ給ふ、右衛門督は、其思ひのつもりにや、やがてはかなくなり給ふと、源氏物語に見えたり、それのみならず、一とせ難波いり江に橋の供養ありし時、渡邊左衛門盛遠は、時の奉行にてありしが、貴賤群集してかの供養を聽聞しける中に、笘屋形をしたる舟一艘、供養のきはまで漕ぎよせて、聽聞し侍るに、をりふし浦風はげしくて、下簾ふきあげける、そのひまより簾の内の上﨟を一目みしより戀となり、都へも上らず、それよりすぐに男山にまゐり、難波の浦にて見そめし人の行くへ知らせてたび候へと、誓誓を申しければ、かたじけなくも八幡枕上にたち給ひ、汝が戀ふる女は鳥羽の尼御前といふものの娘に、天女とて渡邊の左衛門が妻女なりしと教へ給ひて、夢は醒めぬ、それよりも鳥羽の尼御前の家の門のほとりに、ひれ臥して居たりければ、尼御前御覽じて、これはいづくより、いかなる人にて、何故わらはが門にうち臥し給ふぞと、たづね給へば、盛遠苦しげなる息をつぎ、その御事にて候ふ、恥しき申しごとに候へども、このまゝ消えなば冥途の障と

もなるべければ、申し上げ候ふ、すぎにし頃、難波の橋の供養のありし時、御身の姫天女御ぜんを一目み参らせしよりも、御おもかげ忘れがたくて、かやうに成りゆき候ふ、せめて此門のほとりに佇みなば、もし天女御前をも見奉ることもやと語りつゝ、われ空しくなり候はゞ、天女の君にかくと傳へてたび候へと語りければ、尼御前このよしを聞き給ひて、こはそも淺ましや、我子に人の思ひをかけしとすれば、貞女の法に背く、又はてなば長き怨を歸すべし、いかゞせんと思ひ煩ひ給ひしが、いや〳〵ものの命をたつ事は、ことに佛の戒め給ふなり、死して二たびかへらぬ冥途黄泉の路ぞかし、人を助くるは菩薩の行なりとおほして、俄に尼御前風の心地のよし告げしらせ給へば、天女御ぜんは取るものも取りあへず、輿をはやめて來り給へば、尼御前はいそぎ盛遠を一間所へ忍ばせ入れおきて、天女御前をおなじ所へ入れまゐられ給ふ。盛遠ゆめの心ちして、はじめよりの事どもをこまゞ〳〵と語りければ、天女は此由きこしめし、こはそも何とゆふがほの露とも消えばやとおほしけるが、又引きかへし思ふやう、待てしばし我心、母の仰せに從へば貞女の法をそむく、母のぎを背けば不孝のいたり淺からず、とかく詐らばやとおほしめし、いかに盛遠殿きこしめせ、げにみづからに御心をよせ給はゞ、みづから

まゐられ給ふ―まゐらせ給ふの衍なるべし

母のぎ―母の義にて、命令の意か

が夫の左衛門を討ち給へ、さもあらば御身と二世までの契をこむべし、只今かりの枕をならべなば、後の思ひものこるべし、さもなく左衛門をおきながら、御身になびく物ならば、貞女の道もちがひ、夫をうちての後は、心やすく契るべしと、ことこまやかに語りければ、その時盛遠よろこびて、さては左衛門を討ちなば、われに靡き給ふべきとや、それこそ易きあひだの事なれ、さりながらいかにして討つべきぞと言ひければ、天女の給ふは、酒を強ひて醉ひ臥したる所を、一間所へ忍び入り、うたせ給へと約束し、天女は宿へ歸りける、心細くおぼえて、御身にいつまで添ひたてまつらんなどと語りければ、左衛門は何となく胸うちさわぎ、尼御前の風の心ちはいかゞ御入り候ふや、さ月あめ降りつゞきて、時鳥の鳴くをりふしは、たれもさやうに物さびしく心細きぞかし、いざ〳〵慰まんとて、かずの肴を調へさせて、互に盃とりかはし、さ夜もなかばになりぬれば、袖に袖をとりちがへ睦じげにぞ臥しにける、左衛門は酒にゑひふし、前後もしらず臥しゐたり、その時天女靜に起き、左衛門が小袖をとり、天女これを著給ひて、左衛門が姿をまねびて臥したりけり、盛遠は約束の如く、宵より忍び入りて、一間所を見ければ、油火かすかにかき立てて、左衛門とおぼしくて、前後もしらず臥して

易きあひだ―易き程といふに同じ

あり、盛遠腰の刀をひきぬき、首を打落したりと思ひつゝ、しのびて宿にかへる、さるほどに天女の夫の左衛門は、目覺めてあたり見れば、天女はなし、不思議さよとて、一間所へゆきて見れば、天女は空しくなり、朱にそめてぞ臥しにける、左衛門あまりの悲しさに、屍骸に抱きつき、さてもこれは天女かや、いかなる者のしわざなりとも、うつつにも知るならば、かく憂目にはあはせじ物を、夢かやうつゝかと、流涕こがれ悲みけり、盛遠此由きくよりも、あら不思議や、左衛門をこそ討ちたりしか、天女といふこそ不思議なれ、もし天罰もあたり、天女を殺したるも知らずとて、行きて見つれば、疑ひもなく天女にてありける、盛遠心におもふやう、天女にたばかられし事の口をしさよ、腹を切らんと思ひしが、待てしばしわが心、夫の左衛門が心のうち、おし量られてあはれなり、死せん命を左衛門が手にかゝり死なばやと思ひて、盛遠は天女の首をもちて、左衛門が所へゆきて、いかに左衛門どの、心をしづめて聞き給へ、天女御前をば某が手にかけ殺し申し候ふ、その子細は過ぎにし頃、難波の橋の供養の時、天女御姿を一目みしより戀となり、ある時不思議のたよりに、われ〳〵が申すやう、夢ばかり枕をならべてたび給へ、さもなき事ならば、御身故何か命を惜しかるべき、爰にて空しくならんとい

朱にそめて―朱にそみてとありたし

天女御姿―天女の御姿の衍か

ひければ、天女のたまふは、御身に靡き候へば、貞女の法をそむく、又いなと申せば人の怨を被るといひ、既にはや御身空しくならんとのたまへば、思ひわけたるかたもなし、所詮只おもふ事あり、只今夫をもちながら、御身に靡くこともいかゞなり、さほどに思ひよる事ならば、つまの左衛門を殺し給はゞ、其後は淺からず契りなんとありしを、まことと思ひ、御身を討つと心得て、かやうにたばかられしことの口をしさよ、急ぎそれがしが首をうたせ給ひて、天女の孝養にもし給ひて、御身の胸の炎をも消し給へといひて、首をさしのべ待ちければ、左衛門あまりの無念さに、既に討たんとしたりしが、中にて心をひきかへし、いかに盛遠殿、御身を討ちたればとて、天女がかへるべきにあらず、其うへ九泉にかゝりし女なれば、わが菩提を弔はずば、たれかは跡を弔ふべき、助け參らすとて、そのぬきがたなにて元結をきり、墨染の身をやつし、天女御前を弔ひけり、盛遠もやがてそこにて元結をきり、天女の菩提をとはんとて、同じ樣にぞなりにける、盛遠は十九、左衛門は廿にて、もんしやうと名をつき、盛遠は文覺といひて、かくれなき智識となり給ふ、すなはち一目見し戀のゆゑならずと申しければ、なあみ此由聞き給ひ、汝はさて、たれやの人か言ひしを聞きて、さやうなるたとへどもをば申しける

孝養―供養の意

九泉―冥土

ぬきがたな―抜きたる刀

戀のゆゑならず―下にやの字脱落か

きんない―畿内

ぞや、それは皆々主をたれと、そのあり所を知りての戀なり、汝が戀はたれとも知らず、其すみかも知らずして、五條の橋にてかりそめに行きちがふとて、簾のひまよりちらと見たりし人を、虛空をさす如くなる戀をする物かなとのたまへば、猿源氏申すやう、人にたづねて候へば、五條の東の洞院に螢火と申す上臈にておはしますと敎へ侍ると申しければ、なあみ聞き給ひて、それこそ洛中にかくれなき遊君にて、日のくるれば、光りかゞやく女なれば、螢火と名づけたり、けいぐわとは、螢火と書きたり、たゞし公家門跡などの御娘ならば、いかなる量見もおよぶべかりしが、これは流れをたつる川竹の遊女なれば、大名高家よりほかへは出でず、汝は洛中をまはり、隱れもなき鰯賣なれば何としてか引きあはすべき、所詮大名のまねをせよかしとありければ、猿源氏かしこまつて、われ〳〵もさやうに、かねゞ〳〵思ひ候ふと申しければ、なあみの給ふは、ふゐい、細川、畠山、一色、赤松、土岐、佐々木、これらをはじめきんない近國の大名は、不斷知りたる事なれば似せがたし、關東ざぶらひには宇都宮の彈正どのは、いまだ上洛なし、しかも近きうちに在京あるべきよし聞きてあれば、よき仕合なり、宇都宮のまねをして見よかしとの給へば、猿源氏申しけるは、われらもさやうに存じ候ふ、その子細は宇都宮

おとな―家老

公方―將軍

殿のみうちに、親類をもちて候ふほどに、かの殿のふだんの行儀を委しく知りて候ふと申せば、なあみ、さては事とゝのへり、さりながら宇都宮は大名なれば、殿原、小姓、同朋、其外小者中間にいたるまで、次第々々の人なくしては成るべからずとの給へば、それは御心安くおほしめせ、鰯賣の傍輩二三百人もさぶらふ、彼等をそれ〴〵に出でたゝせ、さぶらひにも、小者にもなし申すべし、われらが東隣の六郎左衞門と申す人は、よき人物なれば、これをおとなになし申すべしと申しければ、なあみ、もつともとぞ申しける。さるほどに猿源氏は、まづ五條へ行きて申すやう、宇都宮殿は上洛とて、近江の國鏡守山に宿をとり給ふと、風聞させければ、宇都宮殿大名なれば、京中の遊君ども定めておとづれあるべしとて、座敷を飾り心待ちしてゐたり。さる程に又二三日すぎて、猿源氏五條あたりにて申す樣、宇都宮ははや京入し給ひて、既にけさ公方樣へ出仕なりと風聞させて、なあみはまづ螢火がもとへ行きければ、亭主出であひて、何とて此程は久しく御尋ねなされ候はぬぞや、只今はいづくへの御通りに候ふか、さだめて御道たがひならんと、戲れつゝ、はや若き女房十人ばかりいだし、盃をひかへ、主申すやう、誠やらん、宇都宮どの御上洛と風聞候ふが、いかゞと尋ねければ、その御事にて候ふ、わ

れらも關東にてまゐり逢ひたる人にて候ふまゝ、定めておとづれ給ふべし、上洛は一定にて候ふまゝ、其時わがみ出であひで、ない〳〵御上洛の事うけ給はり候ふゆゑ、御宿を申しつけ候ふまゝ、こなたへ御入り候へとて、請じ入れまゐらせんまゝ、その支度を御こしらへ候へ、座敷などの御掃除、また大軍にて候はんまゝ、小姓、若黨、道具持、その外家來の者までも、みな〳〵入れ申す所など、假屋なりとも御たて候へよ、其上座敷の飾物、なに〳〵御こしらへおき候ふや、御馳走のしな〴〵をいかにも結構めされつつ、御慰めの人々はたれ〳〵にてや候ふらん。其時亭主申すやう、いかやうにも、なあみ賴み申すうへは、女房どもどれ〳〵かとて、物ごとにこれらをも御見立て候ひて給はり候へとて、三十人ばかり出でたゝせて、なあみに見せ候へば、なあみこれを見て、いづれもうつくしく候へども、其内を十人えり出だし申す所に、門のほとりを見れば、廿二三ばかりなる男子、月毛の馬に梨地の蒔繪の鞍おかせ、白木の弓のまん中にぎり、腰より蟇目をいだし、犬を追ひつめ駒を引きかへす所を、なあみやがて申すやう、宇都宮殿とこそ見申して候へとて、はしり出でて見れば、件の宇都宮なりければ、なあみいかにやいかに宇都宮殿と見申して候ふ、亭主のうらみも候はんに、まづ立ち寄らせ給へとて、鐙に取りつきければ、かのにせ宇都宮馬よりゆらりとおりて、仰せのごとく内々は、それへおとづれ申さんと存じ候ひつれども、とかくまかり過ぎ、ことさら出仕などの樣體をも談合申さんと存じ候へば、急ぎまかり出づべきよし仰せいだされ、一兩日以前に出仕申して候ふ、無沙汰のいたり、御ゆるしあれ、必ず御宿所へまゐりて申すべしとて、馬ひき寄せて乘らんとせし處に、螢火、薄雲、春雨とて、その外の遊君十人ばかり立ち出でて、いかにや〳〵、情なくもまのあたりを通らせ給ふとて、打過ぎんとし給ふぞやといひて、袂にすがりつゝ、座敷へ手をひかれ、心ならぬ風情にて、座敷へ入りにけり。かくて宇都宮思ふやう、あら恥しや、思はずや、われ洛中をめぐり、鰯賣りし有樣、ひきかへたるさまかなと、思ふにつけても、なあみの心のうちこそ恥かしけれ。

こうろぎの盃―黑漆にてこうろぎ色の盃

さるほどに亭主は、物のひまより宇都宮をつく〴〵と見て、さても宇都宮は遠國ざぶらひなれども、器用骨柄尋常なる人かなと感じけり。さてあるじは蒔繪の盤にこうろぎの盃をすゑて、いかにや宇都宮殿、一つきこし召されて、たれにも御心ざしある方へさし給へと申しければ、宇都宮たぶ〳〵と受けて、心に思ふやう、われに心をつくさせけるゆゑ、螢火とやらんは、いづれならんと見るに、いづれも螢火に劣らぬ遊君どもなれば、あら

いろ〳〵―悠々

本―元手

螢火まぎれや、かほどに多き螢火なれば、一定盃をさし損ずべし、さし損ずるものならば、笑はれ候はん事の口をしかるべしと思ひ亂れ、彼是見まはしける中に、いう〳〵としたる遊君に盃をさしければ、螢火にてぞありける。螢火時の興をもよほし、めづらしの御盃さふらふやとて、取りあげて次第にめぐらしければ、のこりの君ども是を見て、あならやましの螢火かな、今より後のすて盃、さゝれても詮なしとて、座敷をたちし遊君もあり、居殘りてもてはやすもあり。その時なあみ申すやう、いかに宇都宮殿、洛中は日くれぬれば、小路物騷に候ふ間、まづ〳〵御歸りなされ、あすまた必ず御いで候へと申しければ、宇都宮まことにことの外のおほ酒にて、たちばを忘れて候ふ、いとまを申さん人々とて、宿へこそ歸りけれ。なあみはやがてきたり給ひて、さても宇都宮はよくもしあはせたるものかな、さりながら夕さり螢火來るべし、座敷よろづあるべきやうにこしらへて待つべし、又つかふ者ども醉ひたりしまぎれに、問はず語りをして、われも鰯を賣りそこなうた、われもけふは本を失うたなどと言はせては、恥がましかるべし、又寢言などして、いやしき風情をしては淺ましかるべしなどと、ねんごろに言ひ敎へて、なあみは宿へ歸りけり。案のごとく螢火たそがれ時に、宇都宮殿の宿とたづねて來りし

うへなしげ―上に憚る氣色なき

ねのび―寢伸

宇都宮かほ―宇都宮がかほの衍か

かば、さま〴〵慰めけり。螢火心に思ふやう、あら不思議や、宇都宮は大名とこそ聞きしにちがひ、家の子、又は同苗などもなくして、たゞ一人座敷にいで、よろづ賤しき有樣にて、内の者どもは聲高にして、うへなしげなる事のをかしさよと思ひ、しばしうちも寢入らずして、案じ煩ひしをりふし、宇都宮酒に醉ひ、さ夜ふけねのびして、大あくびをするまゝに、寢言に阿漕が浦の猿源氏が、鰯かうえいと言ひければ、螢火是を聞き、さればこそ初めより何とやらんをかしげに見えしが違はず、鰯賣にちぎりしことの悲しさよ、さてこれは何となり行くべきぞ、此事かくれあるまじければ、鰯賣に契をこめし心のほどきたなさよ、なまぐさやとて、召さるゝ人もあるまじければ、髮おろし、是よりいづくへも足にまかせて行かばやと思ひつゝ、さめ〴〵と泣く涙、宇都宮かほにかゝりければ、時雨がすると心得、やれ〳〵雨がふるさうな、子ども苦をふけと言ひもあへず、起きなほりてあたりを見れば、かゞやくほどの女房の、さめ〴〵と泣きゐたり。はづかしや、淺ましや、まさしく寐言をしつると覺えて申すやう、今の沈醉に正體もなく醉ひ伏し、何事を申したるも知らず候ふ、何とていね給はぬぞや。螢火きゝて、何事をのたまふぞや、御身は鰯賣にてましますぞや、とにかくに怨しきはなあみなりと言ひけれ

いぬ、かさかけ、しゝ、まるもの―犬、笠懸、草鹿、丸物の射藝

ば、われは宇都宮の彈正とこそ申し侍れ、鰯賣といふ名は知らず候ふ、今こそきゝ侍れと申せば、螢火思ふやう、一度にはど、あまり恥がましかるべしとて、一つづゝ問はれけるに、まづ阿漕が浦の寐言はいかにと申しければ、宇都宮申せしは、其事にて候ふ、それがし上洛は、此度がいまだ初めにて候へば、かたじけなくも御所樣御諚にて、何にても宇都宮を慰めよ、いぬ、かさかけ、しゝ、まるものの遊びはめづらしからず、當世人のもてあそぶは、詩歌連歌の道なり、ことに宇都宮は歌の道すきなるよし聞きたり、それそれとありしかば、佐々木四郎、はんかい四郎左衞門うけ給はり、天下の宗匠へ案内申し、各連衆まゐられけり、執筆は德大寺殿の御舍弟、十三にならせ給ふ御ちご、青蓮院殿の御弟子にて、手跡世にこえ給ふ、既に將軍御發句をいだされければ、それより次第に、おの〳〵あそばし、一順もすぐるをりふしに、「いとまあらずも鹽木とる浦」といふ句ありしに、「しほきとる阿漕が浦にひく網もたびかさなれば露れぞする」といふ歌の心をつけばやと、くりかへし〳〵案ずるまゝ、あこぎの浦といふ、寢言も申しつらんと陳じければ、それのみならず、はしといふ寢言はいかにといひければ、その事にて候、「渡りかねたるかくれがのはし」といふ句ありしに、ある歌に、

さゝやき―原本「さゝき」とあり一本によりて補ふ
ふるまひて―ふるみてにて付けふるしたりとの意

みちのくのさゝやきの橋中たえてふみだに今はかよはざりけり

熊野なるおとなし川に渡さばやさゝやきのはし忍びくに

とあり、此二首のうちを取りて付けばやと思ひしが、いやくこれは都の上手衆のつけふるまひて、めづらしからず、こゝに和泉式部と申す女に、保昌といふ人通ひはんべりて、淺からず契りしに、又道命法師といふもの通ひて契をこめしに、保昌此事をきゝて、和泉式部にいはく、わがいふ如く文をかき給へといへば、和泉式部はいかなる文をかけとはのたまふぞやと有りしかば、保昌も此程は見え候はず、御身は急ぎこし給へ、道命法師へまゐる、和泉式部と書き給へとありければ、和泉式部は顏うちあかめて、これは思ひもよらぬ事をのたまふものかなとありければ、力およばずして、文をかゝれけるが、いつのひまにかしたりけん、箸を五つに折りて、文にそへてやりけり、道命法師此文を見て、不思議やな、只今きたれと書かれけるが、はしを五つに折りて添へし事の不思議さよ、ある歌に、

やるはしをまことばししてきばししてうたればししてくやみばしすれ

といふことあり、一定此心なるべし、さては保昌ゐたまひて、かくなんと悟りて行かず、

しやうがい―生害か

中のきさき―末詳

きやう―末詳

しやうがいをのがれけるも、道命、和歌の道心得たりし故なり、此心もちをもつて思ひしことをば、此心をめづらかに付けばやと思ひて、案じ煩ひし程に、はしといふ寐言も申すべしと言ひければ、螢火それもさうあるらん、猿源氏といふ寐言はいかにといへば、宇都宮きゃて、さやうの事も申すべし、さるほどに中のきさきに參りければ、神祇、釋教、戀、無常、述懐、きやうに至るまで、心をくばりし折ふしに、

うらみわびたる猿澤の池

といふ句あり、これは昔あめのみかどの御時、采女といひし女に淺からず契り給ひし程なく思しめし捨てさせ給ひしを、采女うらみ奉り、夜半にまぎれ立ち出でて猿澤の池に身をなげ、空しくなりければ、みかど世に悲しく思しめし、いそぎ猿澤の池に御幸ありて、すなはち采女が屍骸をさがし、取りあげさせ給ひて、御覽あれば、さしもいつくしかりし翡翠のかんざし、嬋娟たる鬢、かつらのまゆずみ、柔和の姿引きかへて、池の藻屑とりつき、かはりはてたる有樣を御覽じて、かたじけなくも、みかど、

わきも子が寢亂れ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞかなしき

と御とぶらひの御歌なり、かの句は此歌の心をまねびける、そののち源氏春日大明神へ

當座―即席の歌

陳じ―辯解し

なごりをりの云云―百韻連歌の最終の紙の裏へかゝる處

御參詣のをりふし、猿澤の池を御見物ありしに、いにしへの采女が身を投げし事をおほしめし出でて、當座など遊ばして、御とぶらひありし時、よみ人しらず、

猿澤の池の柳やわきもこが寢みだれ髪のかたみなるらん

とよみ侍りし其心を思ひよせ案じければ、猿源氏などと寢言申しつらん、あらむつかしや、とく〳〵寢させ給へと申しけり。螢火又申すやうは　それのみならず、鰯かうえいとの給ひし寢言はいかゞ陳じ給ふべきぞやと言ひつゝ、をかしさに螢火から〳〵と笑ひければ、其時は宇都宮赤面して、既に鰯賣に極まらんとしけるが、心を沈めて申すやう、さやうの寢言をも申しつらん、連歌やう〳〵なごりをりのうら返しめと思しきに、

男山なにをいのりのいはし水

といふ句あり、人々の付けふるしは面白からず、只今申すごとく、和泉式部いわしと申すうをを食ひ給ふ所へ、保昌來りければ、和泉式部はづかしく思ひて、あわたゞしく鰯をかくし給へば、保昌みて鰯とは思ひよらず、道命法師よりの文をかくし給ふと心えて、何を深くかくさせ給ふぞや、心もとなしとて、あながちに問ひければ、

日の本にいはゝれ給ふいはしみづまゐらぬ人はあらじとぞ思ふ

ながめ―詠じ

思ひ内にあれば云々―諺

倉の内の財云々―實語教に「倉内財有朽、身内才無朽、雖積千兩金、不如一日學」

とながめ給へば、保昌聞き給ひて、色をなほして言ひけるは、はだへを溫め、ことに女の顏色をます藥魚なれば、用ひ給ひしを咎めしことよとて、それよりしてなほ〳〵淺からず契りしとなり、しかれば此心はめづらしかるべしと思ひめぐらして、案じ煩ひしほどに、いわしといふ寢言も申しつらん、あらむつかしの咎言や、今は何と問ひ給ふとも、返事をも申すまじと言ひければ、螢火其時おもふやう、まことの鰯賣ならば、かやうにさま〴〵の歌の道をばよも知らじ、げにや宇都宮はじめて上洛し給ひつれば、殿中の御ことばにまじはり給ふこと一大事と、思ひ内にあれば、色ほかに現れ、かやうに寢言をし給ふらんと、いとことわりに思ひなほして、互に下紐うち解けて、比翼連理のかたらひ淺からず見えにける。これと云ふもなあみにつかはれ、常に歌の道に心がけしゆゑ、當座の恥を隱すのみならず、及ばぬ戀の本意をとげし事、ひとへに物を知りたる威德なり。されば孔子のいはく、倉のうちの財はくつる事あり、身のうちの財はくつることなしとありしこと、今こそ思ひ知られけれ。さても宇都宮そののちは鰯賣の名をあらはし給へども、高きも賤しきも戀の道にへだてなければ、この世ならぬ契なればとて、阿漕が浦へうちつれて下りつゝ、富み榮えて子孫繁昌なりしも、たがひの志ふかきゆゑ、または歌の道淺かざりし故なれば、かへすゞ〳〵人毎に學び給ふべきは歌の道なるべし。

物

く

さ

太

郎

物くさ太郎

物くさ—無精者

しゆてん—主殿か

東山道陸奥の末、信濃の國十郡のその内に、つるまの郡あたらしの郷といふ所に、不思議の男一人侍りけり。其名を物くさ太郎ひぢかすと申し候ふ。名を物くさ太郎と申す事は、國にならびなき程の物くさしなり。たゞし名こそ物くさ太郎と申せども、家づくりの有様、人にすぐれてめでたくぞ侍りける。四面四町に築地をつき、三方に門を立て、東西南北に池を掘り、島を築き松杉をうゑ、島より陸地へ反橋をかけ、高欄にぎぼうしを磨き、まことに結構世にこえたり。十二間の遠侍、九間のわたり廊下、釣殿、細殿、梅壺、桐壺、籬が壺にいたるまで、百種の花をうゑ、しゆてん十二間につくり、檜皮葺にふかせ、錦をもつて天井をはり、桁うつばりたる木のくみ入には、白銀黄金を金物にうち、瓔珞の簾をかけ、厩さぶらひ所にいたるまで、ゆゝしく作り立てて居ばやと、心には思へども、いろ〳〵事足らねば、たゞ竹を四本たて、薦をかけてぞ居たりける。雨の

ひぢの苔―肱の垢をいふ

もと―まへかどの意

小鷹狩―小鷹狩にの衍か

ふるにも、日の照るにも、習はぬすまひしてゐたり。かやうに作りわろしとは申せども、あし手のあかがり、のみ、虱、ひぢの苔にいたるまで、足らはずといふ事なし。もとでなければ商ひせず。物を作らねば食物なし。四五日のうちにも起きあがらず、ふせりゐたりけり。

ある時なさけある人の、もとあいきやうのもちひを五つ、いかにひだるかるらんとて得させければ、たまさかに待ち得たる事なれば、四つをば一度に喰ひ侍り。今一つを心に思ひけるやうは、ありと思ひて喰はねば、のちの頼みあり、無しと思へばひだるくなけれども頼みなし、まぼらえてあるも頼みなり、いつまでも人の物をえさせんまでは、もたばやと思ひて、寝ながら胸の上にてあそばかして、鼻油をひきて、口にぬらし、頭にいたどき、とりあそぶ程にとりすべらかし、大道までぞころびける。その時物くさ太郎見渡して思ふやう、取りに行きかへらんも物ぐさし、いつの頃にても、人の通らぬ事はあらじと、竹の棹を捧げて、犬烏のよるを追ひのけて、三日まで待つに人みえず。三日と申すに、たどの人にはあらず、その所の地頭あたらしの左衛門の尉のぶよりといふ人、小鷹狩まじろの鷹をするさせて、其勢五六十騎にてとほり給ふ。物くさ太郎これを見て、

くれ候はん―くれ候はぬの訛

もち候はん―もち候はぬの訛

鎌首もちあげて、のう申し候はん、それにもちひの候ふ、取りてたび候へと申しけれども、耳にも聞き入れずうち通りけり。物くさ太郎是を見て、世間にあれほど物くさき人の、いかにして所知所領をしるらん、あのもちひを馬よりおりて、取りてつたへん程の事はいと易き事、世の中に物くさきもの、われひとりと思へば多くありけるよと、あらうたての殿やとて、斜ならずつぶやき、腹をぞ立てにける。兵衛尉あらき人ならば腹をも立て、いか様にもあたり給ふべきに、馬をひかへて是を聞き、きやつめが事か、聞ゆる物くさ太郎といふものか。さん候ふ、ふたりとも候はどこそ、是が事にて候ふ。さておのれはいかやうにして過ぐるぞ。さん候ふ、人の物をくれ候ふ時は、何をもたぶる、くれ候はん時は、四五日も十日ばかりも、たど空しく過ぎ候ふと申しければ、さては不便の次第かな、命たすかる仕度をせよ、一樹の影に宿るとも、一河の流れを汲むことも、他生の縁となり、所こそ多きにわが所領の内に生れあふこと、前世の宿縁なり、地をつくりて過ぎよとありければ、もち候はんと申す。さらば取らせんとあり。物くさく候ふ程に地もほしからず候ふと申せば、商をして過ぎよとあれば、もとで候はずと申す。取らせんとありければ、今更習はぬ事、知らぬ事、成りがたく候ふと申せば、さてはかゝるく

あはぬは君の仰せ―無理なるは主君の命令といふ意にて諺なり

ながふ―長夫にて長期の人夫の意か

せ者かな、いでさらば助かるやうにせんとて、硯を取りよせて札を書きて、わが領内をまはす。此物くさ太郎に毎日三合飯を二度くはせ、酒を一度のますべし、さなからん者はわが領には叶ふべからずとふれられけり。まことに〳〵これぞあはぬは君の仰せかなとは思へども、かくの如くあるほどに、三年ぞ養ひける。三年と申す春の末に信濃の國の國司二條の大納言ありすると申す人、このあたらしの郷へながふをあてらる。百姓共寄りあひて、たがもとより誰をのぼせんぞ、遙にたえて習はぬこと、いかゞせんと歎く。ある人申すやう、いざ此物くさ太郎をしたてて上せんと言ひければ、思ひもよらず、もちひを大道へころばかし、おのれは立ち出で取り

みくじ―御籤

かつう―且

心つく―心の勇み立つをいふ

くわん―官

もせで、地頭殿の通り給ふに、取りて給へといふ程の者なりと申しければ、ある人是を聞き、それ體の者をすかせば、よき事もあり、いざ寄合ひてすかして見んとて、おとなしき人四五人よりあひて、かれが許に行きて、いかに物くさ太郎殿、われらが大事のみくじに當りて候ふを助けてたべ。何事にて候ふぞと申しければ、ながふといふものをあたりて候ふ。それはいくひろばかり長き物にて候ふぞ、おびたゞしの事やと言ひければ、いやさやうに長き物にてはなし、わがやうなる百姓の中より、都へ人をのぼせてつかはせ參らするをながふとは申すなり、御身を此三年が間養ひたる情に、のぼり給へといひければ、それはさら〳〵殿ばらの志にあらず、地頭殿より仰せにてこそあれとて、上るべきやうなし。またある人申しけるやうは、かつうは和殿のためなり、それをいかにと申すに、男は妻を具して心つく、女房は夫にそひて心つくなり、かくていぶせき賤が伏屋に、只ひとりおはせんより、心つく仕度をし給はぬか、それいはれあり、男はみたびの晴業に心つく、元服して魂つく、妻を具して魂つく、くわんをして魂つく、または海道なんどを通るに、殊更心つくなり、田舍の人こそ情をしらぬ、都の人はなさけありていかなる人をも嫌はず、色ふかき御人も、互に夫妻と頼み頼まるゞならひなり、されば

料足―錢

都へ上り、心あらん人にも相具して、心をもつき給はぬかと、やう〳〵に教訓すれば、物くさ太郎是を聞き、それこそ候ふなれ、その儀にて候はゞ、いそぎ上せてたび給へとて、出でたゝんとする。百姓ども皆々大きに悦び、料足をあつめて京へのぼせけり。東山科を上りに宿々を通りけるに、更にものくさき事なし。七日と申すに京へつき、是は信濃の國より參りたるながふにて候ふと申しければ、人々是を見て笑ひけり。あれ程色黑くきたなけなる者も、世にはありけるぞとて笑ひける。大納言殿は聞召し、いかやうにもあれ、まめにて使はれなば然るべしとて召しつかはれける。都にてのありさま、信濃の國にはまさりけり。東山、西山、御所内裏、堂、宮、社、面白くたつとさ、申すばかりなし。少しも物くさげなるけしきもなし。是程にまめなる者あらじとて、三月のながふを七月まで召しつかはれ、やう〳〵十一月の頃にもなりぬれば、いとまを給はりて國に下りなんと、此程の宿にかへり、我身を觀じて思ふやう、都へ上りたらん時は、よき女房にあひつれて下れなんどと言ひしに、ひとり下らんこと餘りにさびしからん、女房一人たづねばやと思ひ、宿の亭主を近づけて、信濃へ下り候ふ、しかるべくば我等がやうなるものの妻になり候はんずる女、一人たづねてたび候へと申しければ　宿の男はこ

たくらだ―愚人

さゆみ―さよみの轉訛、麻布の粗なるもの

れを聞き、いかなる者かおのれが女房になるべきと言ひて笑ひける。さりながらかれが言ふことにつきて言ふやう、尋ねんことは易き事なれども、夫妻といふ事は、大事の物ぞ、色ごのみ尋ねて呼べかし。いろ好みとは何事ぞ、いかなる物を申すぞと問ひければ、主なき女を呼びて、料足を取らせて逢ふ事を、色ごのみといふなり。其義ならばたづねてたび候へ、下り用意につかひ錢十二三文あり、是をとらせてたび候へと申しければ、宿の亭主は是をきゝ、扨も〳〵是程のたくらだは無しと思ひて、又いふ樣は、その義ならば、辻とりをせよといふ。辻とりとは何事ぞや。辻とりとは男もつれず、輿車にも乘らぬ女房のみめよき、わが目にかゝるを取る事、天下の御ゆるしにてあるなりと教へければ、其義にて候はゞ取りてみんと申す。十一月十八日の事なるに、清水へ參りてねらへと教へければ、さらばとて出でたつ。其日の有樣は信濃より年をへて著たりけるさゆみのかたびらの、何色とも文も見えぬに、藁縄帶にして、物くさ草履のやぶれたるをはき、吳竹の杖をつき、十一月十八日の事なれば、風烈しく吹きて、いかにも寒きに、鼻をすすりて清水の大門にやけそとばの如く、立ちずくみにして、大手を廣げて待つところに、參り下向の人々是を見て、あなおそろしや、何を待ちてかやうにはあるらんとて、皆々

よけ道をして通れども、近づくものは更になし。あるひは十七八、二十よりうちの女房五人十人、うちつれ〳〵通れども、一目より外みざりける。かやうに立ちたる事、朝より其日の暮るゝまで、人數幾千萬と云ふ事なし。あれもわろし、是もわろしとためらひゐたる所に、女房一人出で來り、年ならば十七八かと見え侍り、形は春の花、翡翠のかんざしたをやかに、青黛のまゆずみは花やかにして、遠山の櫻に異ならず、嬋妍たる兩鬢は秋の蟬の羽に異ならず。三十二相八十種好の飽き滿ちて、金色の如來のごとし。踏みたる足のつまさきまでも、眉の愛敬とゝのへて、いろ〳〵の一重衣に、紅の千入の袴ふみしだき、うらなしうちはきて、たけに餘れるかんざしを、梅のにほひによせて、われに劣らね下女一人供に具してぞ參りたる。物くさ太郎是をみて、爰にこそわが北の方は出できぬれ、あつばれ疾く近づけかし、抱きつかん、口をも吸はゞやと思ひて、手ぐすねをひき、大手をひろげて待ち居たり。女房是を御覽じて、ともの下女を近づけて、あれは何ぞと問ひ給へば、人にて候ふと申しければ、あな恐しや、あのあたりをばいかにして通るべきぞとて、よけ道をして通りける。物くさ太郎是を見て、あら淺ましや、あなたへ行くぞや、手のびにしては叶ふまじと思ひて、大手をひろげて、つゝと寄り、いつ

うちなし―草履

くしげなる笠の内へ、きたなげなる面をさし入れて、顔に顔をさしあはせて、いかにや女房といひて、腰に抱きつきて見あげければ、東西くれはてて、更に御返事もの給はず。ゆききの人是を見て、あな恐しや、いたはしやとて、おの〳〵見ては通れども、よりつく者は更になし。男とりつめていふやうは、いかにや女房、遙にこそおぼえて候へ、をはら、しづはら、芹生の里、かうだう、かはさき、中山、長樂寺、清水、六波羅、六角堂、嵯峨法輪寺、太秦、醍醐、栗栖、木幡山、淀、八幡、住吉、鞍馬寺、五條の天神、貴船の明神、日吉、山王、祇園、北野、加茂、春日、所々にてまゐりあひて候ひしは、いかにいかにと申しける。女房是をきゝ、此者はいかさまにも田舍の者にてありけるを、宿の男の教へて、辻とりをせよと申してせさするよと思ひ、あれ體の者をばすかさばやと思ひ、それはさる事も候はん、今はこれにては人目もしげし、わらはがさぶらふ所へ、訪うて入らせ給へとありければ、いづくにて候ふぞと問ひければ、てうしの言葉をかけ、それをふくせんその内に、逃げばやと思しめし、わらはが候ふ所をば、松の本といふ所にて候ふ。物くさ太郎是をきゝ、松の本とは心得たり、明石の浦の事。かゝるきたいの事はなし、是一つをこそ聞き知るとも、よの事は知らじと思ひて、たゞし日くるゝ里に候ふ

東西くれはてー前後不覺に

芹生ー傍訓原本のまゝ

てうしの言葉ー調子かふくせんー言ひ伏せんとの意か

ぞ。日くるゝ里も心得たり、鞍馬の奥はどのほどぞ。これもわらはが故里よ、ともし火の小路をたづねよや。油の小路はどのほどぞ。是もわらはがふる里よ、はづかしの里に候ふよ。しのぶの里とはどのほどぞ。これもわらはが故里よ、うはぎの里に候ふ。錦の小路はどの程ぞ。是もわらはが故里よ、なぐさむ國に候ふは。それはこひして、近江の國はどの程ぞ。けしやうする曇なき里とのたまへば、鏡の宿はどの程ぞ。秋する國に候ふよ。因幡の國にはどのほどぞ。これもわらはが故里よ、はたちの國に候ふよ。若狭の國にはどのほどぞ。かやうにとかくいふ程に、此うへは吾身のがるべきやうなし、いやいや此者に、歌をよみかけ、それを案ぜぬ折ふしに、逃げ去らばやと思ひて、男のもちたる唐竹の杖によそへて、かくなん、

から竹を杖につきたる物なればふし添ひがたき人を見るかな

物くさ太郎これを聞き、あなくちをしや、さてわれと寢じとござんなれと思ひ、御返ごと、

よろづ世の竹のよごとに添ふふしのなどからたけに節なかるべき

あなおそろしや、此男は吾とねんといふ、又姿には似ず、かゝる道を知りたることやさ

近江―逢ふ身にかけていふ
因幡―稲葉にかけていふ
ふし―節、臥し
よごと―一節毎、夜毎

しさよと、思しめして、

はなせかし網の絲目のしげければこの手をはなれ物語せん

物くさ太郎是を聞き、さて手を許せとござんなれ、いかゞせんと思ひて、又かくぞ、

何かこの網の絲目はしげくともくちを吸はせよ手をばゆるさん

とよみかへし申しければ、女房時刻うつりて叶はじと思しめして、又かくなん、

思ふなら問ひても來ませ我宿はからたちばなの紫のかど

物くさ太郎此御詞を案じ、少しゆるす所にふりはなし、笠をも御衣裝などまでも打ち捨てて、裏なしをも踏みぬぎ、かちはだしにて下女をもつれず、散り〴〵になりて逃げられけり。物くさ太郎あな淺ましや、わが女房取りにがしつる事よと思ひて、唐竹の杖くきみじかにおつとり、女房いづかたへ行くぞとて追ひまはりけり。

女房は是を最後と思しめして、案内は知り給ひたり、あなたの小路、こなたの辻、こゝかしこを巡りちがへ逃げ、春の風に花の散る如く逃げかくれ給へり。物くさ太郎是を見て、わごぜはいづくへ行くぞとて、あなたの小路へつゝと寄り、こなたの辻へ行きあひたり、すきをあらせず追ひつめけり。ある所にて追ひ失ひ、あとへ返りてさきを見れど

も人もなし。往來の人に問ひければ、知らずと答へて通りける。清水にて立つたりし所へ歸りきて、こなたむきにこそ女房は立つたりつれ、あなたへ向きてこそ、かやうの事をば言ひつれ、いづかたへ行きつらんと、もだへこがれけれども詮ぞなき。げに〳〵思ひ出だしたる事あり、からたちばな紫のかどとありつるに、尋ねて見ばやと思ひて、紙一かさねを竹にはさみ、あるさぶらひ所へ立ち入りて、是は田舍の者にて候ふが、門ふみ忘れて候ふが、さいじよからたちばな紫のかどにこそ仰せられしが、それしきの門はいづくに候ふらんと尋ねければ、七條の末に豐前の守の殿の御所こそからたちばな紫は有りしぞ、其小路むきて尋ねよと教へける。たづね行きて見れば、實にもそれなりけり。はやわが女房にあひたる心地して、うれしき事申すばかりなし。彼のやかたには、犬追物、笠懸、まりあそび、或は管絃碁將棊雙六をうち、今樣早歌、思ひ〳〵のあそびなり。あなたこなたへ行きて見れども、わが女房はなかりけり。もしも出づることもありなんと、椽のしたに隱れける。此女房御所にては侍從の局と申しける。更けゆくまで宮づかひして、わが局へ入らせたまふが、廣椽にたち出でて、なでしことい ふ下女を召して、いまだ月は出でさせ給はぬか、さもあれ、清水にての男は、いかにこれ程くらきに、それにゆ

さいじよ―最初か

き逢ひたらば、命もあらじなどと語り給へば、いま〳〵し、何のゆゑにか是までは來り候ふべき、なか〳〵仰せさふらへば、面影にたちて候ふと申しければ、物くさ太郎椽の下にて是をきゝ、是にこそ我北の方はあれ、扨も緣はつきぬものぞと嬉しくて、椽の下より躍りいで、いかにや女房、わごぜ故に心をつくし、骨をば折るぞとて、椽より上へあがりける。をみなへし是をきゝ、肝心も失せはてて、ころびまろびて、障子のうちへにげ入りて、しばしは呆れて肝魂も身にそはず、秋の夜に夢みる心ちして、大空なるけしきにておはしけるが、やゝありて、あな恐しのものの心や、是まで尋ねて來る不思議さよ、人こそ多きに、あれ程きたなげにいぶせき者に思ひかけられ、戀ひられたるこそ悲しけれとて、なでしこに語り歎き給ひける。かゝる所に、番の者ども立ち出でいふやうは、人のけしきのあるやらん、犬が吠ゆるといひて、人々さわぎけり。

女房おほしめしけるは、あら淺ましや、あの者を打殺さんも恐しや、さなきだに女は五障さんしゆに罪深きにとて、涙をながし給ひける。今宵ばかりは何か苦しき、かり宿してあけぼのにすかしてやれとて、ふるき疊をしきて居よとてたびたり。下女來りて、明けなば人に見えず、とく〳〵歸れとて、ある妻戸のきはに、いとならはぬ高麗緣の疊を

大空なる―茫然たる

五障さんしゆ―五障は轉輪王、梵天王、帝釋、魔王、佛となること能はざるをいふ、さんしゆは三從か、されば幼にして父母に從ひ長じて夫に從ひ老いて子に從ふをいふ

敷きゐたりけり。かなたこなた身をもだへ、ありきくたびれ、あはれ何にてもとくくれよかし、何をくるべきやらん、栗をくれられなば燒きてくふべし、柿、梨、もちひなんどをくれたらば、すきもなく食ふべし、酒をくれたらば十四五六七八杯も呑まう、何にてもとくくれよかしと、心を色々になして待ち居たる所に、栗、柿、梨、鬚籠に入れて、しほと小刀取りそへて出だしける。物くさ太郎是を見て、あな淺ましや、女房のみめには似ず、あまたの木實を、箱の蓋、たんしにも入れてくれよかし、馬牛などに物をくるる如くに、一つにとり具してくれたる事よ、まさなや、たどし子細あるべし、このみあまた一つにし、くれたるは、われに一つになりあはんと思ふ心かや、栗をたびたるは、くりごとすなとの心にや、梨をたびたるは、われは男もなしといふ心、柿としほとはなどやらん、いづれも歌によまばやと思ひて、

津の國のなにはの浦のかきなればうみわたらねどしほはつきけり

女房これを聞き、あなやさしの者の心や、泥の蓮、藁苞黄金とは、箇樣の事にてもや侍らん、是とらせよとて、紙を十かさねばかり出だされたり。是は何事やらんと思ひけるが、水莖のあとなき返事をせよといふ心ござんなれと思ひて、かくなん、

しほ―原本「しい」とあり、後文によりて改む
たんし―檀紙か
うみ―熟み、海
泥の蓮云々―泥中の蓮、藁苞に包める黄金といふ諺

ちはやぶるかみをつかひにたびたるはわれをやしろと思ふかや君

此うへは力なし、具してまゐり候へとて、小袖一かさね、大口、直垂、烏帽子、刀とゝのへて、是を召して參られよとぞ申しける。ひぢかす大きに喜び、めでたや〳〵とて、此程著たりける重代のきる物を、竹の杖にまきつけて、小袖をば今宵ばかりこそ貸し給はんずらん、あしたは著てかへらんずるぞ、いぬ、ゑのこ喰ふな、ぬす人とるなとて、椽の下へ投げ入れて、其後大口直垂きるやうを知らずして、首にあて、肩にかけ、是を煩はしくしけるを、下女とりつくろひて、烏帽子をきせんとす。髪を見るに塵埃虱など、いつの世に手をいれて、解きあげたるけしきもなし。されども漸うこしらへて、烏帽子をばおしかぶせ、なでしこ手をひきて、こなたへ〳〵とつれて行きければ、物くさ太郎、我國信濃にては、山岩石をこそありき習ひたれ、かやうに油さしたる板の上をば歩みならはず、こなたかなたと辷りまゐりけり。されども障子の内へおし入れて、なでしこは歸りけり。上臈の御前にまゐるとて、踏みすべりてあふのきにまろびけり。さらば餘の所にてもなくして、上臈の寶とも思召すてひきまるといふ琴の上に倒れかゝりて、琴をば微塵に損ひぬ。女房是を見て、あさまし、いかにせんと涙ぐみて、顔に紅葉をひき散ら

大口―袴の一種